

# 全道中

No.91

2022.3

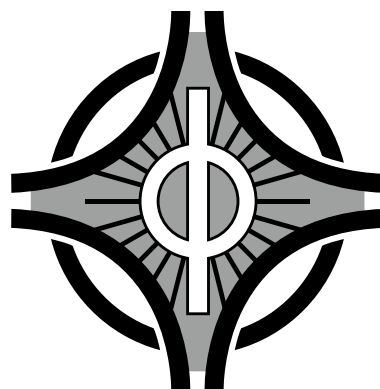


北海道中学校長会

No. 91

# 全道中

2022—3



## 運 営 方 針

- 1 校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、今後に向けた組織の充実・強化を図り、会の総力を結集して活動の効率化と諸問題の解決に努める。
- 2 道教委をはじめ、全日中、四種校長会等の教育関係諸機関やPTAをはじめとした諸団体と緊密に連携して教育課題の解決に当たるとともに、家庭や地域に信頼される学校づくりに努める。
- 3 校長の学校経営力の向上に寄与し、道民の負託にこたえる中学校教育の創造に努める。

北海道  
中学校長会

## 理事研修会



## 第72回 全日本中学校長会 総会・研修会 (5/20)



## 北海道小学校中学校校長会合同事務局研修会学習会 (7/16)



## 地区別教育経営研究会



## 事務局研修会



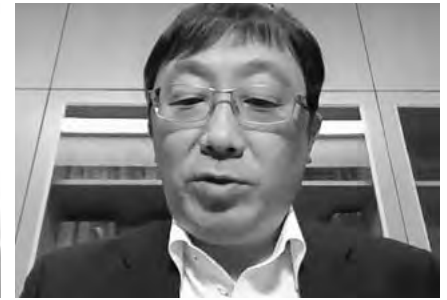
## 道教委との意見交換会・各課懇談会（7/26）



## 全日本中学校長会研究協議会 静岡大会（10/20～22）



# 北海道中学校長会研究大会 宗谷・稚内大会 (9/24)



巻頭言

◎新時代へ向かう全道の中学校教育……………北海道中学校長会会長 三浦利章…8

潮流

◎中学校教育の一層の充実を願って……………北海道教育委員会教育長 倉本博史…10

◎「令和の日本型学校教育」の実現に向けた道研の役割と管理職に期待すること……………北海道立教育研究所長 鈴木淳…12

論考

◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ学校経営「できることを伸ばす学校」経営……………旭川市・嵐山小中 山川俊巳…14

学校教育方針の深化を図る私作資料による校内研修……………上ノ国町・上ノ国中 大野正樹…15

安心と信頼のある学校づくり……………室蘭市・星蘭中 笹森恭之…16

自己肯定感・自己有用感を育む学校経営……………帯広市・川西中 今野典之…17

学校を創る……………北見市・光西中 伊藤勝…18

◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ生徒指導主体性を育てる小中一貫教育の推進……………小樽市・北陵中 岡本清豪…19

「未来を創る」子供たちを育む生徒指導……………函館市・戸井学園 佐々木理之…20

社会性・主体性を高める教育の創造……………釧路市・北中 水上俊司…21

心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ生徒指導……………札幌市・あいの里東中 佐田利典…22

◎心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ体験学習地域に学び、社会とつながる体験活動……………枝幸町・枝幸南中 菊地公一…23

地域との連携による体験学習……………南幌町・南幌中 小泉寧…24

地域への愛着と誇りを育む体験学習……………幕別町・忠類中 白井将之…25

身近な人材を活用した体験学習活動……………真狩村・真狩中 佐藤英治…26

# 特集

テーマ

◎学校教育の今日的な課題から 〓更なる学校力の向上を目指して〓  
学校改善の仕掛け

〓教員のベクトルをいかにそろえるか〓……………網走市・第三中 木野村 寧…28

「学びの共同体」の理念を生かした学校改革……………新ひだか町・静内第三中 小嶋 範 彦…31

〓全ての生徒の学ぶ権利を保障する学校づくり〓……………組織的な運動能力・運動意欲の育成に向けた取組

〓運動することの楽しさや喜びを味わうことや……………地域との連携を通じて〓……………小樽市・松ヶ枝中 岡崎 利 美…34

## 今年の道中

◎第六三回北海道中学校長会研究大会宗谷・稚内大会を終えて……………研修部長 小澤 保 範…37

◎第七二回全日本中学校長会研究協議会静岡大会提言概要

「カリキュラム・マネジメント」の推進

〓義務教育学校の特徴を生かした……………中標津町・計根別学園 村上 玄 一 郎…39

〓資質能力の向上を推進する……………小中一貫教育の推進を通して〓……………網走市・第二中 垣内 孝 仁…43

カリキュラム・マネジメントと校長の指導性〓……………

カリキュラム・マネジメントと校長の指導性〓……………

◎各部門の活動……………

令和三年度の活動及び当面する課題への対応について……………事務局長 越 田 公 美…47

各部の活動……………

各地区の活動……………

## 北海道風土記

田園福祉の村 ふれあいの里 新篠津……………新篠津村・新篠津中 吉 本 浩 志…75

自然の恵み野「わっさむ」町……………

〓日本一のカボチャ&越冬キャベツ〓……………和寒町・和寒中 中 間 靖 之…76

三浦綾子発 旭川市文芸散歩道……………旭川市・中央中 菅 藤 真 由 美…77

道南の交通の要衝、長万部〓北海道、ここが旅の始発駅〓……………長万部町・長万部中 雨 澤 啓 司…78

新「〇〇の街、歌志内」を目指して……………歌志内市・歌志内学園 織 田 靖 雄…79

歴史と文化を継承すアイヌとともに歩む「まち」	平取町・平取中	80
知らぬかった！白糠町	白糠町・茶路中	81
鮭に笑い、鮭に泣いた 標津の人々の歴史と文化	標津町・標津中	82
	飯田雄士	

## 文 芸

昭和五十年代に想いをはせる	石狩市・浜益中	83
若手教員の育成に思う	後志管内・岩内第二中	83
北海製罐第三倉庫	小樽市・銭函中	84
隔世の感	富良野市・富良野西中	84
早朝の散歩	旭川市・神楽中	85
「故郷」を想う	浜頓別町・浜頓別中	85
NHKドラマ『ひきこもり先生』から学ぶ	初山別村・初山別中	86
世界の窓から日本を眺めて	せたな町・瀬棚中	86
郷土の誇り	福島町・福島中	87
道草力	函館市・亀田中	87
校史の幕を閉じ、未来へ	滝川市・江部乙中	88
世代交代・時代交代	伊達市・大滝徳舞学校	88
廃線後に残る僅かな痕跡と大きな存在感	新ひだか町・静内中	89
全日中静岡大会に参加して	新得町・富村牛小中	89
カリキュラム・マネジメントを推進する	帯広市・清川中	90
大人の自由研究に挑戦！	厚岸町・真龍中	90
スピードスケートを通して	釧路市・美原中	91
すごいぞ！羅臼	羅臼町・知床未来中	91
お隣の国	清里町・清里中	92
目を奪われる	札幌市・澄川中	92

## 資 料

◎令和三年度 一般会計予算	豊富町・兜沼中	93
◎令和三年度北海道中学校長会役員・理事	佐藤佳弘	94
表紙に寄せて「稚内公園から望む稚内市街」	佐藤佳弘	95
編集後記	佐藤佳弘	95



# 巻頭言



## 新時代へ向かう全道の中学校教育

北海道中学校長会 会長 **三浦利章**

「叡智を結集し 新時代へ向かう 道中」を合言葉に、全道五六六人の会員の皆様から温かい御理解と御協力をいただきながら取り組んでまいりました令和三年度も間もなく新しい年度に引き継ぐ時を迎えようとしています。「新時代へ向かう」という言葉に込めた「新学習指導要領の実施、ウイズコロナ、ポストコロナ時代に、本道の子供たちの明るい未来の扉を開き、新しい道を拓く」との思いはまだまだ道半ばではありませんが、次に続く皆さんにしっかりとバトンを渡すことはできたと思います。改めて道中を支えていただいている皆様に心より感謝申し上げます。

さて、今年度を振り返ると道内では二度の緊急事態宣言を引き起こした新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、教育、経済、医療などあらゆる分野において、コミュニケーションのオンライン化を進展させるなど、社会的な変化や人々の行動様式に大きく影響を与え、世界を一変させました。特に、教育現場では影響も大きく、子供たちの学びを保障するために、感染拡大のリスクを可能な限り低減させた上で、どう教育活動を進めていくかなど、長期的な戦略をもった学校経営が必要な状況となりました。また、感染症の収束が見込めず、感染拡大に伴う、学校行事の中止、延期、変更、縮小や消毒作業など、教員の負担が大きくなり、学校は国が示す衛生管理マニュアル等を踏まえながら、教育活動を組織的且つ確実に実践するよう求められました。その渦中にあつて各学校では校長のリーダーシップのもと、感染防止と子供の学びの保障に向けて教職員が一丸となつて対応していただいたことに深く敬意を表するとともに感謝申し上げます。各学校の校長先生方は毎日、薄氷を踏む思いで、リーダーシップを発揮し、先生方、子供たちを導いていたのではないのでしょうか。

今年度、GIGAスクール構想元年と言われ、各学校では一人一台端末、クラウドが整備されました。これからの教育においてはこれらを活用し、全ての子供たちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する「令和の日本型学校教育」が示され、私たちはそこに向かっていくこととなります。そこには子供一人一人の興味・関心、発達の程度などが異なることを前提として、自らの学びに向けた主体的な活動へ意欲をもたせることが大切になり、自己実現に関わる資質や能力を育成し、学ぶ意欲やチャレンジ精神、忍耐力、豊かな感性や思いやりの心、多様性を受容する力など、人間関係の在り方や国際社会を生きる人間として地球規模の課題についても考えることができる力を育成することが求められます。そのためにも子供の好奇心を磨き好奇心をつぶさない、子供の可能性のチャンネルを広げる教育活動の視点が重要だと思えます。

また、全日本中学校長会では、昨年度の第七一回総会において「全日中新教育ビジョン―学校からの教育改革―」を策定しました。「全日中新教育ビジョン」では、変化の激しい時代をたくましく生き抜く子供たちにとって、バランスよく知・徳・体を「未来を創る力」と位置付けるとともに、社会全体が子供たちの成長に責任をもつ必要があることから、学校・家庭・地域を「力を育てる場」とし、「一〇の提言」を示しています。これはいずれも学校が取り組むべき具体的な目標であり、全ての学校がこれらを目標とし、子供や地域の実態等を踏まえ一つ一つ教育活動を実践していくことに大きな意義があると考えます。道中においても、今年度の運営方針及び活動の重点に全日中新教育ビジョンの内容を踏まえ、校長会の組織と機能を充実し、活動の活性化を図ることとしています。ぜひ、全日中新教育ビジョンと自校の取組を照らし合わせ、次年度の教育活動も計画していただきたいと思ひます。

そして、道中、地区校長会も今以上に一層力をつけ、アンテナを高く張り、新たな職能の向上に向かって令和の時代を進んで行くことが重要だと考えます。このようなコロナの時代だからこそ「オール北海道」で、それぞれの地区にとって必要な情報の提供と交流を通して、より一層結束を強めていくことが大切です。今年度、会同やオンラインで地区別教育経営研究会に参加させていただき、それぞれの校長会が抱えている課題に真摯に向き合っている多くの校長先生方と交流させていただきました。そこでは、改めて組織を動かすのは人であり、同じ校長という職責を担う者同士が意見を交わし、心を通わせることが、道中という組織をより確かなもの・強固なものにしていくのだと実感することができました。

教育は時の社会、政治、経済などの情勢と関わりをもっています。社会が変化すれば、私たちの立場も微妙に変わり、子供たちが変化すれば保護者も変わります。しかし、どんなに世の中が変わろうとも私たちはこれまでどおり目の前にいる子供たちをしつかりと見て真剣に取り組まなければなりません。あわてず揺れ動く必要はありません。私たちの身の回りには現状に対するやり場のない不安や不満が渦巻いています。この先の見通しは不透明で暗いことがあるかもしれませんが、そうであれば、なおさらのこと、一歩前へ進みたいと思ひます。上を見たらキリがないので上を見ず、下を見るのは後がないのでやめて、時に殺伐とした事件が起きてもみんなで仲良く力を出し合って明るく未来を信じたいと思ひます。

結びになりますが、令和四年度は、全日本中学校長会協議会が札幌で開催されます。研究基本主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」による四か年継続研究も、全国各地区校長会の実践の交流と地区を越えた校長同士の交流を通して、北海道の中学校教育の振興に果たしてきた本会の足跡・役割を再認識し、新しい時代の展望を内外に示す大会となるよう大いに期待しています。どうぞ今後とも会員の皆様の御理解と御協力をよろしくお願ひ申し上げます。

# 潮流



## 中学校教育の一層の充実を願って

北海道教育委員会 教育長 倉本博史

北海道中学校長会におかれましては、本道の中学校教育の改善・充実  
はもとより、本道の教育行政の推進に特段の御理解と御協力をいただ  
いていることに心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症への対応が続く中、今、求められる中学校  
教育の充実に向け、大きく三点にわたり、述べさせていただきます。

### 一 ウイズコロナ・ポストコロナにおける新たな学びについて

#### (一) 新型コロナウイルス感染症対策の徹底

学校においては、衛生管理マニュアルに基づき対応いただいていると  
ころであり、変異株であっても、基本的な感染予防対策は従来株と変わ  
らず、「三つの密」の回避、マスクの適切な着用、こまめな換気、手洗い  
などの基本的な感染症対策が推奨されています。

また、感染者や濃厚接触者等の生徒やその家族への偏見・差別、誹謗  
中傷につながる言葉や行動は、決して許されるものではありません。学  
校や地域において、そうしたことが起こらないよう新型コロナウイルス  
感染症に関する正しい理解の促進と指導の徹底を図っていただき、生徒  
一人一人が安全・安心に学校生活を送ることができるよう適切な対応を  
お願いします。

#### (二) 学びの保障に向けた取組

コロナ禍においては、学校における感染拡大のリスクを可能な限り低  
減した上で、学校運営を継続し、生徒一人一人の学びを保障していくこ  
とが重要です。各学校においては、新型コロナウイルス感染症の影響に  
よりやむを得ず学校に登校できない生徒に対する学びの保障に向け、一  
人一台端末の家庭への持ち帰り等により、クラウドサービス等を活用し

た学習課題や授業動画の配信、双方向のコミュニケーションによるオン  
ライン学習を実施するなど、新しい時代の学びの実現に向けた環境整備  
を進めていただくようお願いいたします。

### 二 生涯を通じ、個性が輝き、豊かさを実感できる教育の推進について

#### (一) 学力向上の取組

令和三年度全国学力・学習状況調査の結果から、中学校は全国平均と  
の差が縮まるなど改善の傾向が見られますが、二教科とも全国平均に届  
いていない状況にあり、自分の考えをもち、筋道を立てて説明すること  
などに課題が見られることや、授業以外で勉強する時間が短く、ゲーム  
をする時間が長いなどの傾向が見られます。

このため、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善や、小学  
校と中学校の連携の強化、望ましい生活習慣・学習習慣の確立に向けた  
取組を一層充実させることが必要であり、各学校においては、CBT化  
を図っているチャレンジテストの活用をはじめ、北海道版結果報告書に  
掲載している取組例や授業アイデア例などを参考に、校長のリーダー  
シップの下、組織的な授業改善等を推進され、学力向上を図っていただ  
くようお願いいたします。

#### (二) 個別最適な学びと協働的な学びの実現

学習指導要領の着実な実施に向けて、ICTを最大限活用しながら、  
多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」  
と多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」を一体的に充実させ、  
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげるこ  
とが重要です。各学校においては、生徒の発達の段階を踏まえつつ、生徒

一人一人の様々な能力・適正、興味・関心、性格、学習経験等を的確に捉え、発達を支援するとともに、生徒の実態に応じて、学習内容の確実な定着を図る観点や、その理解を深め、広げる学習を充実させる観点から、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図っていただくようお願いいたします。

### (三) 特別支援教育の充実

特別支援教育については、特に経験の浅い教員の専門性の向上が喫緊の課題となっております。本年度は、各管内で特別支援教育推進の中核の役割を担うリーダー教員等による授業公開をオンラインで行うなど、新たな研修スタイルの提案等を行ってまいりました。各学校においては、このような機会を活用するなど、組織的、計画的な専門性向上への取組の充実に努めていただくようお願いいたします。

### (四) ICTを活用した教育の充実

GIGAスクール構想によって整備された、一人一台端末と高速大容量の通信ネットワークを効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることにより、学習の基盤となる資質・能力である情報活用能力の育成を図るとともに、各教科等で育成を目指す資質・能力の向上に取り組んでいただくようお願いいたします。

### (五) 生徒指導の充実

コロナ禍により生徒が様々な不安や悩みを抱える中、各学校においては、生徒理解を基盤とした指導体制の一層の充実が求められています。いじめ問題への対応については、教職員や学年、指導部が対応を担い、まなびよう改めて指導体制を点検するとともに、校長は、強力なリーダーシップと危機管理意識をもって「学校いじめ対策組織」を中核とした未然防止、早期発見・早期対応を徹底し、生徒がいじめの被害者にも加害者にもなることなく、安全・安心に過ごすことができる学校づくりに、力を尽くしていただくようお願いいたします。

### (六) 学校における働き方改革

北海道アクション・プラン(第二期)では、学校における働き方改革は、各学校の教育目標の実現に向けて、限られた人的・物的資源をどのように投入するかという学校運営そのものであると明示しております。今後、働き方改革のコアチームの設置や手引「Road」の積極的な活用等により組織的な取組を進めていただくようお願いいたします。

### (七) 服務規程の徹底

服務規程の徹底については、教職員による不祥事が後を絶たず、道民の信頼を大きく損なう事態となりうる飲酒運転などの重大かつ悪質な事故が発生しておりますことから、職員を指導する立場にある校長の皆さまには、自らを厳しく律するとともに、これまで以上に危機感をもって取り組んでいただくようお願いいたします。

### 三 北海道への誇りと愛着を持ち、未来を切り拓く人づくりについて

#### (一) 地学協働体制の構築

地学協働体制の構築については、「コミュニティ・スクール」と「地域学校協働活動」を一体的に推進することが重要です。各学校においては、地域の方々と次の次代を担う子供たちに対してどのような資質・能力を育むのかという目標を共有し、地域の様々な方々の参画を得た学習支援や体験活動などの取組をより一層進めていただくようお願いいたします。

#### (二) 北海道の文化について学ぶ機会の充実

昨年七月「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産として登録されました。人類にとつての顕著な普遍的価値が認められたこの遺跡群をはじめとした地域の文化財は、生徒に郷土への愛着や誇りを育むための貴重な教育資源であることから、学校教育の中で活用するなど、学習機会の充実に努めていただくようお願いいたします。

終わりに、社会の急激な変化に加え、一般の新型コロナウイルス感染症の影響により、予測困難な状況が続く中、生徒一人一人が、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められています。そのためには、校長のリーダーシップの下、複雑化・多様化する学校の諸課題の解決に向け、組織として教育活動に取り組み体制を整備するとともに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現により、学習指導要領を着実に実施し、学校を社会に開かれたものとしていくことが重要です。

道教委といたしましても、こうした様々な教育課題の解決に向け、貴校長会との絆をより一層深めていく必要があると考えております。今後、引き続き、緊密な連携・協力をお願い申し上げますとともに、貴校長会のみならずの御発展を心から祈念申し上げます、会誌の発刊に寄せる言葉とします。



# 「令和の日本型学校教育」の実現に向けた 道研の役割と管理職に期待すること

北海道立教育研究所 所長 鈴木 淳

## ■はじめに

今年度は、小学校に続き、中学校において、新学習指導要領の全面実施という大きな転換期でありました。校長先生一人一人にとって、新型コロナウイルス感染症への危機感をもったリスクマネジメント等が求められる中、GIGAスクール構想によって導入された一人一台端末の活用や、令和三年一月の「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」

(答申)を踏まえた「個別最適な学び」、「協働的な学び」の実現に向けた取組を着実に進めるなど、経営マネジメントが試される年になったことと思います。社会の在り方や学校を取り巻く状況が、これまでにならぬスピードで予測不可能に変化する中、各校長先生が、学校組織を一つに、家庭や地域と連携・協働しながら教育活動に取り組みされていることに、改めて、この場をお借りし、心から敬意を表したいと思います。

元号が令和に変わって以来、「令和の〇〇」というフレーズをよく目にしますが、既に御承知のとおり、昨年十一月に公表された「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて」(審議のまとめ)では、

- ・ たゆみなく新たな知識技能の修得に取り組み続けること
- ・ 一定の前提の下で設計された、座学を中心とする「知識伝達型」の受け身の学びから、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」を重視したスタイルの学びへパラダイム転換すること
- ・ 具体的な経験を振り返り、抽象化・概念化して活用していくこと
- ・ 学びが全体として変化に対応した適切なものになっているか、教師自身、他者との対話も通じながら、不断の検証を行っていくこと
- ・ 教師自身が、共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超え

て、新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばす必要性から、教師一人一人の個別最適な学びが求められること  
など、「新たな教師の学びの姿」が示されており、令和の時代における教員研修の在り方が問われています。

## ■「学びのスタイルの転換」に向けた道研の新たな取組

昨年度以来、コロナ禍における北海道としての新しい研修様式を模索する中、道研では、働き方改革にも配慮しながら、教員のニーズをしっかりと受け止めた多様な研修を実施できるよう、各研修様式の特徴を最大限に発揮させ、それらを目的に応じて統合するなどの工夫を行っており、令和四年度に向けて、さらに、「また受けた

**「道研で実施する研修」**

**R3 <教員研修の新たなステージ～不断の実践・検証・深化～北海道における「令和型」教員研修を追究>**

①集合型 ②分散型 ③ハイブリッド型 ④遠隔型 ⑤紙上型

Ⅰ「研究と研修の好循環」に基づく専門性の深化  
・ 指導方法や指導体制の工夫改善による「個に応じた指導」の充実  
Ⅱ「研修様式の最適な組合せ」に基づく研修効果の向上  
・ 1つの研修場域の中で複数の研修種別を組み合わせた研修効果の向上

**<北海道の現状>**  
個別最適な学びと協働的な学びを実現する授業改革、望ましい学習・生活習慣の確立等に一層取り組む必要がある。  
ICTを活用した教育については、子どもたちが「情報技術」を手段として学習等に利活用できるよう授業内容の充実等に一層取り組む必要がある。  
→教員が抱えている課題や困り感を研修を通じて解決する必要がある。

**<国の動向>『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方特別部会」等**  
・ 指導方法や指導体制の工夫改善による「個に応じた指導」の充実  
・ 子ども一人一人の学びを最大限引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割  
・ ICTの活用や、対面指導と遠隔・オンライン教育とのハイブリット化による指導の充実  
・ 学校における働き方改革の推進  
・ 学習コンテンツを通じた学び、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」を再立した学び

**R4 また受けて！もっと受けて！を目指して～受講者自身が課題を厚き彫りにし、備前を高める研修の実施～北海道の教員に、より、個別最適で、本物に触れ、本質に迫る研修を**

集合(対面)研修では…  
リアルな体験など、本物に触れ、感動を味わい、授業改善に直結する研修を提供します。

オンデマンド研修では…  
興味・関心や課題に応じて、いつでも、短時間で学ぶことができる質の高い学習コンテンツを提供します。

オンライン(遠隔)研修では…  
多様な知識や経験を有する第一人者から、新たな知見や教育の本質を学ぶ機会を提供します。  
自身の学習指導案や実践などの現場の経験について他者との対話を通じて、本質まで遡るような気付きを提供します。

い」「もつと受けたい」と思える「受講者自身が課題を浮き彫りにし、価値を高める研修」の提供を目指して、研修内容の検討を進めているところだ。

その先行的な取組の一つとして、今年度は、外国語教育充実研修における遠隔での授業参観と研究協議、校長の学校経営力向上研修（リーダーシップ）におけるカフェスタイルによる協議中心の研修を実施しました。外国語の講座では、コロナ禍で授業公開が制限される中で、他校の授業を参観できる貴重な機会になったことが受講者から大きく評価されました。また、校長研修のカフェスタイルについては、受講者同士の対話を通して自身の学校経営についての思いや願いを交流し、気付きや新たな意欲につながるという新たな方法で、「知識伝達型」の受け身の学びから転換し、自らの経験を抽象化・概念化し活用するという実践へつなげる研修となり、参加者から好評を得ているところです。

次年度も、遠隔型研修を効果的に活用し、更に個別最適な研修ができるよう、他の講座においても、内容や方法を工夫してまいります。

#### ■研究と研修の往還の取組

また、研究についても、これまで、道内の多くの学校課題を踏まえ、その解決につながるよう、学校への資料提供などに取り組んでまいりましたが、今後も一層の充実に努めてまいります。

具体的には、研究と研修の往還を通して研究・研修ともに内容の精度を高めるため、研究内容を複数の学校等で臨床的に実践し、その成果等を研修講座の講義や演習を通して広く受講者に伝え、実践を促す方法が考えられます。あるいは、研修後に取り組んだ実践について、受講者同士でオンラインの研究協議を行う中で、そこから新たな視点を見付け、直ちに実践できそうな内容を研究としてまとめ、次年度の研修講座の講義や演習で更に多くの受講者に伝えることもできると思います。

こうした研究と研修の往還は、道研所員だけではなく、臨床に関わった教職員、研修講座の受講者等とともに取り組むこととなり、それぞれのスキルアップだけではなく、広く本道教育の充実につながるものと考えております。

#### ■これからの管理職に求められること

学校現場には、多様な専門性を有する質の高い教員組織を構築することが求められております。そのため、管理職は、教員個々が、現在の姿から将来の姿までをイメージして、そのキャリアステージに必要な学びを整理し、順次、主体的に選び取ることができるよう支援する必要があります。一方で、仕事量とのバランスを踏まえた働き方改革も進めていかななくてはなりません。さらに、教員がモチベーションを維持できるよう、新たな学びに参加しやすい環境整備や業務調整といった支援を適切に行うことが重要であることは言うまでもありません。こうしたことから、これからの管理職には、各教員が学校で果たすべき役割を考慮し、現在の立場から将来求められる（期待される）ものまでを踏まえ、研修受講履歴を手がかりとしつつ、積極的な対話を通して人材育成（コイディネット）していくなど、これまで以上に、スタッフマネジメント能力が必要であると言えます。正に、管理職自身が、学び続ける存在であることを期待されております。

#### ■結びに

「もつと具体例が聞きたかったです。」

これは、私が研究主幹として道研に勤務した二三年前、ある研修講座のアンケートに書かれた言葉です。その時、講座を担当した研究研修主事が「あれだけたくさんの具体例を示したのに……と困惑していたの思い出します。社会が日進月歩で変化する中、身に付けた資質能力が急速に陳腐化していくことは明白で、教師自身も、目の前の事案に対して、過去に身に付けた資質能力を引き出して当てはめただけでは対応できない時代を迎えており、高度な専門職として、個別最適な教師の学び、協働的な教師の学びを通して、絶えず経験を振り返り、検証し、変化に対応できる専門性を高めていくことが求められております。道研としても、校長会の皆様方との対話により、個々の教員に求められる資質能力の向上に資する研修を模索し、人材育成の支援に努めてまいりますので、今後も引き続き、道研の活用をお願い申し上げますとともに、貴会の御発展と皆様方の御健勝を心から祈念し、貴会誌に寄せる言葉といたします。

# 論考

## 心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ学校経営

### 「できる」ことを伸ばす学校「経営」

旭川市・嵐山小中 山川 俊 巳

#### 一 はじめに

本校は、旭川市郊外に位置し、自然豊かな農村部にあり、創立一二〇年を超える地域とともに歩んできた学校である。昭和五十年代からは児童生徒数の急激な減少に伴い、小規模化が進み、現在まで複式・小中併置校となっている。特に、ここ数年は地域の児童生徒よりも周辺部から特別な支援を要する児童生徒の転入が多い傾向が続いている。また、地域活動の拠点でもあり、昨年からコロナ禍によりその役割を十分果たすことができない日々が続いているが、地域の方々に愛され、協力を惜しむことない関係はコロナ禍にあっても途切れることがない。

#### 二 学校経営の基本方針

##### 1 笑顔あふれ、心響き合う学校

確かな児童生徒理解や保護者のニーズ等に基づき、自己肯定感や自己有用感を高める指導を基盤に、学力・体力の向上を図るとともに、小中併置・小規模校の特色を生かした教育活動や児童生徒個々に焦点化したキャリア教育に取り組んでいる。

##### 2 協働し活力ある学校

教職員一人一人が学校経営に参画し、やりがいと働きがいのある職場づくりに向けた組織マネジメントを進めている。

##### 3 信頼し連携する学校

保護者・地域と、学校教育目標や年度の重点を共有し、児童生徒の成長を中核として、共に成長できる学校づくりを進めている。

##### 三 本年度の重点目標「できることを伸ばす学校」

児童生徒がこれからの社会をよりよく生きていくためには、自分のよさや得意なことに気付き、それらを発揮し、自信を積み重ねて成長することが大切と考える。そのために、本校では、本年度の重点目標「できることを伸ばす学校」づくりを教育課程の根幹とし、認め励まし伸ばす教育活動を進めている。特別な支援や配慮を要する児童生徒が大半を占め、それぞれが様々な異なる環境にあるため、自己肯定感や自己有用感をいかに高めるかが本校の課題である。解決に向けては、児童生徒の「できることを伸ばす」ことを保護者や地域、教職員が共有し、一丸となり進むべき方向を一致させ、日々の教育活動に取り組んでいる。

##### 1 児童生徒個々の実態や保護者のニーズに応じ、教職員が一つとなり、同じベクトルで粘り強く子供と向き合う取組

①認め励まし伸ばす声掛けや指導、②学校行事での年間成長マネジメント、③教職員間での子供の成長の共有、④保護者・地域への積極的な発信（学校・学級だよりの活用）

##### 2 自ら考え行動する教育活動の推進

①「あいさつ・思いやり・感謝」を育てる自主的活動の取組、

##### 3 保護者や地域等との協働による教育活動での重点目標の共有

①子供とともに成長する視点を明確にした教育活動の機会提供（あらしやま学校運営協議会の活動、放課後親子活動、地域とともに実施する地域・学校行事、PTA行事等）

#### 四 おわりに

「できることを伸ばす学校」では、児童生徒はもとより保護者や地域、教職員だれにとっても学びの場となり、それぞれができることを伸ばしたり増やしたりすることを目指している。

現在、学校を取り巻く人たちに小さな自信が少しずつ増え、成長へとつながりつつあることを児童生徒の姿で実感している。

# 学校教育方針の深化を図る私作資料による校内研修

上ノ国町・上ノ国中 大野 正樹

## 一 二つの学びを研修するための資料

目の前の子供への教育活動に没頭している教職員にとつては、中学校学習指導要領の全面实施直前に、コロナ禍で前倒しとなったGIGAスクール構想を背景として「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」という答申が滑り込みで出されたという感がある。この答申では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の二つの学びが説明され、「主体的・対話的で深い学び」の深化を図ろうとしていた教職員の中には、少なからず困惑した方がいたことと思う。しかし、この二つの学びは、新しい学びではなく、今までの学習指導の延長線上にある学びである。ただ、ICTを学習用具として使用することで、今までの学習よりも学習の時間や場所等に広がりが出ているため、新しい学びのように感じるだけである。

この二つの学びを校内研修で扱うにあたり、次のことを考えた。この研修の目標は、二つの学びが今までの学習指導の延長線上にあることを理解することである。本校の教職員は、二〇代〜五〇代と幅広い年齢層である。研修するにあたり教職員のレイネスを合わせるのが理想的である。そこで、今まで聞いたことのある学習や知っている学習などから、この二つの学びにつながる資料を準備して実施することとした。使用する資料は、私の捉えている学習の変遷をまとめたものである。私作の資料なので偏りもあるが、私の教育観なども盛り込み、学校教育方針の深化となる研修となった。

この資料を簡略化したものを今回の論考として以下に掲載する。

## 二 校内研修資料 ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」～

「個別最適な学び」の源流は、B・ブルームの「完全習得学習」であると考えられる。完全習得学習は、その時点での学習状況（形成的評価）と

指導の一体化を図った学習で、評価をフィードバックさせて再学習するなど（プログラム学習）、子供が学習内容を完全に習得することをめざす学習である。この学習を進める上で子供による「個人差」が課題の一つとなっていた。この「個人差」は、特別支援教育の導入により「個人の特質等」として捉え直され、「個に応じた指導」が求められるようになった。「個に応じた指導」は、少人数・習熟度別学習等が進められるとともに、基礎・基本を習得する「指導の個別化」と、習得した学習内容を活用する「学習の個性化」、そして、総合的な学習の時間を背景とし、自分で課題を設定して学習を進める「探究的な学習」という学習を分けて見る視点につながった。この視点は、生きる力や学力の定義などから、重要な視点といえる。さらに、指導者側から学習者側に立って授業を捉え、学習の中心である学校での授業にとどまらず、家庭学習も含んで学習全体を計画する「学習デザイン」ということが問われるようになった。そのデザインに「教えて考えさせる授業」や「反転学習」などがあると考えられる。そして現在、時間的・空間的な広がりに対応できる可能性が高まった「個別最適な学び」が求められている。

「協働的な学び」の源流は、「バズ学習」であると考えられる。バズ学習は、授業で認知目標（学習の目標）と態度目標（人間関係形成の目標）を同時に達成しようとする学習であり、個と集団の相互作用を重視した学習である。代表的なものにバズセッションがある他、生徒一人一人の存在が学習につながるジグソー学習などもある。

## 三 二つの学びに取り組む第一段階の目標

「主体的・対話的で深い学び」に取り組み始めたとき、教職員から「振り返りの時間がない」という声を聴いた。その主な原因は、授業の導入に時間がとられていたことである。「個別最適な学び」は、授業以外での授業内容の復習や技能の習熟、知識・技能を活用する力の育成を可能とし、生徒のレイネスを揃え、授業の導入に時間をかけずに「協働的な学び」の基礎である「対話的で深い学び」の展開に、十分な時間を生み出すと考える。この状況を作り出すことを本校で二つの学びに取り組む第一段階の目標とした。



# 安心と信頼のある学校づくり

室蘭市・星蘭中 笹森恭之

## 一 はじめに

本校は、平成十八年四月に二つの中学校が統合し、室蘭市初の新設統合中学校として開校した。生徒数一二五人、七学級（内特別支援学級三学級）、教職員数二〇人の学校である。校区には「鉄のまち」を代表する製鋼所があり、地域、保護者の教育への関心は高く、児童生徒の健全育成活動も積極的に行われている。このような環境の中、「志を高く きら星のごとく輝く人となれ」を教育指標とし、「自ら興味や関心をもち、意欲的にその場に参加していく生徒」「自らの意志や意見、自分の夢を自分で話して伝えることができる生徒」「自分に自信をもち、ねばり強く、あきらめずに最後まで追求する生徒」の育成を目指している。

## 二 今年度の経営の重点

- 1 全ての生徒に確かな学力を育む教育
- 2 働き方改革を目指した学校づくりの推進
- 3 GIGAスクール構想実現に向けた研修の充実
- 4 豊かな心とたくましく生きる健康・安全・体力の育成
- 5 褒めて認めるを基本とした生徒指導
- 6 特別支援教育の充実
- 7 感染症拡大防止等に努め、子供たちの健康保持と安全を最優先した教育活動の推進
- 8 組織としての成長と危機管理意識の高揚

## 三 安心と信頼のある学校づくりの取組の一例

前述の目指す生徒の育成には、「安心と信頼のある学校」であることが求められ、そこには心理的安全性の維持・向上を欠くことはできない。そのためには、「学ぶ、学べる環境」「落ち着いた環境」と仲間「地域、保護者との連携」の獲得が必須であり、これらは、経営の重点を推進するための基盤となる要素である。

## 1 三機能を生かした生徒指導の推進（経営重点4、5）

本校生徒の課題として、自己肯定感の低さがあった。これは、困難なことや苦しいことに対し、失敗を恐れて挑戦できなかったり、逃げたりしてしまい、達成感を味わえず、自分の良さや自信を高められない状況を生んでいた。そこで、小規模校の利点である全教職員で全生徒を育てるという方向性を再確認し、教育活動の数多くの場面で生徒の自己決定の場を与え、全教員による意識的、積極的に生徒を褒める場面、生徒を認める場面を広げた。このことが、生徒同士や生徒と教師のより良い人間関係を構築し、心理的安全性を向上させている。

## 2 道徳教育の充実（経営重点1、4、8）

道徳教育推進教師を中心に組織的に「学校全体で取り組む道徳教育」を実践している。その一つに、本校生徒の課題や目指す生徒像に必要なと考えられる三五項目を「自分を成長させる三五の振り返り」として、年四回、学期の節目に、生徒自身で道徳的実践を振り返り、自分自身を客観的に見直す機会を設けている。自分の良さや心の成長を把握することで、自己成長意欲が更に湧き、学校全体でお互いに指摘し合う、認め合う、高め合う雰囲気高め、生徒の自己肯定感を向上させることのできる安心で信頼のある校風を培っている。

## 四 おわりに

今年度、これまでの教育実践のまとめとして応募した教育論文では、本校の教職員の熱心に、そして真摯に生徒に向き合う姿と、それに応え大きく成長した生徒の姿が高い評価を得た。この論文の「生徒にとっても、教職員にとっても居心地の良い、学び合える学校となったことが最大の成果である」という結びの言葉に、安心と信頼のある学校へと醸成していることを実感した。

室蘭市の児童生徒数は減少傾向が続く、本校区も今年度から一つの小学校（地球岬小学校）に統合され、一小学校・一中学校となった。これからは、コンパクトな規模の校区である利点を最大限に生かしながら、地域からの安心と信頼を一層確かなものとし、「地域とともにある学校」の実現に努めていきたい。

# 自己肯定感・自己有用感を育む学校経営

帯広市・川西中 今野典之

## 一 はじめに

本校は、帯広市の中心部から車で約二〇分の南部に位置する、全校生徒七三人の小規模校である。「川西長いも」のブランドでも知られるように農村地帯の学校であるが、近年新興住宅地の拡張で農業より非農業の家庭数が多くなり、生徒数も増加傾向にある。

## 二 本校の生徒の課題

本校の生徒は真面目で素直な生徒が多いが、言い方を変えたと消極的で受動的である。幼い頃からの固定化された人間関係の弊害からか、自分のもっている力や良さを十分に発揮できていないように感じる。それ故に、各種調査では自己肯定感が低い傾向にある。そこで、対人的な表現力、コミュニケーション能力を向上させ自己肯定感、自己有用感を育むことが重要であり、全ての課題はそこに起因していると考えた。

## 三 今年度の重点目標

「生徒指導の機能を活かした教育活動の推進」

『自己決定の場を与える』、『自己存在感が得られる場を与える』、『共感的な人間関係を育成する』ことを全ての教育活動を通して実践する。

## 四 校長として大切にしたこと

### 1 校長の経営方針の理解と浸透

重点目標の設定の根拠、目標が達成できたときのイメージを共有することで、職員が真剣に課題解決に取り組む動機付けを行う。

### 2 目指す生徒像・目指す教師像を明確化

キーワード化や短い言葉で分かりやすく示した。  
目指す生徒像「自立」「貢献」「協働」

目指す教師像「共感力」「向上力」「連携力」「人間力」

「活力」

### 3 定期的な職員との面談の実施

一対一で話すことで理念を共有し、ベクトルを合わせた指導を充実させ、働きやすい、働きがいがある職場をつくる。

### 4 校長の感化力と発信力・発進力

全校生徒や全保護者に語る、地域と交流する、学校だよりで思いを表現するなど、校長の役割を最大限活かす、果たす。

## 五 取組内容

### 1 生徒会活動の活用

生徒会活動は自治活動である認識を生徒に意識付けた。行事等をどのようにしたいか、生徒に考えさせて提案させる。校則、GIGAスクールに伴う端末使用のルール、SNSに関するルール等、とにかく生徒に考えさせ、学校を創ることを意識させた。

### 2 教職員の取組

#### (1) 授業改善

- ① 「主体的・対話的で深い学び」の授業改善  
自己決定・自己存在感・共感的な理解を大切にする。
- ② 生徒の発言と笑顔を引き出す授業  
根拠を示し説明する等、表現力の向上を目指す。

#### (2) 小中連携

- ① 一五歳までに目指す子供像の設定と周知
- ② 研究授業の参観と話し合い、学習規律の統一、出前授業と体験入学など、目指す子供像を共有した取組の推進

## 六 おわりに

本校はこの十月からコミュニティ・スクールとなった。この課題を地域とも共有し新たな取組につなげたい。中学生という可能性にあふれた時期に携わる者として責任を肝に銘じ、全力で学校経営にあたりたい。

# 学校を創る

北見市・光西中 伊藤 勝

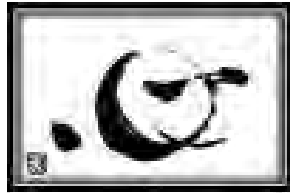
## 一 はじめに

本校は昭和二十二年に設立された歴史のある学校である。かつては一、〇〇〇人を越える大規模校であったが三〇〇人まで減り、その後毎年数十人ずつ増え続け、現在は生徒数三八一人である。次年度はオホーツク管内一の大規模校になる。学校は北見市の中心から少し離れるが、商業施設が建ち並ぶ新興住宅街にあることが、生徒が増える要因となっている。歴史を紐解くと、かつては荒れた時代もあったようだが、現在はその面影は無い。

## 二 校長の願い

校長が思う理想の学校は「生徒たちが、この学校で良かった」と思える学校であること。そのためには

- 1 職員の創意で学校創りをすすめる
- (1) 子供たちのためにできることを全職員で考える。
- 2 生徒を職員の成果を得るための道具にしない
- (1) 子供たちの学ぶ姿を通じた授業評価と改善を図る。
- 3 明るく温かい学校創りにチームで取り組む
- (1) 笑顔のある明るい職員室づくり。(チーム光西中)
- (2) 優しく思いやりのある子供たちを育成する。「まあいいところ」
- 4 自ら困難を乗り越えようとする強くたくましい生徒を育てる
- (1) 生徒への励ましとフォロワー体制を構築する。



学校の主役は子供たちであり、それを生かすのは先生方であると考えている。校長や先生方が結果だけを求め始めると必ず学校は荒れる。これは、私が三八年間現場にいて学んだことである。「プロとは結果に責任をもつこと」と経験から学んできた。確かに結果を求めることは決して間違ではないが、プロとは結果だけでは無く、取組過程にこそ責任をもつべきである。子供たちにとっての結

果は今とは限らないのだから。

## 三 「学びを止めない」具体的な活動

コロナ禍にあっても「学びを止めない」というのは全ての学校で同じ思いで取り組んでいるはずである。しかし、教科書から学ぶことだけが学びではない。特に心を育てる学びは特別活動からと考えている。本校の教職員の発想で取り組んだ特別活動の一部を紹介する。

### 1 段ボールベントを活用した災害学習

(1) 市の災害対策課、日赤看護大学の協力を得て、コロナ禍における避難所での生活等を学習した。(令和二年度)

### 2 出発二週間前に決定した修学旅行

(1) 緊急事態宣言により二度延期となる。十二月実施に変更したが、急遽ホテルに空きが出たため実施を決定した。(令和三年度)

### 3 運動会において全席指定にした保護者席

(1) 三五〇席を全て指定にすることによりコロナ対策を行った。(実際には直前になって延期されたため平日実施で保護者は立ち見とした)(令和三年度)

### 4 密を回避するため市民会館での合唱コンクール実施

(1) 学校の体育館では生徒及び保護者を入れて実施すると密になるため、初めて市の大ホールで実施した。(令和三年度)

これらは、全て職員の発想によって実施した特別活動の一端である。どの学校でも趣向を凝らした取組を行っているとは思いますが、「何をやったか」ではなく、「何を学ばせたか」が大切だと思っている。これらの取組を通して生徒や保護者から「多く聴かれた声」「感謝」である。いろいろな取組の中で人間関係やうまくいかない取組をどのように解決したり乗り越えたりしていくのかが、特別活動における学びと考えている。

## 四 おわりに

私は、経営方針をはじめ学校だよりや職員室だより等、発出する文書に専門用語などの難しい言葉は遣わない。教育は、学校だけでは成り立たない。だからこそ学校創りの内容は、多くの保護者や地域の方、そして子供たちにも理解できるようにしている。昨日と同じ今日は無い。毎年・毎日の連続が学校創りであり、みんなで創り上げるものと考えている。

# 論考

## 心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ生徒指導

### 主体性を育てる小中一貫教育の推進

小樽市・北陵中 岡本清豪

#### 一 はじめに

本校は、小樽市の学校再編の実施に伴い、平成二十九年四月に二校を統合した開校五年目の新しい学校である。平成三十一年度に市の小中一貫教育推進地区の、昨年度からは文科省による「学園制加配活用事業」の指定を受け、本校校区の二つの小学校と三校で併設型の小中一貫校化を推進している。小学校高学年での教科担任制実施をはじめ、小中九年間を通じた学力や体力の向上、「中一ギャップ」の解消等の実践を通じ、小樽の未来を担う人材育成に取り組んでいる。

#### 二 小中一貫教育の要点

小中一貫の取組は、組織や仕組みがしっかりと初めて計画的・継続的且つ効果的なものとなる。本校では、小樽市小中一貫教育「五つの視点」に基づき、中学校区の二小学校と三校で「小中一貫推進委員会」を設置し、具体的な取組を推進している。

##### ① 小中一貫教育の目標を設定

各校長間の連携を深め、学校経営の重点目標を三校で共通化した。

##### ② 教育課程・指導方法の工夫改善

中学校が中心となり、小中一貫した教育課程を作成に取り組んでいる。数学、理科、英語においては小中九年間の単元配列表を作成し、課題のある単元の時数配分を多くする等、令和四年から実施を進めている。

##### ③ 教職員間の連携・協働

「小中一貫推進委員会」には、教育課程部会・生徒指導部会・学力向上部会の三部会を設置。日常の校務分掌と連動した部会構成にすることで業務分担を明確にし、日常の業務との連動も図っている。小中九年間を見通して、学習指導及び生活指導上の課題解決及び地域に根ざした教育の推進に取り組んでいる。

#### 1 具体的な実践例

##### (1) 第五・六年年の「合同授業」

校区二校の小学校の五・六年生をそれぞれ混合して学級を編成。中学校の教員が中学校校舎で指導する「合同授業」を実施している。合同授業は、音楽や図画工作、体育、道徳等で行っており年間各二〇時間。授業では、異なる小学校同士でのグループ学習を位置付け、小学校段階から、同じ中学校へ進学する児童同士が関わり合うことで、新たな環境や人間関係の不安をやわらげ、安定した中学校生活につながることを目指している。



##### (2) 九年間の単元配列表の作成

全国学力学習状況調査等で課題がみられた観点・領域から重点的に指導する内容を明確にするため、算数・数学、理科、外国語で九年間の単元配列表を作成した。これにより指導の系統性や連続性を効果的に強化できると考える。また、小中各校がこれを活用することで、より子供の実態に沿った教育課程編成の改善にもつながられる。

#### 三 おわりに

これらの取組以外にも、小中各部の部長による推進委員会や教職員による合同研修会、目指す児童生徒像の共有、子供支援ツール「ほっと」の実施と共有等々、様々な実践を通じ小中一貫教育を進めている。取組はまだ二年目だが、小から中への進学の段差が緩やかになり、不登校の減少にもつながっている。また九年間を見通した教育課程の編成により、発達段階に応じた計画的・継続的な学習指導、生活指導の充実が図られている。何よりも、小と中の教員の相互協力関係ができたことにより日常の職員室内で小学生の話題が話されるようになるなど、その意義と効果は極めて大きい。連携する三校が校長のビジョンに小中一貫の取組を明確に打ち出し、小中共に、自信をもって全教育活動に取り組ませることが重要と考えている。

学年	単元	単元時間	単元配分
5年	小数の計算	10	10
5年	分数の計算	10	10
5年	小数・分数の四則計算	10	10
5年	図形	10	10
5年	総合的な学習の時間	10	10
5年	その他	10	10
6年	小数・分数の四則計算	10	10
6年	図形	10	10
6年	総合的な学習の時間	10	10
6年	その他	10	10

# 「未来を創る」子供たちを育む生徒指導

## 「九年間を紡ぐ教育の良さを生かして」

函館市・戸井学園 佐々木 理之

### 一 はじめに

本校は、函館市東部の海沿いに位置する「戸井地区」にある。津軽海峡を隔て青森を臨み、古くから漁業により繁栄してきた地域である。

函館市立小・中学校再編計画により、戸井地区の小学校二校、中学校二校を統合することとなり、令和三年四月に函館市初の義務教育学校「函館市立戸井学園」として開校し、七二人の児童生徒が学ぶ。

校訓を「未来を創る」と定め、児童生徒一人一人の存在を何よりも大切にする教育活動を推進している。

### 二 生徒指導の考え方

#### (1) 生徒指導の重点

児童生徒自らが、未来社会の創り手として新たな価値を創造するために、自ら考え判断し、行動する力を身につける。

#### (2) 基本方針

① 四・三・二制の各ステージの枠組みの確立と効果的な連動。

② 九年間の発達段階を踏まえた全教職員による系統性のある指導。

③ 生命・人権の尊重をベースにした自己指導能力の育成。

### 三 本校の取組

#### (1) 戸井学園生徒会宣言

**T** ともに学び合い、高め合いながら、何事にも全力で挑戦します。

**O** 思いやりの心をもち、たくさんの人のかかわりを大切にします。

**I** いつでも自分の言葉と行動に責任をもち、よりよい学校づくりをめざします。

子供たち一人一人が価値ある存在として自己実現をめざし、主体的に自己指導能力を高めるためのよりどころとする。

#### (2) 縦割り活動の日常化

一～九年生がともに学ぶ義務教育学校においては、下のステージの児童生徒を教え導く上級生と、上のステージに憧れを抱く下級生が共にある活動を意図的に取り入れている。朝の読みきかせや学習支援。給食の配膳や清掃活動。休み時間の意図的な交流。生徒会活動や学校行事等、学校生活の様々な場面での交流を促進することで、実体験を通して培った「思いやり」や「温かい心」が育ってきている。



#### (3) 五年生から参加する部活動

本校の特色ある活動として、五年生からの部活動への参加を認めている。ただし、五・六年生の活動は平日のみ二日間とし、基本的に大会等への参加はしない。前期課程の児童にも豊かで潤いのある放課後活動を提供することにより、望ましい人間関係の構築、中一ギャップの解消につなげている。

#### (4) 大幅な教科担任制の導入

一年生から段階的に教科担任制を導入し、六年生では全教科で導入。

教員の専門性を生かした授業の提供と同時に、前期課程の学級担任にも空き時間を確保している。また、通常の学級での配慮が必要な児童に対する個別の時間割も手だてしており、教育効果を高めている。一人一人の児童生徒に数多くの教職員が関わることによる生徒指導上のメリットは絶大である。

### 四 おわりに

今年度、四校が統合し、保護者・地域の願いを乗せて義務教育学校としてスタートした。子供たちが一五の春を迎えたとき、「九年間、戸井学園ですべて本当に良かった」と心から感じ入る教育を実践していきたい。本校での学びが、先行き不透明な未来を豊かに切り拓いていく人間の育成につながると信じて、学校経営を推進していく。

# 社会性・主体性を高める教育の創造

釧路市・北中 水上俊司

## 一 はじめに

本校は、昭和二十四年新制中学校の増設により、釧路市内で三番目の中学校として、その第一歩を踏み出した。開校当時の生徒数は九二〇人の規模を誇ったが、近年は生徒数の減少が著しい。本年度は二四一人である。生徒は、明るく素直な生徒が多く、落ち着いた雰囲気です。学校生活を送っている。その反面、学習面のみならず、物事に対してやや受け身の姿勢となりがちであったり、直面する困難に対してできるだけ避けようとする言動が多く見られたりする。主題に掲げた「社会性・主体性を高める教育の創造」は、ここ数年の本校の課題でもある。

## 二 最重要点として取り組んでいることから

### 1 学校課題に関わる達成目標

- ・ 生徒会活動や人間関係づくりを通して社会性を身につける。
- 【達成目標】 「生徒会は自分たちで考え工夫し活発だ」（学校評価八〇%以上）
- ・ 自己有用感が得られる場面を創出し、集団における居場所づくりに努める。

【達成目標】 「学校へ行くのが楽しい」（学校評価八〇%以上）

### 2 主な取組

- ・ 受容と共感の「生徒理解」を基盤とした生徒との好ましい信頼関係を強化する。（生徒理解研修の実施、日常的な生徒の情報交流、計画的・継続的な教育相談（計画相談、チャンス相談）、いじめ調査やアセスの有効活用）
- ・ 生徒の所属感を高める生徒会活動を支援する。（中体連壮行会、あいさつ運動、いじめ防止標語の取組、いじめ撲滅のため

の宣言採択や意見交流を行う「友の輪集会」、生徒、保護者、教師の熟議による「校則の見直し」※現在進行中）

- ・ 自己の居場所を自覚できる活動を改善する。（目的を明らかにした集会活動の実施、旅行・宿泊的行事や体育祭、文化祭等の学年や学校行事の見直し、通常学級と特別支援学級の交流授業、通級指導教室による個別の学習指導、学校適応指導教室「青空学級」の実践と成果の積極的な発信、スクールカウンセラーによる教育相談）

- ・ リーダーとフォロー双方の伸長を図る学級経営の充実を図る。（学級における個々の役割の再確認・学級組織の再構築）
- ・ 心に響く「特別の教科 道徳」の実践を組織的に推進する。（道徳推進教諭を中心とした学年での取組、実践の累積）

・ 自己の生き方と地域や社会とのかかわりを考えるキャリア教育を計画的に推進する。（市主催のシンポジウム、ジョブカフェの積極的な参加、ゲストティーチャー等の講話の実施、キャリアノートでの振り返りの利用）

### 三 おわりに

今、多くの中学校で「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」が精力的に実践されていることと思う。本校でも「自らの考えをもち、表現できる生徒の育成」主体的・対話的な学習指導の工夫を通して「を研究主題に掲げ、四年目の研究を推進してきた。昨年度のまとめでは、「授業だけでなく、あらゆる教育活動を通じて、生徒の主体性を発揮できる場の一層の充実が必要ではないか」という展望が記されている。

拙稿をまとめながら、よりよい生徒理解や生徒指導の取組が多岐にわたっていること、その一つ一つが有効に機能することの必要性等を再確認することができた。正に、学校の総合力を求められたいと思う。校長として、それらのバランスを図りながら、生徒、保護者、教職員と協議を重ね、一体感のある学校経営の推進に努めた

# 心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ生徒指導

札幌市・あいの里東中 佐田利典

## 一 生徒指導の理念

生徒指導とは、「生徒指導リーフ」（国研）には、「社会の中で自分らしく生きることが出来る大人へと児童生徒が育つように、その成長・発達を促したり支えたりする意図でなされる働きかけの総称のこと」とある。生徒指導の最終的な目標については、「現代生徒指導論」（日本生徒指導学会編著）には、「社会的リテラシーの育成にある。社会的リテラシーとは、様々な分野・領域等での学びを社会の形成者として、社会生活（集団や社会）で使いこなせる能力であり、社会の形成者たるにふさわしい知識、技能、価値・態度、感性、行動力等を習得し、自己実現を図りつつ社会を生き抜く力（生きる力）ともなるものである」とされている。共に生徒指導の基盤をなす理念である。

## 二 心豊かで主体的に生きる力

心の豊かさに関して、大阿闍梨の称号を持つ仙台市・秋保 慈眼寺の住職 塩沼亮潤氏は、「私たちは、心と心が通じ合っていることがお互いに分かると、心の潤いを感じます。感情や人格が整う年頃に身に付いたことは、その人の言動の軸となり、人と心を通わせる基礎になる。相手のことや、相手の幸せを考えて行動することで、心が通じ合う体験をする。その積み重ねが心の潤い、豊かさに通じる」と、ある対談で述べられていた。人と人との関わりや協働の意義を再考させられる。

学校教育の目標は、「自立した人間に育てる」ことにある。自立するために大切なのは、知識をたくさん身に付けていることではなく、身に付けている知識をいかに活用できるかにある。それには「自分自身の状況を客観的に捉えた上で、主体的に考える力」が不可欠である。

例えば、SDGsの取組にも主体性を育む手掛かりがある。世界には、解決しなければならぬ問題や課題が山積している。今の子供た

ちには、何が課題なのか問題設定をし、解決する手段を見つけて実行する、経験値や答えがないものに対して、どうアプローチしていくかを探るといった、主体的に考え、動く力が求められる。

めまぐるしく変容する社会の中で、子供たちが、持続可能な社会の担い手として、自分らしく生きるためには、学校教育において、世界とつながりながら、多様性を受け入れ調和を図り、他者と心を通わせ協働することを通して、自ら考え、判断し、行動する力 Ⅱ 主体的に生きる力を確実にはぐくむ具体的な取組を行うことが急務である。

## 三 小中一貫した教育で子供をはぐくむ

札幌市では、来年度より、「小中一貫した教育」の実践を本格的に始める。それに先立ち、昨年度より関係の小・中学校長間で検討を重ね、ブランドデザインの作成を進めている。各校の学校教育目標を基に小から中への「学び」と「育ち」の連続性、地域の特性や実態等を踏まえ、9年間で育成を目指す子供の姿を具体化し、そのために9年間を見通して実践する具体的な取組を絞り込む作業を行っている。

本中学校区で育成を目指す子供像の基盤としたのは、開校から現在まで引継がれてきている本校の学校教育目標である。大目標の他、知・徳・体に関わる目標に加え、「国際的な視野を身に付ける」があり、これが他校にはない特徴でもある。札幌市の学校教育が目指す「自立した札幌人」の育成や、「知・徳・体の調和のとれた育ち」の保障との共通性もあることから、あいの里で育てたい子供たちの姿を「グローバルな社会に関心をもち、自らの意思と他との関わりの中で課題を探求し、解決していこうとする児童生徒」と設定した。

前述した一と二の意を踏まえ、この子供像に迫るため、教職員間の連携・協働、9年間を通じた学び、子供理解と生徒指導の連続性、家庭や地域との関わりなどを大切にしながら、東京都江東区立八名川小学校のESDの実践やSDGsの取組等も参考にした確かな実践を通して、児童生徒に心豊かで主体的に生きる力をはぐくんでいきたい。

系統性のある課題探究型の学習の充実に併せ、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」がキーワードである特別活動の充実も図りながら。

# 論考

## 心豊かで主体的に生きる力をはぐくむ体験学習

### 地域に学び、社会とつながる体験活動

枝幸町・枝幸南中 菊地 公一

#### 一 はじめに

枝幸町はオホーツク海に面し、平成十八年の歌登町と合併後は、北海道で九番目という広大な面積を誇る。一次産業である「漁業」「酪農」「林業」では活発な事業が展開されているが、特に毛ガニの水揚げではオホーツクエリアにおいて大きな割合を占めており、名実ともに「日本一の毛ガニの町」として広く知られている。

本校は、枝幸町南部の沿岸約二〇kmに及ぶ校区内に三つの小学校を擁し、生徒はスクールバスで通学している。休日はほぼ家族と過ごしていることから、学校が唯一家庭以外の社会と接する場となっている。そのため、総合的な学習の時間を中心に、地域社会を知り、誇りがもてるような体験活動を意図的に組み入れ、社会参画への意識を高めることが重要である。また、三年間の系統的な指導を通して、自らの特性や良さを理解する機会としていきたい。

#### 二 本校の取組

##### 1 枝幸・周辺地域の歴史や自然を知る活動 (一年生)

枝幸町には、オホーツク沿岸の歴史や自然に関する標本や出土品等を多数所蔵する「オホーツクミュージアムえさし」があり、毎年教育活動に多大なる御協力をいただいている。今年度は、ミュージアムより国土交通省・北海道開発局の皆様を御紹介いただき、お隣の中頓別町(ペーチャン川)で砂金掘りを体験させていただいた。周辺地域に二万人が訪れゴールドラッ



シュに沸いたことなど、現在の様子からは想像できない歴史を知ることができた。また、宿泊学習では幌延深地層センターを見学し、地下二五〇mの世界を体感することができた。

##### 2 枝幸の人や産業を知る活動 (二年生)

二年生では、一人一人の特性や将来への希望をもとに、町内の事業所で実習を行う「職場体験学習」を実施している。どの体験先においても大変親身に御指導いただき、先におり、事業所の皆様には頭の下がる思いである。生徒にとっては、保護者や教員以外の大人と接することで、働くことの意義を学び、将来に向けた目標を考える貴重な機会となっている。



##### 3 自分の将来について探究する活動 (三年生)

三年生では、修学旅行の最中に進路希望に合わせた「上級学校訪問(札幌市の専門学校)」を行い、自分の将来と結びつく職業について学びを深めている。また、自主研修の時間を活用して枝幸以外の地域の産業や町づくりについて調査を行っている。ただし、コロナ禍の今年度においては上級学校訪問を中止し、別日程で「社会人講話」を実施した。枝幸町内で働く方々をお迎えし、交流を行うことで進路に向かう意識を高めることができた。

##### 4 学んだことを発表する活動 (全学年)

以上の体験活動については終了後まとめを行い、文化祭においてその成果を保護者や地域に発信(地元ケーブルテレビ活用)する機会を設けている。

#### 三 おわりに

一人一人の興味や動機からスタートし、仲間と協力して進める体験活動では、生き生きと学ぶ生徒の姿を見ることが出来る。学習の個性化や、協働した学びが実現できる学習の機会として、工夫・改善を図りながら今後も充実に努めていきたい。



# 地域との連携による体験学習

南幌町・南幌中 小泉 寧

## 一 はじめに

南幌町は、空知の南部、石狩管内と隣接する位置にあり、過去に行われた大きな灌漑整備により、米作を中心とした農業を基幹産業としている。札幌市からの通勤圏内にある町として、積極的に子育て支援や少子化対策を進めており、比較的人口減少が鈍化している状況にある。

平成二十九年からの第三期社会教育中期推進計画の中では、地域全体で子供を育てる町づくり、人と人、地域と地域が交流しつながりを深める町づくりを重点にし、学校と家庭、地域が一体となった教育活動を目指す方向性が示されている。あわせて地域とともに子供たちを守り育てる環境整備を推進する、コミュニティ・スクールが始まり、より地域の方の協力が得られる体制が作られている。多くの方々が中学校に積極的に関わってくれ、「中学生を町で育てる」風土を感じている。特にスポーツ少年団活動においては、小学生だけではなく中学生になってからも多くの生徒が関わりを継続し、卒業後の進路選択の幅を広げることにつながっている。

## 二 本校の体験学習

### 1 農業体験

一年生が地域の基幹産業である農業を体験し、勤労の意義の理解とともに、町の将来や農業・産業について考える機会として、二日間行っている。四〜五人ずつの班に分かれて、町内の農業生産法人さんの所に行き、野菜の選果作業や収穫など行っている。昨年度は中止、今年度も受入れが難しいとのことだったが、町の資料や情報をいただき、実際に行けない中でも農業の調査をし、まとめを発表した。町の広報にも掲載され、大きな励みともなった。



### 2 職業体験

二年生が町内二〇か所以上の事業所（一事業所に一〜三人）に分かれて、二日間にわたり、役場や消防署、建設会社や銀行、商業施設や飲食店など様々な仕事現場での体験を通して、勤労観や職業観などを考える機会をもっている。昨年度は中止、今年度も受入れは難しいとのこと、代替プログラムとして外部からの人材を派遣してもらったの講演を中心に行った。エアドゥの航空教室や町内のお寺の住職の方など、通常、話の聞けない方の派遣等を試み、生徒の職業観の醸成へつなげている。

### 3 福祉体験

一年生が福祉の分野に対して、車いす体験、手話体験、認知症講座等を通じた体験を行い、福祉に対する理解を深める活動を行っている。

### 4 地域職業学習

三年生が、地域の企業や商業施設を取材し、コマージュナル（動画）を作成し、地域理解、職業理解を深める活動を行っている。コミュニケーション力を高め、より地域を深く探求し、得た情報を整理し、より効果のある発信につなげる、実践力を高める体験学習を行っている。昨年度は中止、今年度も受入について、時期を探りながら進める予定である。

## 三 おわりに

昨年度からの新型コロナウイルス感染症対策により、安全・安心を優先に、内容の変更や延期・中止にせざるを得なかった体験学習が多数あった。地域の感染状況について、常に感度を高くもち、臨機応変にプログラムを変更できるような対策が必要であった。ただ、今まで構築してきた地域の方々との体験学習は、ただ経験値を高める、という意味を超えて、地域との絆やふるさとへの愛着につながる、心に響く大切な活動であると確信している。今後も教職員とともに積極的に進め、学校と地域が連携・協働した教育を力強く発展させていきたい。



# 地域への愛着と誇りを育む体験学習

幕別町・忠類中 白井将之

## 一 はじめに

忠類地区は昭和二十四年に大樹より分村し、忠類村となった。その後、平成十八年に幕別町に合併するまでの五七年の間、日本で初めてナウマン象の化石が発掘されるなど、ナウマン象が村のシンボルとして全国的に有名となった。このような歴史的背景の中、地域住民の忠類地区への愛着と誇りは強いものがあり、地域は小中学校の各種教育に極めて協力的である。令和元年度より幕別町において小中一貫コミュニティ・スクールがスタートし、この制度を活用することで、更に忠類地区全体で教育活動を推進されることが期待されている。

## 二 地域への愛着と誇り育む「ふるさと・キャリア教育」の取組

本校は長年、地域とつながりのある各種教育活動が推進されてきた。このつながりは地域の基幹産業である一次産業を中心としながら、学年が上がるにつれ活動の範囲を広げ、持続可能な地域・社会づくりを意識した課題探求学習へと深化を遂げている。

### (1) 林業学習

「忠類の魅力再発見」をテーマに森の循環型林業に取り組まれている校区事業所に全体講話・現場視察等に御協力いただき、スマート林業の理解を深めている。木の苗を育て、植林し、伐採、加工と多くの時間と人の関わりにより、木が人の暮らしを支えていることを学んでいる。



### (2) 酪農体験学習

「食育」をテーマに、校区の酪農家を訪問し、搾乳体験や牛の餌やり、牛舎の清掃等を体験。雄牛は食肉となり、本来子牛が飲むべき乳を人間が牛乳としていただいていることなど、食の循環と命の尊さや大切さ等を学んでいる。

### (3) 忠類ナウマン全道そり大会の学習

校区で三八年続いている「忠類ナウマン全道そり大会」の学習を本年度より実施。この大会に携わる地域実行委員会の皆様より、地域づくりや活性化への思いに触れ、学校としても本事業に参加することで、子供たちにふるさとへの愛着を更に高める学習へとつなげていきたい。

### (4) ゆり根の蓄取り学習

地域特産品であるゆり根栽培農家に出向き、ゆり根の蓄取りを体験。ゆり根の栽培は全て手作業であり、出荷までに約五〜六年かかり、希少価値の極めて高い食品であることを実感している。そのため、生産者の思いや働くことの意味・やりがい等が生徒の心に響く貴重な体験となり、キャリア教育へとつながっている。

### (5) 忠類で花いっぱい運動

毎年、春先に役場地域振興課並びに地域の「手づくりのまち推進委員会」との協働により、学校横にある国道沿い花壇に約四千株の花植えを行っている。地域住民、小学校児童と一緒に作業を行い、地域づくりの一躍を担う大変意味のある取組となっている。

## 三 終わりに

忠類地区では、長年本校で実施されてきた様々な体験学習を小中九年間の系統的な教育課程として編成・実施することが課題である。その際、学校・家庭・地域で目指す子供像を共有し、発達段階におけるねらいを明確にする必要がある。さらに、学園の教育ビジョンを本町の教育施策と関連付け、学校運営協議会等の機能も生かしながら、熟議・協働を柱とした検証改善サイクルを確立し、地域とともにある学校づくりを目指していきたい。今後、子供たちの豊かな教育環境整備を通して、持続可能な地域づくりを図るべく、「組織の機能化」・「人材育成」等に努め、校長としてのリーダーシップ・マネジメント力を高めていきたい。



# 身近な人材を活用した体験学習活動

真狩村・真狩中 佐藤 英治

## 一 はじめに

真狩村は秀峰羊蹄山の南麓に位置し、肥沃で広大な畑作地帯を有している。特産品のゆり根は、真狩村が出荷量日本一として有名である。本校は村内唯一の中学校であるが、全校生徒四五人の小さな学校である。約七割の家庭が農業従事者であり、代々真狩村で農業経営を受け継いでいる家庭も多いことから、地域と学校とのつながりも強い。生徒たちは豊かな郷土に生まれ、落ち着いた学校生活を送っている。

## 二 本校の取組

新型コロナウイルス感染症は、昨年度、今年度と本校の教育活動に多大な障がいをもたらした。その影響を特に受けたのが、外部人材を活用した体験学習である。これまで実施していた活動に代えて、活用可能な村内人材や、本校職員による体験活動を実施し、生徒の意欲や関心を高める取組を模索した。

### 1 一日防災学校

頻発する自然災害に向き合い正しく行動できる防災意識の向上を目的に、「一日防災学校」の取組を計画した。真狩村役場の防災担当者や羊蹄山麓消防組合真狩支署の協力を得、真狩村で暮らす子供たちに必要な知識や技能、思考力や判断力を身に付けられる取組とした。具体的には、真狩村の防災に関わる講話を村役場防災担当者から行っていたが、その後、避難所運営体験の一つとしての「段ボールベッド活用体験」、地震の際に正しく行動できるスキルを学ぶ「こじた」（固定していない家具は地震のゆれでたおれてくるよ）、防災グッズの準備の優先順位や意外な活用例を学ぶ「ぼうさい【ダ・ズン】」、地震を想定した避難訓練、救命救急講習、そして一日の振り返りと、盛りだくさんのメニューを設定した。真狩村は比較的自然災害の少ない地域ではあるが、防災教育の必要性を改めて痛感している。

### 2 ハロウィン・ランタン制作

国際理解教育の一環として、本校に勤務するALT（米国出身）を講師にハロウィン・ランタン制作を行った。総合的な学習の時間に組み込んで実施し、英語科の教育課程とも関連性を意識して、ハロウィンの過ごし方を理解したり、実際に英語を用いて体験したりした。

年度当初から総合的な学習の時間に組み込んで計画を立てていたわけではなく、ALTからの申し出を受けて実施したもので、総合的な学習の時間の学習指導計画を調整した。使用したカボチャは、地元の農家さんが快く提供してくれたもので、日常から地域に親しんでいるALTが交流のある農家さんに相談をもちかけて実現した。

学習当日は二時間扱いで学年ごとに学習計画を立て、最初の一時間は総合的な学習の時間としてランタン制作、次の一時間は英語の時間としてハロウィンを題材としたコミュニケーション活動を行った。

### 3 上級学校（専門学校）訪問

二年生の宿泊研修旅行での取組として、専門学校に体験入学する「上級学校訪問」を実施した。コロナ禍の影響で受け入れ可能な学校を探すのに大変な苦勞をしたが、今年度は函館市の大原公務員・医療事務・語学専門学校から受け入れ可能との回答が得られ、それを元に函館を訪れる旅行計画を作成した。また、この専門学校の卒業生が多く就職している函館市の水産加工会社の工場見学も実現することができた。生徒たちは北海道の水産加工会社が世界市場で活躍していること、そのための人材育成を専門学校が担っていることなどを学習することができた。

### 三 今後に向けて

本校の総合的な学習の時間の指導計画を思い切って改善したいと考えている。本校の総合的な学習の時間は、「地域」「防災」「国際理解」「共生」「キャリア教育」などのテーマの中から学習活動を設定しているが、調べ学習とその発表という形態が中心であり、生徒自身が課題意識を高めたり、課題解決に向けた方策等を探求したりする学習には至っていない。各教科の学習内容との関わりを横断的に系統化し、生徒の探究心や課題解決力をより高めるプロジェクト型学習活動へと発展させていきたい。

テーマ

## 学校教育の今日的な課題から

～更なる学校力の向上を目指して～

1

### 学校改善の仕掛け

～教員のベクトルをいかにそろえるか～

網走市立第三中学校 木野村

寧

2

### 「学びの共同体」の理念を生かした学校改革

～全ての生徒の学ぶ権利を保障する学校づくり～

新ひだか町立静内第三中学校 小嶋 範彦

3

### 組織的な運動能力・運動意欲の育成に向けた取組

～運動することの楽しさや喜びを味わうことや

地域との連携を通じて～

小樽市立松ヶ枝中学校 岡崎 利美



## 学校改善の仕掛け

「教員のベクトルをいかにそろえるか」

網走市立第三中学校 木野村 寧

### 一 はじめに

本校のある網走市は、北海道の東端に位置し、身近に豊かな自然が存在する人口約三万四、〇〇〇人の街である。近隣には世界遺産「知床」があり、校舎からはオホーツクブルーの空と知床連山を望むことができる。また、農・水産資源の宝庫としても知られ、網走監獄や冬の流水等、多くの観光スポットも抱える。

網走市には小学校八校、中学校五校、小中学校一校がある。第三中学校は、一三学級（通常九、支援四）、生徒数二八七人、教職員数三八人の規模校である。かつては生徒数が九〇〇人近くになり、管内有数の大規模校であったが、少子化、過疎化の波を受け、網走市の人口減少とともに生徒数も激減してきた。かつては、生徒指導困難校として有名であったが、現在は生徒も落ち着いており、いわゆる「普通の学校」となっている。そこに着任して二年目。学校改善の取組を紹介する。

### 二 教員の参画とゴールの明確化

令和三年度の経営ビジョンの策定は、前年

度の二月に最終段階に入った。この段階で取り入れたのが、学校経営に教員を参画させることであった。例年二月に行われている年度末反省会議を早々に終わらせ、「学年団熟議」の時間を設定した。

熟議では、学校評価の分析結果や、この一年の実践で得た各教員の実感等をもとに、次年度の「育成したい資質能力」と「重点教育目標」について話し合ってもらった。その結果をまとめ、後日校長に提出させたところ、以下のような意見が見られた。

- 令和二年度の重点教育目標は、「対他人」の視点が置かれ、「対自分」の視点が足りなかったのではないか
- 令和二年度の資質能力（主体性・協働性）に加え、「向上心」「粘り強さ」が本校生徒には足りないのではないか

これらを最大限に取り入れ、校長の思いもミックスさせて、重点教育目標と育成を目指す資質能力を次のように設定した。

#### 【重点教育目標】

自分を高め、

他者につながる生徒の育成

#### 【育成を目指す資質能力】

「主体性・協働性」に

「向上心・粘り強さ・表現力」を追加

### 三 グランドデザインの策定

次に着手したのは、これらを位置付けたグランドデザインの策定である（詳細は本校のHP参照）。グランドデザインには、「育成場面」と「評価場面」も位置付け、PDCAサイクルを明確にした。作成に当たって特に意識したのは、以下の二点であった。

#### 1 評価指標の明記

まず、重点教育目標と資質能力に、「評価指標（目指す生徒像）」を明記した。ゴールに向かう教員のベクトルをそろえるためには、評価指標を明確にし、共有する必要があると考えたからである。

そこで、グランドデザインの「重点教育目標」と「育成を目指す資質能力」の項目に、次のような評価指標も併せて示すこととした。

【重点教育目標】

「自分を高め」

自分と向き合い、内面をポジティブな状態に保ち、自分自身を向上させる生徒

「他者につながる」

互いに認め合い、協調・協働により、他者につながるうとする生徒

【育成を目指す資質能力】

「主体性」

自分の頭で考え、自分の意思で行動することができる

「向上心」

失敗を恐れず、挑戦することができる

「粘り強さ」

最後まで諦めず、やり抜くことができる

「表現力」

自分の思いや考え方を、伝えることができる

「協働性」

納得解を生み出すために協力することができる

設定した重点教育目標や資質能力は、言葉としては明確であるが、各々が思い描くイメージはバラバラである。教員の頭の中に思い描く生徒像が異なっているのは、同じゴールにたどり着くことはできない。思い、言葉、そしてイメージを全体共有する必要があるのである。評価指標の明示はそのための手段である。

2 必要最小限の情報

次に、余計な情報は入れず、必要最小限の情報だけを入れることを意識した。

校長が示す経営方針の中には、重点実践項目として、指導事項やその内容に至るまで事細かく踏み込んで載せられているものが多い。しかし、ブランドデザインには、それらは不要である。手段が目的化し、本来目指すべき目的がぼけてしまうからである。明確化し、共有しなければならぬのは目的であり、達成までの道筋である。

具現化のための内容や手段は、各教師に任せたい。その自由さが教育には必要である。教員を窮屈にさせず、ダイナミックな実践を期待したい。経営者に必要な視点は、いかに最上位目標を浸透させるかである。

四 組織体制の改革

学校が組織として目指す山の頂、そこから見える景色を共有し、そこに向かって教育活動が始まる。カリキュラム・マネジメントを図るためには、主たる活動が行われる組織を整えることも必要である。

縦の糸である校務分掌と、横の糸である学年団が協働意識を高め、縦横の糸が上手く絡み合うように機能させたい。

そこで以下の二つの改善に着手した。

1 校務分掌のグループ化

今年度、過員により教員が三人減となり、今まで以上に協働の必要性に迫られ

た。そこで、新年度に向けまず手つけたのが校務分掌の見直しである。一人一係に近かった体制から、「グループ制」へと変更した。

具体的には、各業務を関連する内容毎に再編し、名称も変え、一グループ四〜五人の教員を配置し、協働で業務を進める体制に変更した。各グループ内では、業務分担が行われているが、担当者が企画や提案をする前に、グループ内で質問・相談・確認等が行われ、協働の意識が生まれている。

2 学級経営案の廃止

学年団という組織は、中学校では特に重要で、指導や実践の多くはここが中心となつて行われる。そこで、学年団で協働し生徒を育てていくという意識を高めるために、今年度から学級経営案を廃止し、学年経営重視に舵を切った。学校が育成を目指す資質能力を、学年としていかに具体化するかを学年経営の中心に据えたのである。具体的には、学年経営案の様式をシンプルな内容に変更するとともに、「育成場面」と「評価指標」を学年毎に設定し明記することにした。

(1) 育成場面の明確化

資質能力育成の中心となるのは、総合的な学習の時間、特別活動、運動会や文化祭等の大きな行事と位置付けた。

各教科では、教科固有の資質能力（三つの柱）の育成を目指す。それと並行して、学校として設定した五つの資質能力

は、単元計画の中で見通しをもち、意図的に指導し育成を目指すこととした。

(2) 評価指標の明確化

活動場面毎に、学年として目指す生徒像（評価指標）を考え、明記することとした。ここでも、年度で目指すゴールを最上位目標とし、学級の枠を超えて、学年としてどのような生徒を育てていくかを重視した。学年団という組織をより意識させることによって、協働意識も高めたいと考えた。

五 学校評価の目的の明確化

そもそも、学校には目標が多すぎて、どこを目指しているのが曖昧になっている。乱立する目標が、一本の線上に乗っていないば問題ないが、そのようなことはまずない。教員個々のベクトルの方向はそろっていない状態となっていることが多いのが現実である。

本校では、年度で目指すゴールを「資質能力の育成」に焦点化し、教職員への浸透を図ってきた。評価についても、明確化した五つの資質能力の育成状況を根拠として、重点教育目標の達成度を判断することになっている。

評価項目についても、資質能力の育成と重点教育目標の達成という、ダブルスタンダードを避けるために、「資質能力の育成」に焦点化する等の工夫をしてきた。

また、目指すゴールに到達するための実践が、個人においても組織においても、確実に行われる必要がある。そのためには、結果責

任だけでなく、実行責任を重視した学校評価も必要であると考えた。以上のような考えを全体共有し、以下のように目的を明確にした学校評価を行っている。

1 中間評価は進捗評価と押さえる

中間評価は、夏季休業前の七月に実施している。調査対象は生徒と教職員のみとし、保護者は含まれていない。これは、中間評価を進捗評価と位置付け、主たる目的を「教員の取組状況を把握するもの」と押さえているためである。ここでは、結果責任よりも実行責任を重視したのである。

また、本校が目指す生徒像は、四月からのわずか三か月で変容が見られるものではないことや、学校における働き方改革の視点からも軽減を図る必要があると考えた。

具体的には、教員に「協働性を高める取組を行っているか」と問い、生徒には「協働性は高まったと思うか」を問う。集計結果の温度差が、そのまま後期の課題となる。

進捗状況の評価に重点化することで、目指すゴールに向かって皆で一緒に走っている意識を高めるとともに、年度の目的を浸透させるという効果もねらっている。

2 年度末評価は達成度評価と押さえる

年度末評価は、冬季休業前の十二月に実施している。調査対象は生徒と教職員に加え、保護者にまで広げて実施する。これは、年度末評価を達成度評価と位置付け、主たる目的を「生徒への定着状況を把握すること」と押さえているためである。客観

的な実態把握のためには、生徒・教員・保護者に同じ内容のアンケート項目を設けることが、有効且つ必要と考えた。ここでは、結果責任と説明責任を重視したのである。

達成度評価に重点化することで、本校が目指す資質能力や生徒像に正対した検証を行っている。さらに、結果から明らかとなった成果や課題は、次年度に向けた重要な資料となり、「学年団熟議」へとつながっていく。

六 おわりに

学校改善のために、以上のような取組を進めてきた。

成果としては、目指すゴールが共有され、到達点を意識した実践が行われるようになったこと、分掌や学年団の協働意識が高まったことが挙げられる。これまで、自分の「ものさし」と「さじ加減」で行われてきた教育が、より客観性を帯びたものとなった。

一方、課題としては、資質能力の育成という目的が全ての教育活動の評価指標になっていないこと、家庭や地域にまで十分に浸透していないことが挙げられる。課題については、今後も更に実践を重ねながら、改善策を模索していきたい。



# 「学びの共同体」の理念を生かした学校改革

～全ての生徒の学ぶ権利を保障する学校づくり～

新ひだか町立静内第三中学校 小嶋 範彦

## 一 はじめに

旧静内町と三石町が合併し生まれた新ひだか町は、日高管内の中央に位置し、涼夏少雪の気候に恵まれ、名馬を排出したサラブレッドの産地、ひだか昆布をはじめとする海産物の宝庫として知られている。また、二〇〇〇本以上の桜が7kmに渡って続く二十間道路が日本の道・桜の名所一〇〇選に選ばれ、五月の連休中は、花見と春ウニを求める観光客で賑わっている。町内には中学校三校、小学校六校、高等学校二校、特別支援学校一校がある。本校は昭和五十七年にマンモス化した静内中学校の校区の一部と御園中学校を統合して開校された。校地は、放牧地や農場、閑静な住宅街に囲まれ、落ち着いた環境にある。保護者の職業は、農牧業、公務員、団体職員、サービス業など多岐に渡っている。生徒数は開校当時四〇〇人を超えていたが、徐々に減少化がみられ、現在は全校生徒二六〇人、教職員二五人の学校である。

生徒指導上の問題が多く発生し対応に苦慮していたことから、前任の校長のリーダーシップにより、東京大学名誉教授佐藤学氏が

提唱する「学びの共同体」の理念による「協同的な学び」に平成二十九年度から取り組み、学校は大きく変わった。

## 二 「与える授業」から「支える授業」へ

### 目指す生徒像

「学ぶ」ことをあきらめず  
他者と「コミュニケーション」を図り  
ねばり強く「考える」生徒

目指す生徒像を捉え直し、「授業」と「研修」を変えた。

授業では、生徒の関わり合いに重点を置くため、教師の説明は必要最低限にし、生徒同士が関わり合う時間を確保する。教師は生徒同士の関わりを見取り、生徒同士や生徒の考えを「つなぐ」、生徒の考えを全体に「戻す」ファシリテーターの役割をする。授業の主体を教師から生徒へ移行する。授業を変えることで学校を変える取組である。

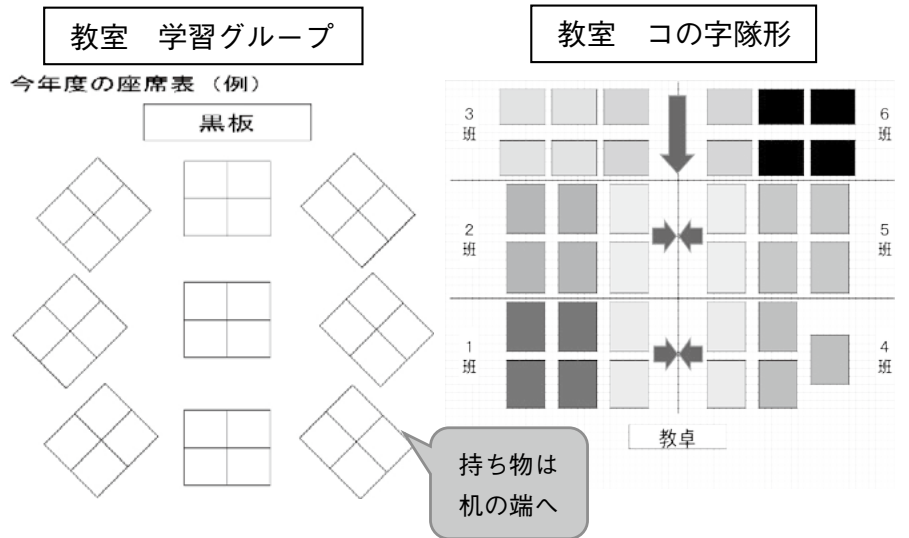
研修では、授業のやり方を議論するのではなく、生徒の学びを丁寧に見取る。一人も取り残さない、全ての生徒の学ぶ権利を保障す

ることが「学びの共同体」の理念である。教師は全員で見る生徒を分担し、その生徒の学びを一時間観察する。数台のカメラで授業映像を撮り、授業後の話し合いでは、その映像を流しながら生徒の学びを語り合う研修を行っている。

## 三 「学びの共同体」の学校へ

全学級、教室の日常隊形をコの字にする。全教科、毎時間で生徒同士が関わる場面を設定する。課題を提示したら、四人グループになり考える。グループで一つの答えを出すのではなく、それぞれに考え、分からないことがあれば、「ねえ、ここどうするの」と聞く。分からないことがあれば、分からないと言えない「聴き合う関係」を育てる。グループは教え合いではなく、学び合いをするためのものである。関わるのが苦手な生徒へは、教師が他の生徒へ「つなぐ」声かけをする。教師は生徒の思考を発表させ、他の生徒の理解を深めたり、生徒同士をつないだりする。





四人グループは、同性が対角線上に座ると会話が広がる。教科の基礎となる教科書レベルの問題を「共有の課題」、教科書をこえた教科の本質にせまる問題を「ジャンプの課題」とよび一時間の中に入れる。「ジャンプの課題」を通して「深い学び」にせまり、教師も専門家として共に学び育ち合う学校をつくる。

#### 四 今年度の重点

##### 1 発表する場面をつくる

発表する生徒は、顔や体を聞いている生徒に向けて話す。聞いている生徒は、顔や体を発表する生徒に向けて聞く。教師の立ち位置は教室後方にし、教師に向けて話すのではなく、他の生徒に向けて話すことを意識させる。生徒の言葉で、生徒の考えを伝えるように、生徒の発言を教師が言い直すようなことはしない。

##### 2 環境を整える

机上にある生徒の持ち物が生徒同士を分断させないために、持ち物は机の端に寄せる。四人グループ座席から黒板が見やすいように、両端のグループは机を斜めにする。

##### 3 プランからデザインへ

これまで公開授業をするときは、数枚に及ぶ学習指導案を作成してきた。指導案を入念に吟味し検討を繰り返すほど、教師はプランどおり授業を進めようとする。生徒は教師の予想どおり反応し回答するとは限らない。授業の主体が教師から生徒へ移行したのであれば、教師は自分の思い描いた授業どおり進めるのではなく、生徒の反応に合わせて柔軟に対応するべきである。その結果本校では、プランは捨て、A4両面一枚の授業デザインを作成する。授業デザインには、①単元名 ②生徒の実態 ③単元の指導計画と評価規準 ④本時のね

らい ⑤本時で身につけさせたい力 ⑥共有課題とジャンプの課題を含む授業の流れなどを簡潔に書いている。

#### 五 生徒の変容

##### 1 落ち着いた学校生活

現在の生徒は、驚くほど落ち着いた学校生活をおくっている。かつて生徒指導上の問題が多発していた学校とは思えない毎日である。授業中机に伏せていたり、授業を妨害したりするような生徒は一人もない。理解度には差があるが、それぞれが学びに向かっている。不登校生徒は三年生に数人いるものの、一・二年生はゼロである。全校生徒が一堂に集まると、自然に私語が止み整然と集会が始まる。体育大会では三年生を中心とした種目別練習が行われ、六つの大会新記録が生まれた。学校祭は学年ごとに工夫されたステージ発表が行われ、感動で目頭が熱くなった。

どうしてこのような学校になったのか。授業が変わったからだと思ふ。一日の大部分を占める授業が、先生の説明を聞く受け身の授業から、自分たちで課題を解決する主体的な学びへと変わったからである。分からないことはいつでも聞ける安心感が教室にある。「学び合い」を毎時間行うことで、生徒同士の関係性が深まり、人との関わり合いが上手になっている。また「ジャンプの課題」に挑戦する経験の積み

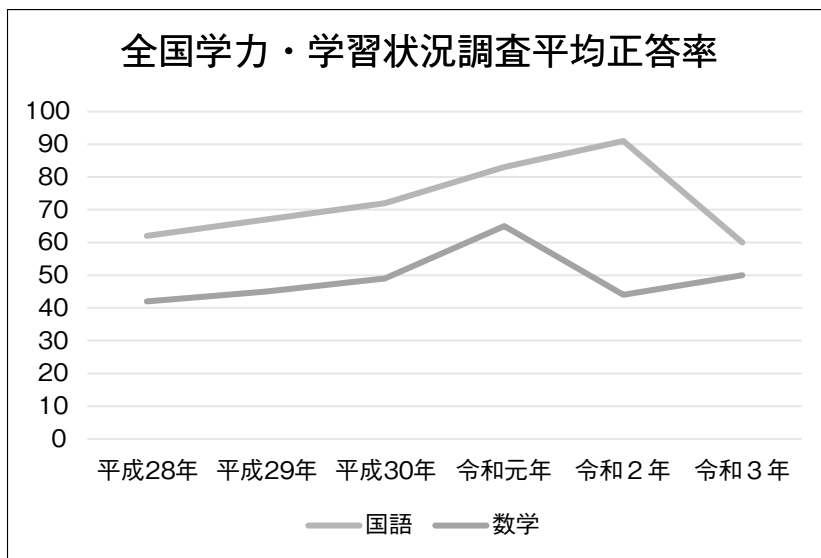
重ねから、困難なことに挑戦する価値を実感し、探究することができる。それが学校行事を充実させている原動力である。



## 2 学力調査結果の変化

全国学力・学習状況調査や町独自に行っているCRT検査の結果が、「学び合い」に取組始めてから徐々に変わっていった。平成二十八年には、国語、数学ともに七〇ポイント程度全国の平均正答率を下回っていたが、平成三十年に国語Bで全国平均を初めて超え、令和元年度には国語、数学それぞれ一〇〜五ポイント全国の平均正答率を上回った。今年度は再び、国語、数学ともに全国平均を下回っている。これまで右肩上がりに伸びていた平均正答率が

伸び悩んだ理由はいくつか考えられる。ただ現三年生が小学校六年生ときの調査結果と比べると五〜七ポイント上昇しており、CRT検査からは三年間の確実な成長が見て取れる。  
(グラフ上の平成二十八年から平成三十年までの調査結果はA、B問題を平均した正答率を表記)



## 六 現在とこれからの課題

毎年人事異動があり、教職員が入れ替わる。その中で、理念を共有し、授業観をそろえることが本校の課題である。平成二十九年度の学校改革スタート時を知る教員は少なくなってきた。現在は学校が落ち着き、誰がどんな授業をしてもさほど苦労することはない。その中で転入してきた者には、これまで実践してきた授業を変える必要性は感じられないかもしれない。学校を変えたいという一心で取り組んできた教師たちは、生徒の変容を目の当たりにしてきたが、最近の転入者にはその実感がないし、これから先もそうだろう。それが学力調査結果に表れ始めているのかもしれない。

新型コロナウイルスの感染拡大は、本校にとっても大打撃である。距離をとると「学び合い」は成立しない。そんな中でも「協同的な学び」を継続できているのは、学校の変化を感じてきた地域、保護者の理解と信頼のおかげである。本校は、「学びの共同体の学校」として、これからも継続していく。



## 組織的な運動能力・運動意欲の育成に向けた取組

「運動することの楽しさや喜びを味わうことや地域との連携を通じて」

小樽市立松ヶ枝中学校 岡崎利美

### 一 はじめに

本校は、過去三度スキー国体を実施した天狗山スキー場まで徒歩一〇分という小樽湾頭を一望する場所に位置している。昭和三十三年、当時小樽市としては初めての鉄筋コンクリート造り校舎として一七学級九三五人の生徒という形でスタートし、今年で六四年目を迎えている。文武の両立を目指し、スキー界では、映画「ヒノマルソウル」、小林賀子役モデルとなった女子ジャンプ黎明期の名選手葛西賀子さんや全日本基礎スキー選手権二連覇を達成した武田竜さん。文芸界では、作家京極夏彦さん。芸能界では、情報番組司会者として活躍している加藤浩次さんなど、幅広い分野で活躍している卒業生が多数いる。校舎の老朽化もあり、令和二年度、旧最上小学校を改修し現在地に移転した。現在は少子化の影響で生徒数一八一人九学級（特別支援三学級を含む）教職員二三人の市内では中規模校である。

校下の小学校は、平成三十年に三校（緑、最上、入船）が合併して新設された山の手小学校で、ほぼ全員の生徒が山の手小から入学

する。令和三年から、小樽市の施策で、小中一貫教育を推進しており、今年度は小中一貫グラウンドデザインに基づき、教育課程、生徒指導、研修の三部担当者による、協議を経て、コロナ禍で限られた内容とはなったが、教員双方向の授業参観、出前授業、はじめ防止に向けた児童会・生徒会の合同会議（オンライン）、生徒レベルでの学習規律の作成等に取り組むことができた。また、生徒はともも素直で落ち着いた生活を送っており、後期生徒会は、校長が示した年度重点目標「時を守り、場を清め、礼を正す 温かい学校づくり」を受け生徒会キャッチフレーズとして資料1にある「温時場礼」という四字熟語を創作し校内各所に掲示してくれている。

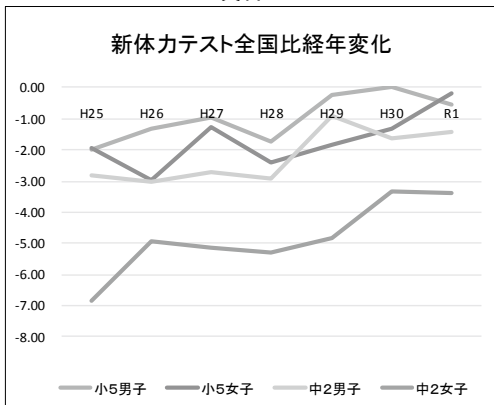
資料1



### 二 小樽市における組織的な体力向上の取組

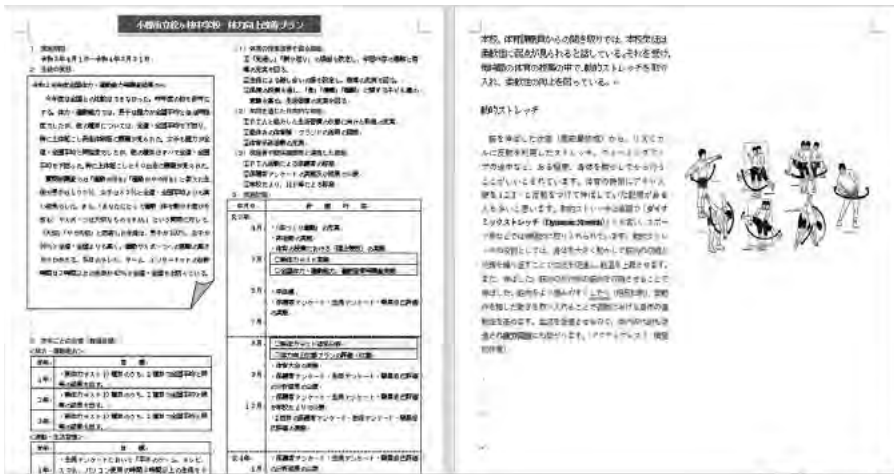
小樽市教育推進計画では、「健やかな体の育成」を目標とし、体力・運動能力の向上、食育の推進を具体的施策項目の一つとして掲げている。それをうけ、小樽市教育委員会は平成二十七年より、小樽市小中学校体力向上検討委員会を立ち上げ、小樽市の子供たちの体力向上、生活習慣の改善に係る研修会に関する取組等を行っている。資料2は小樽市教育委員会が集計した小樽市立学校の全国体力・運動能力、運動習慣調査結果合計得

資料2



点全国平均との経年比である。平成二十七年  
度から右肩上がりになっていることが読み取  
れる。小樽市教育委員会が主導し、市内全小  
中学校が体力向上プランを作成し、ホーム  
ページ等で保護者・地域に公開している。  
(資料3) これらの、組織的な取組の結果が  
資料2小樽市の児童・生徒の確実な体力向上  
に寄与したものと考える。

資料3



資料4は令和三年度全国体力・運動能力・  
運動習慣調査結果である。体育の授業は楽  
しいと答えた生徒は調査対象全学年で全国  
平均を上回り、体育の授業のはじめに目標が  
示されたと回答した児童・生徒も全て全国平  
均を上回り、中学校ではその差が顕著であっ  
た。これらの結果は、体育科の授業改善が小  
樽市全体のものとなっていることを表してい  
る。  
新体力テストの結果は、調査母数の減少も  
あり、多少の上下は致し方ないものがある。  
しかし、授業改善の成果が如実に現れる資料  
4の結果は大変に喜ばしい成果であると捉え  
ている。

資料4

◆体育（保健体育）の授業は楽しいか

	小5男子	小5女子	中2男子	中2女子
全国	72.0	58.3	52.9	39.6
北海道	72.1	57.9	55.9	40.9
<b>小樽市</b>	<b>77.8</b>	<b>66.3</b>	<b>55.9</b>	<b>40.9</b>
全国比	5.8	8.0	3.0	1.3

◆授業のはじめに目標が示されているか

	小5男子	小5女子	中2男子	中2女子
全国	49.4	47.4	62.4	60.6
北海道	52.5	50.4	67.5	65.5
<b>小樽市</b>	<b>52.8</b>	<b>54.2</b>	<b>76.8</b>	<b>73.1</b>
全国比	3.4	6.8	14.4	12.5

三 小樽市体力向上検討委員会による取組

前記の通り、平成二十七年より、小樽市  
小中学校体力向上検討委員会を立ち上げ継  
続して様々な取組を行っている。構成員は基  
本的に公募という形をとり、小学校四人、中  
学校四人、養護教諭一人、栄養教諭一人計十  
人となっている。発足当初は授業改善に関わ  
る資料作成や、実技講習会を行ってきた。し  
かし、コロナ禍で集合形式の研修会の実施が  
難しくなったこと、さらには、いつでもより  
多くの先生方に見てもらえるようにという意  
見が出て、平成二十八年度からは、資料をよ  
り効果的に利用してもらうため、冊子による  
資料提供と併せて動画配信という形もとるこ  
ととした。資料5は中学校委員によるバス  
ケットボールドリル学習と小学校委員による  
追っかけ動画活用の動画配信の様子である。

資料5



四 温故知新

〜若手教員の育成を通して〜

昨年度三人、今年度二人小樽市中学校に  
体育科の新規採用教員が採用された。（本校

にも今年度一人着任)小樽市中学校全二二校からすると驚くべき数字である。児童・生徒に継続して運動することの楽しさや喜びを味わわせるためにも、これら若手教員の育成を使命のように感じた。しかし、令和二年度は、コロナ禍で小樽市教育研究会を始め、各種研修の多くは中止、初任者研修も多くはオンライン形式での実施となり、初任者教員の研修の場は限られたものとなった。小樽市学校体育研究会は会員数二十余人小所帯の組織ではあるが、それ故のフットワークを活かし、コロナが沈静化した十月に、ミドルリーダー層による、示範授業と、ベテラン層をコーディネータとした授業実践上の悩み相談座談会を行った。今年度は、参加者に事前アンケートを取り、授業実践上の課題を明らかにした。それを下に、授業公開の中で、新学習指導要領における評価項目に沿った評価演習を実施し、その後の座談会で交流の場をもった。

参加者からは、「授業者から、ティーチング(教える)とコーチング(導く)のバランスの重要性を学ぶことができ大変参考になった。毎年座談会を実施していただき親身な指導を財産として子供たちに還元したい」「授業参観から、三年間の見直しをもち授業を組み立てることの必要性を痛感しました。また、座談会では、経験豊富な先生方と疑問点や不安点についてお話を聞くことができ、生徒への様々なアプローチの仕方を聞く

ことができとても勉強になりました」などの声がよせられた。また、参加した初任者は、いずれも校内授業研究に意欲的に手を上げ、一人一台端末を駆使した授業を公開するなど意欲を見せてくれた。このように、諸先輩の不易の実践を下に若手教員の育成に当たっているところである。

##### 五 地域との連携とスキー指導者派遣

小樽はスキーの街と言われている。その所には、レルヒ少佐が日本にスキーを伝えた翌年小樽高商(現小樽商科大学)で講習会を開催、一九二三年には、第一回全日本スキー選手権大会が小樽市緑町で開催されていることがある。人口一万人の市内に三か所のスキー場があり、市内全ての小中学校でスキー授業が行われている。

カービングスキーが登場し久しいが、用具の変化と合わせ、スキー指導法や技術の名称も変化している。(ウエーデルンや二mのスキー板は過去のものとなってしまった)また、安全で丁寧なスキー指導という視点から、指導者不足が課題となってきた。小樽市教育委員会ではボランティアを募集しているが、人数も限られており、スキー授業担当や管理職が各方面に掛け合い苦勞される様子が散見された。そこで今年度、七〇年以上の歴史をもち、冬季休業中市内児童・生徒を対象とした小樽スキー学校を主管している小樽市学校スキー研究会は、小樽スキー連盟

が運営している小樽天狗山スキー学校の協力を得て、希望する学校への指導員派遣調整を行った。公認指導員による指導は、児童生徒はもちろん、教員のスキー技術の学びの場になると期待される。このように、各種スポーツ団体とつながりをもつことも今後益々重要になってくると考える。

##### 六 終わりに 前へ

令和二年一月に新型コロナウイルス感染者が国内で初めて確認され三年目を迎えている。先行きの不透明な時代に、コロナ禍が一層の拍車を掛けた感がある。また、部活動も、令和五年度からの運動部活動の段階的地域移行という大きな変革期を迎える。

そのような中この二年間、長期に渡る休校、中体連大会中止、感染リスクのある運動制限、楽しみにしていた行事の中止等々、子供たちは未曾有のつらい経験をしてきた。しかし、「運動が好き、体育の授業は楽しい」と笑顔でスポーツを楽しむ子供たちがいる。未来を担う子供たちが、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現することができるよう、私たちは歩みを止めることなく真剣に支えていかなければならないと考えている。

# 今年 の道 の中

## 第六三回 北海道中学校長会研究大会 宗谷・稚内大会を終えて

札幌市・北辰中 小澤 保範

(研修部長)

### 一 はじめに

第六三回北海道中学校長会研究大会宗谷・稚内大会は、大会主題「新たな時代を切り拓き、より良い社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」新学習指導要領全面实施、日本のてっぺん稚内から子供に確かで豊かな資質・能力を育てる「学校経営」を掲げ、教育課題の解決と、これからの明確な展望が開ける大会にするべく、九月二十四日、オンラインにて開催された。令和二年度からの四か年継続研究の二年目として、学校が直面する課題に対し方向性を示す大会であった。開会式で、三浦利章大会長は「新しい時代に必要となる資質・能力を育成するため、『社会に開かれた教育課程』を実現するカリキュラム・マネジメントの確立を図るとともに、新型コロナウイルス感染症対応として、子供の健康安全と学力保障にも取り組むことが重要である」と挨拶された。

佐藤佳弘大会実行委員長からは、参加者への歓迎と関係各位への謝意、そしてオンライン開催による大会成功を期する御挨拶があった。

### 二 全日中会長情勢報告

全日本中学校長会会長宮澤一則氏からは、今年度の全日中の総会において文部科学省初等中等教育局長が使用した資料を基本に中教審における新しい情報を加えながら、教育情勢について説明をいただいた。

### 三 全日中提案概要説明

第七二回全日本中学校長会研究協議会静岡大会の第一分科会「『カリキュラム・マネジメント』の推進」において提案される二人の校長から、提案内容の概要説明が行われた。

◎提案者1 中標津町立計根別学園 村上 玄一郎 校長

「義務教育学校の特徴を生かした小中一貫教育の推進を通して」

◎提案者2 網走市立第二中学校 垣内 孝仁 校長

「資質能力の向上を推進するカリキュラム・マネジメントと校長の指導性」

### 四 分科会のまとめ

五つの分科会も全てオンライン開催となり、各研究主題のもと提言が行われ、研究の視点に基づき熱心な協議が行われた。

【第一分科会】「社会に開かれた教育課程」の実現

◎研究の視点 「カリキュラム・マネジメント」の推進

1 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていく教育課程の編成・実施

2 教育課程の実施状況を評価し、その改善を図るための学校評価の開発

◎提言者 旭川市立広陵中学校 千葉 雅樹 校長

視点1については、各中学校区で学校運営協議会を通して、小中九年間を見通した教育課程や教育活動に位置付けた地域と連携した活動が紹介された。視点2については、各中学校区で学校運営協議会を通して、学校評価の充実を図るための方策が紹介された。グループ協議では視点1については、プロジェクトの具体的な内容と実施プロセスについての質疑応答、及び、コミュニティ・スクールと外部評価実施の様相や地域学校協働本部の稼働状況についての情報交流が行われた。

【第二分科会】新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実

◎研究の視点 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した学校経営の推進

1 生きて働く「知識・技能」の習得と「見方・考え方」を深める教科指導の改善

2 「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点による学習評価の開発

◎提言者 標茶町立虹別中学校 嶋崎 浩一 校長

校長が意図的に研修部との関わりをもって校内研修を行い、授業参観を通して授業改善の具体的な指導・助言に結びつける実践が紹介された。グループ協議では、視点1については、授業参観等において、意味のある助言をするために、校長としても「見方・考え方」のどちら方が大切であることが協議された。視点2については、三観点での評価が教師に浸透していない実情があるという課題について検討が行われた。

【第三分科会】 豊かな心と健やかな体を育む教育の充実

◎研究の視点 健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実

1 スポーツとの多様な関わり方を選択、実践できる力の育成と体力の向上

2 食育の推進と心身の健康の保持増進に関する指導の充実

◎提言者 鹿部町立鹿部中学校 後藤 正弘 校長

視点1については、実践事例から、体力向上プランの作成と検証、全員で取り組める体力向上策の実施と継続の大切さが紹介された。視点2については、栄養教諭の配置環境や活用の仕方が大きなポイントとして存在していることが紹介された。グループ協議では、視点1については体育授業の改善・充実を図り、子供たちに運動の楽しさを実感させることの大切さについて検討が行われた。視点2については、「食育の推進」及び「心身の健康の保持増進」という観点で参加者が意見を述べ、食育の充実を図るために市町や学校に配置されている栄養教諭との連携の大切さについて協議が深められた。

【第四分科会】 多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成と働き方改革の推進

◎研究の視点 教職員としての豊かな人間性や指導力の向上

1 生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教員の育成と研修の在り方

2 教科・領域の専門性と指導力を高められる人材育成と研修の在り方

◎提言者 札幌市立北野台中学校 安田 仁昭 校長

視点1については、「学校力」を高めることが重要であり、そのためには、組織的・機動的な学校運営体制の構築が必要であることが紹介された。視点2については、個々の教職員が向上心を抱き、参画意識をもち、多様化する教育環境に柔軟に関わることが必要であることが紹介された。グループ協議では、視点1については、小中相互の授業参観とその後のお話し合い、校内研の交流、生徒指導の情報共有などの実践事例についての紹介があった。視点2については一人一台端末の活用状況について情報交流が行われた。

【第五分科会】 家庭・地域や校種間における連携・協働の推進

◎研究の視点 学校の教育活動への参画を促す学校経営

1 家庭や地域との連携、コミュニティ・スクール等を活用した教育の充実

2 家庭の教育力を高め生活習慣や学習習慣を確立する取組の充実

◎提言者 滝川市立明苑中学校 鎌田 俊博 校長

視点1については、CSのスタートに当たっては、既存の仕組みである学校関係者評価委員制度や学校支援地域本部事業を活用し、地域コーディネーターが間に入って各中学校区で構成されたことが紹介された。視点2については、小中共通の家庭学習週間の設定、置き勉強プロジェクトの取組等の特徴的な取組が紹介された。グループ協議では、視点1については、既存の組織を活用しながら充実した取組を推進している例が報告された。視点2については、家庭でのメディアに触れる時間の改善に苦慮している例が報告された。

五 おわりに

全道各地から約二七〇人（分科会は一五〇人）の会員がオンラインにて参加し、今日的な教育課題について交流を深めるとともに、全国情勢も把握することができる大会となった。宗谷校長会をはじめ、お力添えいただいた関係各位に改めて感謝申し上げ、次期開催の全日中研究協議会北海道（札幌）大会の成功を祈念し、本年度研究大会の報告とする。

# 今年 道の中

## 第七二回全日本中学校長会研究協議会 静岡大会提言概要 第一分科会・研究題「カリキュラム・マネジメント」の推進

第七二回全日本中学校長会研究協議会静岡大会は、令和三年十月二十日（水）から二十二日（金）までの三日間、全国から一、一〇〇人を超える会員の参加の下、アクトシティ浜松コンgresセンターを主会場に、初の試みとなるオンラインにより開催された。「新たな時代を切り拓き、より良い社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」を研究大会主題として全体協議会を実施するとともに、主題を踏まえた八つの研究協議会を柱に八分科会でZoomのブレイクアウトルームを利用し熱心な研究協議が行われた。

北海道からは第一分科会において、村上 玄一郎校長（中標津町立計根別学園）が提案発表した。

ここでは、大会当日の提案発表の概要を掲載した。

## 「カリキュラム・マネジメント」の推進 ～義務教育学校の特徴を生かした 小中一貫教育の推進を通して～

中標津町・計根別学園 村上 玄一郎

### I はじめに

平成十七年の中教審答申で示された「新しい時代の義務教育を創造する」との理念から生まれた義務教育学校は、平成二十八年四月に改正学校教育法が施行され、北海道に二校の義務教育学校が開校し、令和二年度には一校となっている。

本校は、その先駆けとなった平成二十八年度に開校した義務教育学校であり、令和二年度で五年目を迎える。

北海道では、義務教育学校としての校長会は発足していないため、義務教育学校校長独自のネットワークをつくり、義務教育学校の発展を目指し、情報交換や意見交流などを行って



いる。

また、北海道教育庁学校教育局義務教育課が主催する学園ネットワークコミュニティ（学園ネット）も前年度から立ち上げられ、義務教育学校の校長以外の職種（教頭、主幹教諭、教務、生徒指導、養護教諭、事務職員など）のネットワークも充実し始めている。

### II 義務教育学校について

#### 1 新しい学校種の必要性

小学校と中学校では、子供の発達段階に応じて教育活動が異なるため、指導体制など様々な違いが、現在まで積み上げられてきた。このために、単に小学校と中学校を組織として一緒にする（小中学校化）だけでは様々な課題を解決することが困難であった。

そこで、小学校と中学校が別々の組織として設置されていたことに起因していた様々な実施上の課題を解消するため、全ての教師が義務教育九年間に責任をもって教育活動を行う小中一貫教育を継続的・安定的に行える新しい学校種として、義務教育学校が期待されている。

#### 2 義務教育学校の学校経営の基本

義務教育学校の学校経営において、大切なことは、義務教育九年間を連続した教育課程として捉え、適切なカリキュラム・マネジメント



を行うことであり、具体的な取組内容の質を高めることである。

つまり、義務教育学校には「小学校だったら」とか、「中学校だったら」という戦後七五年以上積み上げられた固定概念を振り払い、例えば小学校経験をもつ教師には、六年生は九年間の義務教育の六年目でしかないという、大きな認識の変化をもたせる必要がある。このように小学校と中学校の異なる文化の融合が義務教育学校の発展の鍵となるため、本校では「小でもない、中でもない、新しい学校の創造」を学校経営のブランドデザインの中心に据え、学校教育目標と平行して、教職員全員に意識させている。

### Ⅲ 実践の概要

#### 1 本校の教育課程の編成

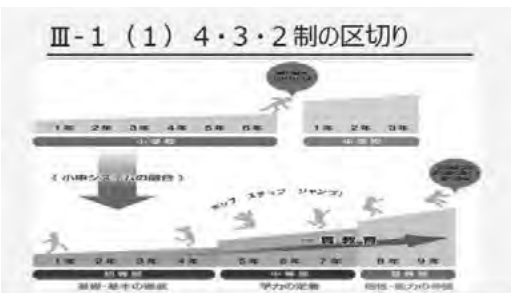
##### (一) 四・三・二の区切り

本校では九年間の義務教育で育みたい子供の姿を全ての教師で共通理解するため、各発達の段階で身に付けるべき力を「夢を紡ぐ力」と名付け、共有するだけでなく、行事や学期ごとにその力が身に付いたかを子供とともに検証し次年度の教育課程の編成に役立てている。

また、九年間を六・三で区切るのではなく四・三・二で区切ることで、中一ギャップを軽減し、四年次と七年次と九年次にリーダーとなる場面を設定することで義務教育期間中により多くの主役となる場面を設定している。そして、四年次終了時には「夢の式(将来の自分の夢を語る)」、七年次終了時には「立志式(夢を実現させるために、自分のところざしを語る)」、九年次には「卒業式(わが誇りを語る)」を儀式的な行事として行い、四・三・二の区切りを意識させている。

##### (二) 日課表の工夫

一〇九年生のカリキュラム編成時に課題となったのが小中の授業の単位時間の違いであった。本校では、初めの二年間は授業時間を四五分と五〇分の併用を採用していたが、中学生の授業時間と小学生の遊



び時間が重なっていたため、三年目から全校五〇分授業とした。初めは「小学生の低学年では集中が続かない」と懸念されたが、五〇分授業に順応したのは子供の方が先であった。このように、九年間の長い義務教育時代に身に付けさせなければならない学習態度や学習規範を定着させるためには、全学年共通の単位時間が五〇分を基本とした教育課程を編成する必要があった。小学校低学年でも、しっかりと授業の組立を行うことで、授業のラスト五分でまとめを深めたり、演習を数多く行ったり、基礎学力の定着に効果的となった。

##### (三) 教科担任制

本校の一〇四年生では一部、五年生以上では、ほぼ完全な教科担任制を採用している。後期課程の教師が前期課程に乗り入れ指導をすればかりでなく、前期課程の教師も中学生の担任になるなど、前期後期の区別なく、教師の適性により、校内人事を行うことができるのが義務教育学校の特徴である。このことによって、本校の教師の平均持ち時数は前期課程で一七・六時間、後期課程で一六・一時間となっており(時数には道徳、特活、総合的な学習の時間も含まれている。特別支援の担任の時数は平均に入れていない)、多くの教師の時数の平均化が実現した。つまり、前期課程の教師に空き時間が生まれ、教材研究や授業準備、通信作りや評価・評定などの事務作業も効率的に行えるようになった。後期課程の教師は小学生の授業を受けもつことで、小学校の教師の苦勞を共有できたり、児童理解が進んだり、七年スタート時には、子供と教師の相互理解が確立した状態で新学期がスタートできるため、中一ギャップの減少に役立っている。

また、教科担任制の効果は児童生徒の学力の向上ばかりでなく、教師の資質向上にも効果があつた。たとえば、小学校の教師は、ほぼ全教科を教えるが、自分の得意な教科を中心に他学年に渡り授業を受けもつこと(教科担任制)で、更はその教科の専門性を向上させている。また、自分の苦手だった教科は空き時間に、他の教師の授業を参観することで、教えるのが苦手だった教科の



研修が可能となった。

また、得意な教科の授業準備は効率よく進むので、ストレスも溜まらず、授業の質も向上したため、働き方改革の推進に役立った。

## 2 児童・生徒指導

### (一) 児童・生徒会

小学校では六年生になるまで、なかなか組織のリーダーになる機会が少ないが、本校では、一〜四年生で組織されている「わかば会」があり、四年生がリーダーとなり、集団活動やレクリエーション活動の基本を学んでいる。また、どの学校にもある生活委員などの通常の委員会は五〜七年生で組織されている「常任委員会」が行い、校内の基本的な委員会活動は七年生がリーダーシップをとっている。九年生になる前に、六年生がリーダーとなる場面はないが、四年生と七年生で二回リーダーとなる経験ができるメリットの方が大きい。最後に八〜九年生で組織されている「特別委員会」はより良い学校の創造を目指して、自分たちで考え、自分たちで企画・立案する生徒会活動を行っている。たとえば、校内にある桜並木の下で、地域の人と昼食を共にする「お花見会」を企画したり、一〜九年生の縦割り班を利用して、朝の挨拶運動を企画したりした。活動には、教師のサポートはほとんど入らず、上級生の自覚と学校をもっと良くしたいという思いで主体的に特別委員会を運営している。

### (二) 縦割り班

全校生徒を二〇の縦割り班に分け、清掃活動や集会活動、体力テストなどを行っている。低学年の子どももお兄さんお姉さんの指示をよく聞かため、清掃の仕方や集団活動の効率化などが図られる。また、後期課程の子どもも低学年の子どもが頼ってくるため、その期待に応えようと多くの学校行事に意欲的に取り組む姿が見られる。また、学校アンケートには保護者から「行事ごとに感じていますが、下級生の子どもたちが九年生の姿を見て学べることはありがたいです」という意見も寄せられている。

### (三) 家庭学習担任制

本校の課題の一つとして、家庭学習の充実があった。そこで、家庭学習がスムーズに計画・実施されるように、アドバイザーや激励が目的の家庭学習専用の担任を配置した。七〜九年生の二〜三人の子どもに

人の割合で担任をつけるため、一般の教師では足りず、校長・教頭も担任として活躍している。具体的には週に三回、帰りの会終了後、五分程度、家庭学習計画ノートを使い、個々に合った家庭学習方法を子供と一緒に模索している。一年間は担任が変わらないため、継続した活動ができ、安定した家庭学習の確保に役立つことができた。今後は五〜六年生にも、家庭学習担任制を広げていきたい。

## 3 他校の実践の概要

北海道にある義務教育学校一校の実践の中から、特徴ある学校の実践をいくつか紹介する。

### (一) 一・二年生からの英語学習

【七飯町立大沼岳陽学校（渡島地区）】  
「日本語もろくに知らないのに、一年生からの英語学習は早期学習だ」という認識が間違いであったことを痛感している。

なぜならば、小学一・二年生の英語の発音が素晴らしいからである。今までの中学校の英語の授業では「教える↓覚える」が主流であったため、目から英語を学び、発音に対して抵抗感があったが、小学一・二年生の英語では「聞く↓まねる」が中心のため、自然と英語の発音がネイティブな発音となる。

担当の教師は中学校の英語の教師二人と英語が得意な中学校の国語の教師と学級担任の四人で年間一〇回の英語の授業を企画・実践している。このように中学校の教師を小学一年生の英語に充てられるのも義務教育学校の特徴である。

また、学校経営方針で校長は「主体的」というワードの代わりに「脱！受け身宣言」というワードを示し、子供がより深い学びを習得できるよう、全職員を引っ張っている。その結果、授業の振り返りでは、自然と英語を使って表現したり、「もっと、やりたい。次はこうしたい」と主体的に意欲を出したりするなど、「脱！受け身宣言」を具現化した授業が行えている。

### (二) 学校全体で取り組むカリキュラム・マネジメント

#### 【白糠町立庶路学園（釧路地区）】

開校初年度、それぞれの学年やブロック（四・三・二制）で目指す、具体的な子供像を求める声が高まり、全職員でブレインストーミングを行い、目指す子供像の共有化を図った。また学校運営協議会で

も協議し、キャリア教育をベースにそれぞれのブロックでの目指す子供像を確立することができた。また、子供とも共有するために、庶路学園の三愛(学び合い、伝え合い、高め合い)を校長から直接、子供たちに説明した。

また、目指す子供像の実現を図るため、行事を見直し、宿泊的行事の無かった七年生で防災宿泊学習(庶路学園が自然災害時に地域の防災拠点となるため)を取り入れた。このことで、宿泊的行事の系統性を確立し、学校運営協議会との協働実践により、「地域とともにある学校」を体現することができた。

このようにして、全職員のブレインストーミングから生まれたアイデアから、九年間の系統性や目指す子供像との関連性について、経営参画意識を高めることができた。今後も義務教育学校の特性を生かした評価・改善を行いながら、地域と連携し、学校全体でカリキュラム・マネジメントを意識した学校経営を進めていく。

### (三) 教科横断的な教育課程の創造

#### 【斜里町立知床ウトロ学校(オホーツク地区)】

「ふるさと知床学習」の充実を目的に総合的な学習の時間の専科教師(義務教育学校の人的配置を工夫して配置した教師)を配置した。これにより、義務教育九年間で学ぶ「ふるさと知床学習」(一〜二年は生活科を利用)を系統立てて充実させていくことができた。この専科教師は世界自然遺産「知床」に詳しく、野外でのアクティビティにも精通しているため、その教師の資質を十分に生かした教育が実践できている。

また、九年生による「知床の未来への提言」では、今まで学習してきた「ふるさと知床学習」を主体的に企画・発表し、地域の教育資源を網羅的に機能させる教育開発が行えている。

また、世界を視野に発展する町として、斜里町は英語教育への期待も大きく、英語教育推進教師を配置し、English WeekやEnglish Campの企画・運営を行っている。

このような校内での人事配置が可能になっているのも、義務教育学校特有の人員配置によるものが大きい。これによって「複数教師で見守る発達の段階を踏まえた学習指導の充実」が可能となり、子供たちの「見守られる喜び、安心感」が高まり、協働しながら子供たちの成長を実感できる職員の意識向上や指導技術も年々向上している。

## IV 成果と課題

本校の大きな成果は、学力向上である。全国学力・学習状況調査では、中一ギャップを経験していない子供(六年次に義務教育学校在籍していた子供)の成績が六年次と九年次を比較したときに、大きく伸びている。本校では六年次に算数・国語ともに全国平均あたりだった子供たちが九年次には、全国トップの県の平均を越えるようになった。この成果が出た大きな要因は六年生から七年生への一貫した教育の接続だと言える。中学校進学により、担当の教師が全員代わり、環境や風土も大きく変わる生活に慣れるには、数か月が必要である。本校は四・三・二制を導入し、五年生以上では全教科で教科担任制を行い、定期テストも五年生で(算数・国語)六年生で(算数・国語・理科・社会)を行い、定期テストへ向けた学習計画作りも後期課程の教師のアドバイスを受け作っている。また、定期テストを受けた教科については、通知表に五段階評価を載せ家庭に知らせ、家庭とともに中一ギャップを乗り越えている。

その結果、学力向上以外の成果としても、不登校の減少、いじめ撲滅への意識向上など、教師・保護者・地域が実感できる成果が見られた。課題としては、義務教育学校の特性を生かした教育活動を進めるにあり、異動してくる教師の今までのキャリアが弊害となることがある。新しい学校・システムづくりには、管理職を含め柔軟な姿勢や対応が求められ、課題解決には多大な時間の話し合いが必要である。しかし、その時間を生み出すことも、工夫が必要であり、大きな課題となっている。働き方改革では教育の質の向上を目的としているため、今後は短時間で有効な会議のもち方の工夫や教育効果の低い行事の精選が急がれる。

## V おわりに

義務教育学校では、今後も個別最適な学びを実践するため、その特性を十分に発揮し、カリキュラム・マネジメントを全ての教育活動において、全職員で行う必要がある。その実践の鍵は校長のリーダーシップであり、全職員が理解しやすい学校経営方針の創造である。

# 「カリキュラム・マネジメント」の推進

## 資質能力の向上を推進する

## カリキュラム・マネジメントと校長の指導性

網走市・第二中 垣内 孝仁

### I はじめに

近年、わが国は生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、技術革新等により、社会構造が大きく急速に変化し、予測が困難な時代となっている。また、少子高齢化が進む中で、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる、新たな価値を生み出す生徒の育成が期待される。一人一人が持続可能な社会の担い手として、未来を開拓していくことができるように教育課程全体を通して「生きる力」の育成が求められてくる。

新学習指導要領では、「生きて働く『知識・技能』の習得」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」「学びを人々や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の三つの柱で教育課程が再整理され、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善が求められている。私たち校長は、「社会に開かれた教育課程」を実現するために、課題を明確にし、地域社会との連携・協働のもと教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントの確立が重要であると考え、実践を提言する。

### II 学校、地域の状況

#### 1 地域及び学校について

北海道は面積が国土の約二二％、人口は約五六〇万人で、一四の総合振興局・振興局で地域が区分されている。網走市（人口三万四、〇〇〇人）はオホーツク総合振興局（管轄は岐阜県の面積に相当）に属し、市内には小学校八校、中学校五校、小中併置校一校がある。

赴任し二年目を迎える網走市立第二中学校は、オホーツク海、知床

連山、冬には流水が見渡せる高台に位置している。各学年二学級、特別支援四学級、生徒数は一七五人の規模の学校である。

教職員（本務者）の総数は、主幹教諭一人と加配教諭（指導方法工夫改善、免許外解消教諭）二人を含む二〇人で、学習支援員、事務補、公務補、巡回のスクールカウンセラー、学校司書を含めると総勢二九人の教職員で構成されている。

#### 2 本校の課題と主題設定の理由

本校の重点教育目標は「自ら学び 共に学び合い 夢や希望に向かって歩む中学生」と設定し、全教職員に浸透させることを目指して学校経営に取り組んでいる。令和元年度の「全国学力・学習状況調査」から、「説明する力」「思考・判断する力」「表現する力」に全国平均と比較すると課題が見られた。また生徒の授業アンケートの結果からは、「自分の意見や考えを書いたり発表したりする機会では、自分の意見や考えが相手にうまく伝わるように、文書や言葉で説明することができていると思うか」の質問に対し、自己肯定感が低い結果であった。さらに標準学力検査（CRT）では「教科への興味・探究への姿勢」が低く、学習に対して受け身の姿勢があることが読み取れた。このことから、「主体的に学習」に取り組む姿勢の向上には、「対話的な学習」の実現を通して、生徒の「思考力・判断力・表現力」を育成する取組が効果的であると考え、網走市校長会、オホーツク教育局の取組と連携し、授業改善を核としたカリキュラム・マネジメントを主題に設定した。

### III 研究の概要

#### 1 網走市内小中学校の教育力を向上させる取組

網走市の児童生徒は、「全国学力・学習状況調査」の結果が全国平均より低位の状況が続いており、学力向上は喫緊の課題であった。そのような現状の中、平成二十四年度、網走市校長会は網走つ子の生きる力の確かな向上を目指し、「学力向上宣言」を出した。

それとほぼ同時に、市の将来を担う子供たちに確かな学力を育むことをねらいとして「網走市学力向上推進委員会」（以下AGK）が発足した。AGKの運営は、教育長が任命した校長・教頭からなる役

員及び各学校で選出された推進委員で構成されている。以後、教育委員会との力強い支援の下、「オール網走の取組」「チーム学校の取組」「人材育成」を中心テーマに掲げ、AGKは網走市の児童生徒の学力向上を目指し、校長のリーダーシップのもと各校で教育実践が展開されている。

主な取組としては、情報交流、資料の作成、教科等指導力向上のための企画、その他教育長の定める事項について調査研究を行うなど組織として活動を続け、今年度で一〇年目の節目となっている。

AGK発足以来、「学力向上」と「授業改善」は二つの重要な柱であり、オール網走で取り組む学力向上推進の構想（二年計画）を立て、実践を継続している。令和元年～二年度の推進の重点は以下の四点である。

- ・ 児童生徒の学力・学習状況の実態把握と分析（学力向上策の検証）
  - ・ 全校共通指導事項の取組状況の確認
  - ・ 授業改善に係る研修の推進
  - ・ 各学校における人材育成の取組の共有
- また、具体的な取組は以下の三点である。

- ・ 各校の公開研究会（市内全ての小中学校が実施）への参加
- ・ 実践研修講座の開催
- ・ 「全国学力・学習状況調査」を活用した学力向上策の策定。

特に実践研修講座は「学力向上フォーラムin網走」と称し、ワークショップを中心に、視察研修の還元や講演会等も取り入れ、毎年開催されている。令和二年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となったが、前北海道教育委員会教育委員の鶴羽佳子氏の講演や、食育（栄養教諭）、学校図書館（学校司書）、特別支援教育、地域学習など二〇のブースでのワークショップが計画されていた。「学力向上フォーラムin網走」は、オホーツク管内にも広く声かけをし、多くの学校関係者、保護者、地域の方が参加する場となっている。

さらに、令和二年度には網走市教育委員会と網走市校長会が共同し、校長等の役員と各校から選出された推進委員で構成される「ICT教育推進協議会」が設置された。本会の目的は、市内の教職員を対

**令和2年12月5日(土)**  
**会場：網走市立中央小学校**  
〒093-0084 網走市向陽ヶ丘4丁目67番地1

<b>定員</b>	150名	<b>参加費</b>	無料
<b>対象</b>	教職員・市内教育関係者・保護者 <small>※新型コロナウイルス対応のため、人数制限をします。希望多数の場合は、抽選りする場合がありますのでご了承ください。</small>		

**《日程》**

受付 8:25～8:40  
開会式 8:40～8:55  
ワークショップ 9:05～10:25  
休憩 10:35～11:05  
講演 11:10～12:10  
閉会式 12:10～12:25

**講演**

『アフターコロナにおける網走市の教育について(仮)』  
(株)「オフィス鶴羽」代表取締役  
中教審初等中等教育分科会部副委員長  
(元アフター・前北海道教育委員会委員)

**鶴羽佳子氏**

**ICT先進校視察報告**

◎北海道教育大学附属創部中学校  
中央小学校 教頭 佐藤 拓  
第二中学校 教頭 山田 浩哉  
◎北海道教育大学附属遠藤中学校  
網走小学校 主幹教諭 安田 秀壽  
第一中学校 主幹教諭 佐藤 大志

**ワークショップ(10ブース)**  
新学習指導要領に基づく教職、地域と連携した教育のあり方について情報・紹介します！  
(以下の中から、第1～第6希望まで選び、参加申込書に記載してください)3回に分けて3つのブースに参加していただきます。

- 1番「食育」  
網走市栄養教育協議会
- 2番「学校図書館」  
網走市学校図書館協議会
- 3番「ICT活用」  
網走市立中央小学校 谷口 真入
- 4番「プログラミング教育」  
網走市立中央小学校 佐藤 拓
- 5番「防災・危機対応」  
網走市立西が丘小学校 佐藤 耕
- 6番「若手教員支援づくり」  
網走市立白鳥合小 室田 一央  
網走市立白鳥合小 大尾 拓男  
網走市立白鳥合小 林 誠之介
- 7番「地域学習」  
網走市立町人小 小原恵子  
網走市立西が丘小 伊藤来由紀
- 8番「WEB配信」  
網走市立第一中学校 佐藤 大志
- 9番「学校力」  
網走市立梅尾小 加藤 正俊
- 10番「教材開発」  
網走市立南小学校 佐藤 陽

◇ご挨拶◇  
多岐にわたる、変化の激しいこれからの社会において、子どもたちにとっての資力・能力を育んでいかなければならないのでしょうか。新しい時代に向けて、どのような力を持った子どもを育てていけるべきなのか、『第8回学力向上フォーラムin網走』に参加して、一緒に考えてみませんか。みなさまのご参加を心からお待ちしています。  
(なお、今年度は新型コロナウイルス対策を行いながらの実施となります。全体の参加者は例年の半程度程度の150名を定員とし、ワークショップは事前調整を行います。)  
主催者代表 網走市学力向上推進委員会委員長 網走市立中央小学校長 沼田 泰雄

《参加申込・問い合わせ》  
網走市学力向上推進委員会  
事務局長 江添 正人  
〒093-0042  
北海道網走市鶴見188  
網走市立第三中学校  
TEL:0152-44-8738  
FAX:0152-44-8791

象としたICT研修の実施等、各校のIGAスクール構想の推進の支援である。この会の運営にもAGKの経験が活かされている。

2 「オールオホーツクで学力向上を！」の取組

平成二十七年よりオホーツク管内学力向上支援事業として、北海道教育庁オホーツク教育局、オホーツク管内教育委員会協議会教育長部会、オホーツク管内校長会の三者が共同実施する「オールオホーツクで学力向上を！」（以下「オールオホーツク」）の取組が



ある。目的は、管内の全ての学校が主体的に授業改善を図ることである。オホーツク教育局の指導助言の下、各校が独自のロードマップを作成し、PDCA検証サイクルを確立する取組が行われている。

### 3 「AGK」「オールオホーツク」と本校の授業改善

#### (1) 「AGK」～マネジメントサイクル

AGKの重要な取組の柱である「授業改善」を校内研修の核に据えた本校の取組は以下のとおりである。

#### 「P…計画」

① 重点教育目標に迫るため、校内研修で研究主題の共有化を図った。

② 明らかになった課題から、生徒に身に付けさせたい資質能力を「自ら学び、思考・表現する力の育成」に重点化した。

③ 指導を充実させるために、「主体的な学び」「対話的な学び」の視点を意図的・計画的に授業に組み入れた。また、年二回（前期・後期）、個人研究のテーマを設定し授業改善に臨むこととした。

#### 「D…実行」

① 授業の様々な場面で、生徒に「思考・判断・表現」させながら、設定した授業目標を達成することを意識した指導を行った。

② 授業交流では、改善の視点が目標達成に効果的であったかを教職員で協議した。

#### 「C…評価」

① 公開研究会を行い、公開授業後の研究協議で参加者より評価や講評をもらった。

② 北海道教育庁オホーツク教育局指導主事、網走市教育委員会次長より、授業改善の観点から指導・助言をいただいた。

#### 「A…改善」

① 「表現すること」については今後も質的改善が必要であることを確認し、次の「計画」の見直しへつなげた。

② 着手できることから始めるといふ観点から、「表現の場を増やす授業」や「表現しなければならぬ状況を意図的に作

り出す学習形態」を各教科で取り組んだ。

(2) 「オールオホーツク」～ロードマップの活用

「オールオホーツク」のロードマップを活用し、本校の重点教育目標の実現に向け、以下のような実践の充実化を図ってきた。

① 第一期、第二期、学年末と年三期に分け、目標達成に向け校内で実践を行っている。

② 第一期と第二期の終わりに、学校評価の結果を踏まえ、成果と課題を明確にし、取組内容の修正を行っている。

取組を通し第一期の課題として着目したのは、生徒の授業アンケートによる「自分の考えを表現すること」の評価が三・三（五段階評価）と低かったことである。それを受けて、第二期の校内研修では、教師各々が授業におけるテーマを設定するとともに、「学び合い」「話し合いによる課題解決」「課題の意識付け」を取り入れる授業実践につなげた。

「AGK」「オールオホーツク」と連携した本校の授業改善や課題解決の取組は、「思考力・判断力・表現力」を育み、生徒の資質・能力の向上につながっていった。

## IV 成果と課題

### 1 これまでの成果

網走市校長会は、組織の横の連携と共通認識に基づき、網走の未来を担う子供たち一人一人の確かな学力の育成に向け「チーム網走」として、各校歩調を合わせた取組を推進している。本校においてもAGKの実践内容や成果を、担当者が中心となって校内研修を通じて授業改善に反映させてきた。また、「学力向上フォーラムin網走」にも教職員を積極的に参加させ、授業改善の先進的な実践・情報を収集させ



ることで、自校の教育活動に変化をもたらしてきた。

さらに、改善意欲を教職員にもたせることで、「取り組みたい」という意思が行動につながっていった。生徒の課題を教職員が共有することから始まった本校の授業改善は、「AGK」「オールオホーツク」との目的が合致した取組となり、教職員の学ぶ場の提供や環境づくりが校長が関わることにより、授業改善を意識化する校内研修がより推進され、生徒の課題解決につながることができた。

## 2 今後に向けて

### (1) AGKとのさらなる連携

AGKの目的や取組を本校の教職員が共通理解し、課題解決を図るために、AGKが進める実践と連携を図り、校内研修を中核とした取組を推進することが重要である。また、学力向上を目指すAGKの取組を市内各校が共有し、授業改善に取り組みすることも必要である。そのために、校長自らその主旨を再確認し、教職員に理解を促し、授業改善の実践を積み重ねていくための指導が必須である。

### (2) 授業改善の環境づくり

これからの社会を生き抜くために、児童生徒に必要な資質能力を身に付けさせることが、授業改善の目的である。そのツールとしての「AGK」「オールオホーツク」の取組を積極的に活用することは有効であった。

本校のみの授業改善だけでは、指導工夫の視野が狭くなるため、校長としてAGKを中心に、他校の多様な実践に触れる機会を教職員に与えてきた。今後も、生徒の資質・能力の向上を図るため、本校へのスムーズな還元や、教職員の学びの環境を構築することが求められる。



## V おわりに

現在、コロナ禍での学校教育が進められている。生徒の学びを止めず、学力を保障するために学校は何ができるのか、その可能性を追求する姿勢が問われている。また、社会組織の一部である学校は、社会から何が求められ、それを学びの保障にどうつなげるか、教育課程をデザインする力が校長に求められている。



## 令和三年度の活動及び当面する課題への対応について

事務局長 越田公美

### 一 はじめに

激動する国際社会において、我が国では、二十一世紀にふさわしい、持続可能な社会の仕組みを構築するため、行財政改革、規制緩和、地方分権などの動きが進行している。

教育界においては、教育基本法及び教育関連法規の改正、教育再生実行会議の諸提案、教育振興基本計画策定など一連の教育改革が行われ、新学習指導要領は全面实施となった。「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められるなど、学校教育は新たな変革の時期を迎えている。

私たち中学校長は、学校教育の課題を踏まえ、人間尊重の精神に徹し、「社会を生き抜く力」とともに「よりよい社会を形成する力」を育む教育を推進しなければならぬ。また、生徒・保護者・地域の信頼と期待に応えるため、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮し、学校からの教育改革に努めなければならない。その

ためにも、本来、学校が担うべき業務の明確化・適正化をはじめ、学校の組織運営体制の見直し、教職員の意識改革等により、「学校における働き方改革」を推進する必要がある。

また、東日本大震災をはじめ災害等により被災した地域の復興を期し、教育活動の充実や災害の風化防止に向け、引き続き組織をあげて全力で支援するとともに、今後起こりうる災害に対し、能動的に対応できる生徒を育成するため、全国各地・各学校の防災教育・安全教育の更なる充実を図る必要があると考える。

しかし、令和三年度の本会の活動は、令和元年度末に発生した新型コロナウイルス感染症の流行と感染症対策により、例年とは異なる対応と決断が求められた。しかし、コロナ禍においても、情報共有と連携を掲げ、教育活動を止めることなく推進していかねばならない。

以上の認識に立ち、北海道中学校長会は、「全日中新教育ビジョン」学校からの教育

改革（令和二年五月策定）の内容を踏まえ、運営方針並びに活動の重点等に基づいて校長としての主体性と指導性をもち、会員相互の連携のもと本道の中学校教育を推進し、道民の負託に応えたい。

### 二 活動の経過

#### 1 各種要請及び要望活動

道教委に対し、以下の活動を行った。

- ・「令和三年度北海道文教施策・予算策定に関する要望書」、「北海道教育の充実をめざす 地域格差のない教育条件の整備に関する提言」（チーム北海道）として」を道教委に郵送（五月七日）

- ・特別支援学級の適切な役割分担に係る在り方について意見交換及び要望

- ・公立校等学校入学者選抜改善について意見交換及び要望

- ・公立学校教員採用について意見交換及び要望

- ・学校における新型コロナウイルス感染症対策について意見交換及び要望



- ・ICTを活用した「学びの保障」について意見交換及び要望
- ・いじめ等の対応について意見交換及び要望

## 2 道教委との意見交換会・各課懇談会

今年度も北海道小学校長会・中学校長会・公立学校教頭会と合同で、北海道教育委員会に対し、次年度の文教施策・予算策定に関する要望活動を行った。「要望書」の取組については先に報告したとおりであるが、道教委からの回答については「道小情報・道中だより号外」にて全会員に報告した。この回答をもとに七月二十六日、道教委からは倉本教育長を始め、教育部長、教育指導監、道立教育研究所長、総務政策局長、ICT教育推進局長、指導担当局長、関係課長、道小・道中・道公教からは六九人が出席し、意見交換会（今年度から文教施策懇談会が意見交換会に名称変更された）がオンラインで開催された。続いて、道教委からは関係課長、道小・道中・道公教からは六九人が出席し、第一～三分科会に分かれて各課懇談会が開催された。これらについても「道小情報・道中だより号外」で全会員に報告する。各教育局に対する要望活動の際に資料として活用していただきたい。

## 3 第六三回北海道中学校長会研究大会

### 宗谷・稚内大会

九月二十四日、全道から一五〇人の会員が参加し、第六三回北海道中学校長会研究大会宗谷・稚内大会がオンライン形式で開催され

た。四か年継続研究の二年目となる本年は、研究主題「新たな時代を切り拓き、より良い社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」のもと、「新学習指導要領全面实施、日本のでっぺん稚内から 子供に確かで豊かな資質・能力を育てる学校経営」を大会スローガンとして、熱心な研究協議がなされる大会となった。

提案・提言発表者は、以下の校長である。

○第七二回全日本中学校長会研究協議会静岡大会 第一分科会提案概要

中標津町立計根別学園 村上玄一郎校長

網走市立第二中学校 垣内 孝仁校長

○第一分科会「『社会に開かれた教育課程』の実現

旭川市立広陵中学校 千葉 雅樹校長

○第二分科会「新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実」

標茶町立虹別中学校 蠣崎 浩一校長

○第三分科会「豊かな心と健やかな体を育む教育の充実」

鹿部町立鹿部中学校 後藤 正弘校長

○第四分科会「多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成と働き方改革の推進」

札幌市立北野台中学校 安田 仁昭校長

○第五分科会「家庭・地域や校種間における連携・協働の推進」

滝川市立明苑中学校 鎌田 俊博校長

これまで約二年間、宗谷校長会佐藤佳弘実行委員長を中心に、誠心誠意準備をしてくださったことに心から感謝申し上げます。

今大会が、校長の今後の学校経営に大きく資するものとなり、次回大会への道筋をつける大きな成果を得たものと確信する。

## 4 地区別教育経営研究会・法制研修会

毎年、校長会会員の職能向上を目的に各地区単位で開催されている地区別教育経営研究会・法制研修会は、七月二十八日の宗谷地区を皮切りに、十一月十八日の札幌市地区（中学校）まで、各地区で順次開催される予定であった。しかし、緊急事態宣言が発出されるなどにより、やむなくオンライン開催・書面開催に変更した地区があった。「通常開催」が四地区、「オンライン開催」が九地区、「書面開催」が六地区であった。

開催した研修会では道小・道中より役員・幹事を派遣し、各地区からの質問に回答するほか、教育局や市町村教育委員会から講師を招いての研修を行っている。会員の実践発表や校種別、課題別分科会での研究協議を取り入れるなど、年々内容の充実が図られている。また、多くの地区が小・中学校合同で開催されるため、小中交流や情報交換の場としても大きな役割を果たしている。今後より一層充実した会になるよう各地区校長会の取組をお願いしたい。

## 5 道中組織と運営

「オール北海道」で運営を進める道中の新組織体制も五年目を迎えた。札幌を除く五ブロックの副会長の互選により会長を選出し、千歳市立千歳中学校の三浦利章校長が総会にて承認された。五役には、事務局長は札幌、事務局次長は札幌・胆振、会計理事は

小樽から選出され、「チーム北海道」として事務局の活動を推進している。また、経営・研修・対策・情報の四部の活動は、石狩、札幌、空知、胆振、旭川の各地区が担当した。また、令和四年度に開催する全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会に向けて、札幌市中学校長会との連携を密に準備を進めている。

### 三 当面する学校経営上の諸課題への対応

#### 1 令和四年度文部科学省概算要求について

文部科学省は、令和四年度予算の概算要求案をまとめた。文教関係予算は五兆九、一六一億円、義務教育費国庫負担金に一兆五、一四七億円を要求し、小学校高学年における教科担任制や小学校の三五人学級を推進する。

今後の予算決定まで政府内の協議、国会での審議などの推移を見守るとともに、全日中との一層の連携を図り、道教委への予算要望・文教施策反映に向けて取り組んでいく。

#### 2 学校における働き方改革について

平成三十一年一月二十五日に中教審から「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」の答申があり、学校の働き方改革の目的は、教師のこれまでの働き方を見直し、自らの授業を磨くとともに日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対しての効果的な教育

活動を行うことができるようになることとした。

文科省の作成した勤務時間上限に関するガイドライン（月四五時間以内、年間三六〇時間以内）の実効性を高めることが重要であり、文科省はその根拠を法令上規定するなどの工夫を図り、学校現場で遵守されるよう取り組むべきとした。

道教委では、第一期取組の成果と課題を踏まえ、新たな取組の設定や更なる改善を図り、より実効性を高めるため、「北海道アクション・プラン」（第二期）を令和三年三月に改定した。期間は令和五年度までの三年間とし、以下の六つの取組を重点的に実施するとした。

- ・ 在校等時間の客観的な計測・記録と公表
- ・ メンタルヘルス対策の推進等
- ・ 働き方改革手引「Road」の積極的な活用
- ・ ICTを積極的に活用した業務等の推進
- ・ 部活動休養日等の完全実施
- ・ 地域との協働の推進による学校を応援・支援する体制づくりの推進

また、道教委は一年単位の変形労働時間制の活用時の課題として、長期休業期間等において休日を連続して設定する場合に限り活用できることや、活用する職員の時間外在校等時間が、国が定める上限の範囲内となることなど、複雑な条件があるため制度の詳細について正しい理解を図っていく必要があることを挙げている。引き続き、これまで作成した説明動画やリーフレットなどを活用し、正しい制度の理解促進、周知徹底を図ると

もに、新たな取組として、教頭への支援、スクールロイヤーの配置などを加え、学校における働き方改革に全力で取り組んでいくとした。

今後、教職員の勤務の実態を踏まえながら、実効性のある学校における働き方改革の推進のために、引き続き道教委との協議を進めていきたい。

#### 3 国家公務員法等の一部を改正する法律の概要

本年六月に国家公務員法の一部が改正され、令和五年四月から国家公務員の定年が段階的に六五歳に引き上げられることとなった。今後、道教委では、地方公務員法が改正されたことなどを踏まえ、定年延長に向けた制度設計について検討を行っていく。また、管理職の任用に当たっては、法改正によりいわゆる役職定年制が導入されたことに留意し、現行の役付再任用制度との均衡も考慮しながら検討を進めるとともに、雇用と年金の接続を図るため、定年の段階的な引上げ期間中における経過措置として、現行の再任用制度の存置を検討することである。

今後、意欲をもって職務に専念できるように、道教委との協議を進めていきたい。

# 学校経営に法的根拠を据えた 教育活動の充実に努める

## 経営部

### 一 活動の方針

本会の運営方針・活動の重点を受け、学校経営に法的根拠を据え、教育活動の充実に努める。

- 1 教育制度、関係諸法規の情報収集と情報の提供、資料化に努める。
- 2 学校経営上の諸問題や管理運営に関する法制研究を行い、その解決に資する。
- 3 諸会議等を通じ、会員相互・地区との情報交換を図り、組織の連携・充実・発展に努める。

### 二 業務内容と進捗状況

#### 1 諸会議の開催

##### (1) 経営部研修会

###### ① 第一回経営部研修会（書面）

- ・ 四月二十三日（金） 方針、業務推進計画の検討

###### ② 第二回経営部研修会（Web）

- ・ 二月十日（木） 年度反省、次年度への課題・展望とまとめ
- 道小・道中合同学習会

- ・ 七月十六日（金） 質問・要望に対

#### する学習会 道小と連携

- 2 法制研修会・地区別教育経営研究会の開催（今年度道中担当）

コロナウイルスの影響により一部の地区で日程変更はあったが、七月二十七日の宗谷地区を皮切りに、全一九地区で計画通り実施

- 3 学校経営の資料の編集（今年度道中担当）

- 4 法制研究集録第五二集の編集発行（今年度道小担当） 二月にHPに掲載

### 三 今年度の反省と次年度への展望

- 1 法制研修会・地区別教育経営研究会

・ コロナウイルス感染状況の悪化により、多くの地区で開催方法がリモートもしくは書面に変更となった。昨年は、四地区のみ開催だったこともあり、全ての地区において方法が変わっても中止することなく、開催する方向で準備をいただいた。その甲斐あって、どの地区も限られた時間の中で充実した研修を行い、成果を残した。

- ・ 会同開催（四地区：札幌小、札幌中、小樽、旭川中）

- ・ リモート開催（九地区：石狩、後志、旭川小、留萌、空知、胆振、釧路・釧路市、根室、オホーツク）

- ・ 書面開催（六地区：上川、宗谷、檜山（一部リモート）、渡島・函館、日高、十勝・帯広）

- ・ 地区から上げられた質問に、道小道中の

経営に関わるものや、運営費などの会費に関わる内容があった。これらの内容については、幹事ではなく役員派遣より説明を行うことで、派遣の役割分担が明確になり、地区参加者へ十分な回答となった。

・ 書面開催となった地区への回答は、派遣幹事が直接電話による口答で、地区の担当者に説明を行った。今後も地区からの質問に対する回答は、口答のみの対応とする。

・ 地区からの「質問事項」には、個人的な内容のものがある。地区の実情も十分理解はできるが、各幹事の回答に要する業務を鑑み、事前に地区の経営部内や役員会など、組織内で精査することを願う。

#### 2 学校経営の資料の編集

・ 道中が主たる編集を担当し、七月下旬全道各地区校長会に配布を終えた。

#### 3 法制研究集録第五二集の編集発行

・ 道小が主たる編集を担当し、二月下旬にHP上に掲載した。

本年度の経営部の活動では、皆様の御理解と御協力により多くの成果を収めることができた。特に地区別経営研では、コロナ禍において開催方法は変われども一九地区の全てにおいて実施できたことは、大きな成果といえる。各地区の校長会の御尽力に心より感謝申し上げる。

（江別市・大麻東中学校 三浦 崇史）

# 「新たな時代を切り拓き よりよい社会を創り出していく 日本人を育てる中学校教育」 を目指して

## 研修部

基本主題『新たな時代を切り拓き よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育』のもと、道中研究大会において研究交流を深めるとともに、各地区における研究を基盤とした研究活動の充実に努め、校長としての識見や指導力の向上を図る取組を推進した。

### 一 活動の方針

- 1 第七二回全日本中学校長会研究協議会静岡大会の円滑な運営と研究内容の充実に図るために、開催地区並びに各地区研修担当者との連携を密にする。
- 2 第六三回北海道中学校長会研究大会宗谷・稚内大会の円滑な開催及び研究活動の充実に向け、宗谷校長会との連携を密にする。
- 3 令和三年度の研究を総括し、令和四年度「研究の手引き」の作成作業を行う。
- 4 教育課程に関する情報収集に努め、中学校教育における今日的課題を明らかにし、問題点の解明に寄与する。
- 5 第七三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会の円滑な開催及び研究活動の充実に向け、北海道・札幌市中学校長会との連携を密にする。

## 二 業務の推進

### 1 諸会議の開催

- (1) 第一回研修部研修会 四月二十八日  
・ 研究方針、業務推進計画及び業務推進について  
・ 第六三回道中研宗谷・稚内大会、第七二回全日中研静岡大会について  
・ 令和四年度「研究の手引き」の作成について  
・ 教育課程に関する調査について  
・ 各地区研究推進状況及び令和三年度の研究計画について
  - (2) 道中研合同研修会 七月十五日
  - (3) 道小道中合同研修会 七月十六日
  - (4) 道中研究大会全体研修会  
(宗谷・稚内大会↓小樽大会) 十一月五日
  - (5) 第二回研修部研修会 二月十日 WEB開催  
・ 年度末反省、次年度への課題の検討と展望・まとめについて  
・ 令和四年度以降の研究推進について
- ・ 令和五年度第六四回北海道中学校長会研究大会小樽大会（九月二十二日、二十三日）について  
・ 令和四年度第七三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会について等
- ### 2 研究活動の推進
- (1) 六三回道中研宗谷・稚内大会と第七二回全日中研静岡大会、第七三回全日中研北海道（札幌）大会の円滑な運営と研究内容の充実に図るため、当該実行委員会との連絡・情報交流を積極的

## 三 今年度の反省と次年度に向けて

- 1 全日中研静岡大会については、オンライン開催になったが、早い段階から提案提言者と分科会司会者と連携して、提案原稿や発表資料の校正やリハーサルまで十分にサポートすることができた。
  - 2 道中研宗谷・稚内大会については、急遽オンライン開催になったが、実行委員会と連携して、スムーズな準備と当日のサポートができた。また、令和五年度道中研小樽大会の引継ぎ会には、宗谷・稚内大会実行委員会と小樽大会準備委員会が参加して具体的な引継ぎができた。
  - 3 教育課程に関する調査は、各地区の協力により、全道の全ての中学校から調査データを集めることができた。また、そのデータを集計し分析した結果を予定どおりに「調査研究報告書」として発行することができた。調査結果を、今後の教育課程編成等に生かしていただきたい。
  - 4 学校経営の指針として示された「全日中新教育ビジョン」学校からの教育改革（令和二年五月策定）の各地区での活用をよろしく願いたい。
- （札幌市・北辰中学校 小澤 保範）

## 学校経営の向上と

### 会員の職責に見合う

### 福利厚生・待遇改善の推進

#### 対策部

本年度も対策部では、本会の運営方針と活動の重点を受け、業務を推進してきた。

調査研究については、学校経営の向上に向け、より有効でタイムリーな内容及び資料提供となるよう情報収集を行った。各地区理事並びに地区対策担当者の皆様の御協力により、予定の業務を遂行することができた。

#### 一 活動の方針

本会の「運営方針及び活動の重点」を受け、学校運営上の問題について調査研究を推進し、学校経営の向上に役立てる。また、会員の職責に見合う福利厚生・待遇改善に関する業務を推進する。

- 1 中学校の実態や生徒指導等に関する情報収集、調査研究と資料作成、情報提供に努める。
- 2 会員の福利厚生・待遇改善に関する問題解決・改善に向け、関係機関との連携強化に努める。
- 3 その他、緊急性のある課題や各種調査、情報に関する対応と研究を推進する

## 二 業務内容と推進状況

### 1 諸会議の開催

#### (1) 対策部研修会

① 第一回対策部研修会（書面会議）

・四月二十八日（水）

活動方針、業務推進計画の検討

② 第二回対策部研修会（Web）

・二月十日（木）

業務反省、次年度の展望とまとめ

(2) 小中合同事務局研修会・学習会

(Web)

・七月十六日（金）

道小との連絡・調整、情報交換

#### 2 関係調査・資料作成の業務

(1) 「令和三年度当初の期限付教諭配置に係る実態調査」

① 四月十二日（月） 地区理事宛調査依頼

② 六月一日（火） 第三回事務局研修会で確認

③ 九月十六日（木） 第三回事務局研修会で提案

(2) 「新たな調査報告書の発行」に関する検討・協議

① 十一月八日（月） 調査報告書に関する「意向調査」の実施

② 十二月二十四日（金） 各地区対策担当者等に令和四年度調査案を送付

③ 二月十日（木） 令和四年度「調査報告書」の作成について決定

④ 全日中諸調査

① 教育研究部調査

・教育課程の編成・実施等に関する調査

・新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた学校教育活動に関する調査

② 生徒指導部

・健全育成の推進・充実のための研究等に関する調査

・特別支援教育推進上の課題への対応に関する調査

・部活動の在り方の検討に関する調査

・防災教育・安全教育推進と充実のための研究に関する調査

※ 以上、全道一八校に依頼

③ 給与対策部調査

・令和三年度 各都道府県・政令指定都市人事委員会の勧告概要

・令和三年度 各都道府県・政令指定都市校長会の給与等に関する令和四年度予算要望の概要

#### 三 活動の反省と次年度に向けて

業務推進にあたっては、部内の連携協力体制を維持し、当初の目的を達成することができた。関係各位の御理解と御協力に、改めて感謝を申し上げる次第である。

次年度は調査報告書の作成にあたり、全体統括、アンケート集計、地区レポート集約等役割を分担しながら連携を図る。

(大樹町・大樹中 長江 教貴)

## 情報交流の充実を目指して

### 情報部

情報部は、今年度も全国・全道の教育情勢を各地区に提供するとともに、各地区からの情報交流の充実を目指して業務推進にあたった。特に、本会の活動状況や教育関連情報については、会報「道中だより」、会誌「全道中」、そして道中ホームページによって随時お知らせしてきた。

情報部が提供する教育情報が、各地区校長会の取組に一層の充実が図られていること、また、会員諸氏の職能向上に貢献しているものと確信する。さらに、何かと御多用のところ原稿執筆に御協力いただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

#### 一 活動方針

本会の運営方針と活動の重点を受けて、広報活動のより効果的な業務推進を図り、会員意識の高揚並びに組織活動の強化に努める。

- 1 広く、本会活動の状況や関係機関の情報、各種資料等を提供する。
- 2 各地区の活動や会員の研究成果、論説等の交流を図るとともに、各界から教育

に寄せられる意見も掲載し、会員の職能向上に努める。

- 3 教育関係機関・団体との情報・資料の交流並びに相互の連携・協調を図り、教育世論の喚起に努める。

#### 二 業務内容と推進状況

##### 1 諸会議の開催

- (1) 情報部研修会（臨時一回）

第一回 令和三年四月十九日

二十三日（書面開催）

本年度の活動方針、業務推進計

画の検討・協議

第二回 令和四年二月十日（木）

本年度の業務報告 他

- (2) 編集会議（随時）

##### 2 機関誌等の編集・発行

- (1) 「道中総会・研修会要項」編集、発行

令和三年度「第九四回総会・研修会要項」の発行 四月二十八日

令和四年度「第九五回総会・研修会要項」の編集（令和四年四月発行）

- (2) 会報「道中だより」の発行

第三七四号 六月十日発行

第三七五号 七月八日発行

第三七六号 十一月四日発行

第三七七号 一月二十日発行

- (3) 号外「道小情報・道中だより」の発行（今年度は、道小担当）

十月十五日 北海道文教政策・予算策定に関する要望に対する回答

十一月二十五日 道教委との意見交換会・各課懇談会

- (4) 会誌「全道中」第九一号の編集・発行

行

① 潮流

② 論考

③ 特集

④ 今年の道中 各部門・各地区の活動

⑤ 北海道風土記

⑥ 文芸

⑦ 資料等

- 3 北海道中学校長会公式ホームページの更新及び内容の充実

- 4 全日中機関誌「中学校」の編集協力・原稿依頼

#### 三 活動の反省と次年度に向けて

全道各地区の御協力をいただいて業務推進にあたる事ができた。関係各位の御理解御協力に深く感謝申し上げます。

次年度もタイムリーな内容となるよう刊行物の発行、及び、ホームページの掲載に力を尽くしたい。

（室蘭市・室蘭西中学校 渋川 賢一）

石 狩



花の拠点 はなふる  
(恵庭市)

石狩地区は管内七市町村の小中学校長九八人(小六一、中二六、義務教育学校一)で組織されている。子供たちに変革の時代を生きたる確かな学びの力を育てるために、創意と調和のある教育課程の編成・実施や家庭・地域と一体になった学校づくりに邁進している。石狩の風土に根ざした伝統を踏まえつつ、新たな教育課題に正対し、研修活動の充実を図り、校長の資質・職能の向上に努めている。

一 活動方針

- 1 信頼される学校経営のもと、管内教育の安定と充実・発展に努める。
- 2 職能向上をめざす研修活動の推進と教職員の資質向上に努める。
- 3 管内における教育諸課題を把握しその解決に努める。
- 4 教育諸条件の整備・充実と教職員の処遇改善や福利厚生等の増進に努める。
- 5 組織の強化と実態に即した会務の推進

に努める。

二 各部の活動

- 1 研修部
  - ① 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により一年先送りされた研究協議題「社会の信頼・負託にこたえる確かな学校運営の推進」について研究を推進。
  - ② 管内小中学校長会研修会の開催
  - ③ 春季学校経営研究会(四月)
  - ④ 秋季学校経営研究会(十一月)
  - 『子供と職員を守る安全教育の推進と服務管理の徹底』
- 2 全国・全道校長会研究大会への参加
- 3 ブロック別研修会(九月)
- 4 道小千歳大会主管のため開催せず
- 2 経営部
  - (1) 石狩地区教育経営研究会(十月)
  - (2) 今日的教育情勢・課題等の研究協議
  - (3) 道小・道中経営部との連携と業務推進
  - (4) 道小・道中対策部との連携と業務推進

三 諸会議

- 1 定期総会(四月) (↓規模縮小)
- 2 役員研修会(月一回) 当面する課題対応
- 3 幹事研修会(年九回) 市町村幹事、関係機関による協議・交流(↓規模縮小)
- 4 市町村代表者等研修会(七月)

四 地区役員

- |      |                 |
|------|-----------------|
| 会長   | 鹿野 秀一(江別・江別第一小) |
| 副会長  | 小松 義幸(江別・江別第二小) |
| 副会長  | 多田 貴典(千歳・勇舞中)   |
| 事務局長 | 佐藤 直己(江別・江別第一小) |
| 次長   | 津谷 昌樹(恵庭・恵庭中)   |
| 次長   | 今村 敏之(千歳・千歳小)   |
| 会長   | 千葉 則理(北広島・西の里中) |
| 監査   | 野尻 一裕(千歳・北陽小)   |
| 監査   | 吉田 篤弘(石狩・花川南小)  |
| 監査   | 金森 直人(北広島・広葉中)  |

五 道中役員

- |    |                |
|----|----------------|
| 会長 | 三浦 利章(千歳・千歳中)  |
| 理事 | 三浦 崇史(江別・大麻東中) |
| 幹事 | 加藤 秀典(石狩・花川北中) |
| 幹事 | 畠山 学(江別・江別第三中) |
| 幹事 | 小森 享(北広島・西部中)  |
- (北広島市・西の里中 千葉 則理)

# 後 志



ニセコ連峰  
チセヌブリから

後志小中学校校長会は、一九町村より小学校長三九人、中学校長二四人の、計六三人で構成されている。

齊藤信之会長のリーダーシップのもと、会員一人一人が明確な経営ビジョンをもつべく鋭い時代感覚を磨きながら、創意ある取組と組織の活性化を図っている。

保護者・地域住民の負託に応えるとともに、後志教育局、町村教育委員会協議会との連携を強めながら、「一人一人の校長の力を結集する」を基本に、後志教育の推進と充実のために諸課題に取り組んでいる。

## 一 運営方針

- 1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の充実に努める。
- 2 「生きる力」を育む「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価・改善に努める。
- 3 児童生徒理解を深め、時代の変化に即した生徒指導や、個々の教育的ニーズに応える特別支援教育の推進に努める。

4 会員の共同研究を推進し、研究成果の交流を図るとともに、校長自らの研さんに努める。

5 教職員一同の一層の資質・能力の総合的な向上に努める。

6 教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。

7 教職員の処遇の改善に努める。

## 二 活動状況

### 1 経営部

- (1) 後志地区教育経営研究会の開催
- (2) 学校経営上の諸課題や管理運営上に関する法制資料の作成と研修会の実施

(3) 各町村校長会の教育法令・制度に関する課題の集約と説明

(4) 道小経営部・道中経営部との連携・協力

### 2 研修部

- (1) 後志小中学校校長会研究会の開催
- (2) ブロック研究会の開催
- (3) 「研究の手引き」「研究紀要」の発行

(4) 全国、全道研究会への積極的参加

(5) 提言プロジェクトチームの編成と活動の推進

(6) 「学力向上の後志学校教育プラン」

### 3 対策部

- (1) 各種調査の実施と集約・還流

(2) 教育法規や学校経営に関する諸課題に関する研修会の開催

### 4 情報部

- (1) 「会報後志」の発行
- (2) 「情報部だより」の発行

(3) 道小・道中機関誌への寄稿

## 三 年間活動計画《諸会議》

- 1 定期総会 (四月)
- 2 理事研修会 (年六回)
- 3 事務局研修会 (年八回)
- 4 監査委員会 (年二回)
- 5 小樽・後志役員合同研修会 (年一回)
- 6 後志教育局との意見交換会 (年二回)
- 7 教育長部会・校長会役員合同研修会

## 四 役員

- |        |              |
|--------|--------------|
| 会 長    | 齊藤 信之(岩内東小)  |
| 副 会 長  | 三浦 卓也(古平小)   |
| 副 会 長  | 藪 智樹(余市東中)   |
| 副 会 長  | 前田 敦子(寿都小)   |
| 副 会 長  | 渡邊 均(俱知安小)   |
| 事務局 長  | 中田恭太郎(京極小)   |
| 事務局 次長 | 五十嵐邦春(寿都中)   |
| 事務局 次長 | 丸岡 哲也(真狩小)   |
| 会 計    | 柴田 真琴(黒松内中)  |
| 監 査    | 木村 和義(俱知安中)  |
| 監 査    | 本田 明美(岩内第二中) |

(余市町・東中 藪 智樹)



# 小樽市



冬の小樽運河

小樽市中学校長会は、市の方針「知・徳・体のバランスのとれた人材の育成」に基づき、小樽の未来を託すことのできる人材育成を目指す教育推進のため、真摯に研究と実践を積み重ね、着実に成果をあげてきている。これまでの成果を踏まえ、更なる小樽の教育の充実・発展のため、私たち校長は、生徒や保護者・地域の人々の願いを十分尊重しながら、リーダーシップを発揮し、信頼され活力ある学校づくりに努めている。

## 一 活動方針

1 市の教育ビジョンを基盤とした着実な取組

① 選択と集中による実践・検証

2 三つの部の充実

① 研究内容の充実 ② 学び合いの深化

3 自主自立の確立

① 校長としての使命を自覚した自立した学校経営

## 二 活動の重点

1 小中一貫教育の充実

① 小樽市における小中一貫教育の五つの視点の確実な実施

② 各校の校務分掌への位置付けと定期的・計画的な連携・協働の実施

2 学校組織の機能化と人材育成

① 教務主任の職務の明確化と職務に邁進できる環境整備

② 次代を担う人材育成の計画的・組織的育成

3 業務改善の定着

① 情報交流による具体的な取組の価値付けや新たな働き方スタイル構築

② 校務運営システムの機能化など、ICT等を活用した業務効率化の推進

## 三 各部の取組

1 研究部

① 小樽市中学校教育の充実・発展のため、校長としての職能の向上を図る。

② 重点目標三点において、特に「学校組織の機能化と人材育成」「業務改善の定着」を中心に進める。

2 組織・法制部

① 小樽市の中学校教育における質の向上を目指し相互に研さんする。

② 働き方改革、異校種間交流を重点に研修・情報交流を進め、学校改善を推進する。

## 四 活動の状況

小樽市では、毎年、中学校長会としての共通目標を立て、各学校で具体的な実践を進めながら、昨年度示された学校教育と社会教育を一本化した包括的な計画である「小樽市教育推進計画」をもとに、基本理念である「主体的に学び、小樽の未来を創る 心豊かな人づくり」に向けて力を注いでいるところである。

重点目標である「学校組織の機能化と人材育成」のために、校長が意図する円滑な学校運営に向け、「校務規定」を定め、分掌部会

はもとより、企画委員会や三役会などを機能的に動かし、迅速な意思決定に向け取り組んでいる。校務規定の設定と運用はもとより、その中で位置付けられている主任の責任の下、各部組織の運営につなげるなどの実践を行っている。

「小中一貫教育の充実」に向けて、管理職ではなく、本取組を推進させる担当者を配置し、授業交流はもとより、教科部会、分掌部会等を充実させ、推進を一気に進めるなどの成果が見られる地区も複数ある。

## 五 年間活動(行事)

総会

定例校長研修会

① 一回  
② 二回

(うちオンライン会議七回)

四役研修会

① 八回  
② 四回

(うちオンライン会議八回)

四役部長研修会

① 四回  
② 六回

(うちオンライン会議四回)

小樽市校長会役員研修会

① 一回  
② 六回

小樽後志代表校長会議

① 一回  
② 一回

道中第一ブロック連絡協議会

① 一回  
② 一回

(紙面交流による開催)

中・高校長連絡会議・協議会

① 一回  
② 一回

経営・法制研究会等

① 一回  
② 三回

## 六 役員一覧

会長 宮澤 知 (菁園中学校)

副会長 岡本 清豪 (北陵中学校)

副会長 村上 俊一 (向陽中学校)

事務局長 伊藤 仁弥 (望洋台中学校)

研究部長 山崎 徹也 (銭函中学校)

組織法制部長 加藤 俊明 (潮見台中学校)

(小樽市・望洋台中 伊藤 仁弥)

# 上 川



紅葉が始まった旭岳

上川地区は、今年度新たに一〇人の新会員と旭川市及び他管内から異動の五人を迎え、二二市町村の総勢九一人で活動している。第四七回総会研修会は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、代議員が会同し、他の会員はオンライン配信を視聴する形で開催した。紺野元樹会長の下、会員一人一人の「研さん」と「結束」、組織力を高め、「新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育てる学校経営」の実現に向け邁進している。

## 一 活動方針

上川管内校長会は、矢継ぎ早に提案・決定・施行される教育改革の動向を注視しながら情報を迅速に把握するとともに、情報共有と組織的な対応に努めていく。

学校の新しい生活様式を踏まえ、「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善と組織的・計画的な推進、学校の自主性・自立性の確立、GIGAスクール構想の推進、教職員の資質向上・服務規律の保持、働き方改革、地域・保護者と連携した安全管理、いじめ根絶、生命を尊重する教育の徹底など「愛情と信頼に基づく学校経営」の実現

を図るものとする。

そして「ふるさとを愛し、他者と協働しながら未来を切り拓く力を育む学校の在り方」を究明し、上川教育の一層の充実発展に寄与することを旨とする。

1 「愛情と信頼」に基づき、創意に富む信頼される学校経営の充実に努める。

2 校長自ら「研さん」に励むとともに、教職員の一層の資質・能力の向上に努める。

3 組織活動の充実と確かな情報共有を図り、会員の「結束」を強化するとともに、教職員の処遇改善に努める。

4 上川教育局・地教委及び道小・道中、教育関係機関・団体と連携し、教育課題の解決及び北海道教育をリードしていくことに努める。

## 二 各部の活動(主な業務)

### 1 経営部

(1) 組織強化に関すること

(2) 法制研究会・教育経営研究会の開催

(3) 学校経営に関する法制上の課題把握と関係法規の研究・具体的問題の収集処理に関すること

(4) 管内校長会役員選出に関すること

### 2 研修部

(1) 研修組織及び運営に関すること

(2) 道小・道中研究大会及び全連小・全日中研究協議会に関すること

(3) 会員の研修に関すること

(4) 研修資料の収集提供に関すること

### 3 広報部

(1) 会報の編集と発行に関すること

(2) 各種調査の企画・実施に関すること

(3) 統廃合学校に関すること

### 4 事務局

(1) 学校経営に関する資料の整備と交流

(2) 地区ブロック研修会に関すること

(3) 後継者育成のための諸施策の立案と実施に関すること

(4) 教育局、地教委連、市町村校長会など関係諸団体との連携に関すること

(5) 各部との連携に関すること

## 三 役員一覧

会長	紺野 元樹 (比布 中央小)
副会長	田中 明人 (士別中)
副会長	鈴木 伸行 (上富良野小)
副会長	大場 八仁 (鷹栖中)
副会長	鈴木 豊 (名寄小)
運営委員長	竹森 茂雄 (当麻中)
運営委員	北島 信 (鷹栖 北野小)
事務局長	南部 和紀 (東川小)
事務局次長	褰田佳奈恵 (剣淵中)
会計理事	千葉 良彦 (富良野東中)
庶務理事	豊田 央 (美深小)
経営部長	布施 司 (当麻小)
研修部長	金光 保 (中富良野小)
広報部長	富居 充孝 (士別南中)

(剣淵中 褰田佳奈恵)

# 旭川市



旭橋  
「旭川八景」

旭川市中学校長会は、本年度、新採用三人を含む六人の新会員を迎えた。会員二十七人が林 欽一会長を中心に、「知恵を結集し、さらに、「前へ」を基本姿勢とし、旭川市教育大綱の基本方針「主体的に学び力強く未来を拓く人づくり」の具現化を図るために、組織の一層の活性化を進めている。

会員相互の研さんと連携のもと、新しい時代に相応しい学校教育の創造に向けて日々邁進するとともに、校長としての主体性とリーダーシップを発揮して、基本理念である「信頼される中学校教育の創造」を目指して会務を推進している。

## 一 活動の方針（要点）

- 1 旭川市民の願いや期待に応え、信頼される中学校教育を目指し、会務の推進に努める。
- 2 中学校長としての使命を自覚し、時代の進展に対応する中学校教育の在り方を見極めるとともに、その充実・発展に努める。
- 3 教育の動向を適切に見極め、具体策を

もつて、主体的にその取組を進める。

- 4 旭川市教育委員会、関係機関・各種団体等と緊密に連携し、教育諸課題への適切な対応に努める。
- 5 校長としての資質・能力の向上を図る積極的な研修に努める。
- 6 会員相互の意思疎通を図り、活動の活性化、効率化に努める。

## 二 活動の重点（要点）

- 1 創意と活力ある学校づくりの推進
- 2 信頼される開かれた学校づくりの推進
- 3 生徒指導上の諸課題の解決
- 4 校長の資質・能力の向上
- 5 関係機関・団体との連携と組織強化

## 三 各部の主な活動

- 1 研究部  
(1) 六月研修会の開催・運営  
(2) 上川管内小中学校長研究大会の運営  
(3) 全道中研究大会宗谷・稚内大会、全道中研究協議会静岡大会の参加  
(4) 二月研修会の開催・運営  
(5) 研究紀要の発刊
- 2 厚生部  
(1) 福利厚生関係業務の推進  
(2) 親睦関係業務の推進  
(3) 叙位・叙勲関係業務の推進
- 3 広報部  
(1) 会報「校長会だより」の編集・発行  
(2) 会誌「第五二号」の編集・発行  
(3) 道中の広報活動への協力

## 4 生徒指導部

- (1) 小学校・高等学校及び関係機関との交流の充実
- (2) 定例校長会議における「生徒指導情報交流」「実践交流」の充実
- (3) 地区ブロックにおける生徒指導体制及び小学校との連携や交流の充実
- (4) 各関係機関との緊密な連携と協力体制の構築

## 5 学校教育対策部

- (1) 旭川市小・中学校長会法制研究会の開催
- (2) 学校運営及び法制上の諸課題への対応（教育課程の管理、服務規律の向上、管内人事異動要綱、時間外勤務の縮減、学校の危機管理等）
- (3) 道中地区対策担当者業務への対応

## 四 役員一覧

- |       |             |
|-------|-------------|
| 会長    | 林 欽一（神居中）   |
| 副会長   | 山川 俊巳（嵐山中）  |
| 副会長   | 佐藤 哲雄（愛宕中）  |
| 監査委員  | 岡崎 良昭（神居東中） |
| 監査委員  | 神林 宏行（西神楽中） |
| 事務局次長 | 工藤 亘（明星中）   |
| 事務局次長 | 福澤 秀（永山南中）  |
| 事務局次長 | 千葉 雅樹（広陵中）  |
| 事務局次長 | 森田 聖吾（北星中）  |
| 会計委員  | 岩瀬 一弘（東明中）  |

（旭川市・明星中 工藤 亘）

# 宗 谷



間宮林蔵の立像  
(稚内市宗谷岬)

宗谷校長会は、十市町村、五二校（うち単置中学校一七校、小中併置校五校）の校長で構成している。結成以来、「宗谷の風土に根ざした豊かな自然に育む子供」をテーマに掲げ、会員相互の研さんと職能向上に努めながら管内教育の充実・発展を図っている。

## 一 運営方針

- 1 校長としての使命を自覚し、自らの職能向上に努めると同時に指導性を發揮し、教職員の研修活動の活性化を図り、保護者や地域の期待に応える学校経営の充実に努める。
  - 2 会員相互の理解を深め、活動の活性化を図り、宗谷教育の充実・発展に努める。
  - 3 関係機関・団体との連携を図り、教育諸課題の解決にあたるとともに、教育条件整備に努める。
- ## 二 活動の重点
- 1 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、愛情と信頼に基づく活力ある学校経営を推進する。

## 三 各部の活動

- 1 研究部
- 2 研修活動を充実し、職能向上と、教職員の資質・能力の総合的な向上に努める。
- 3 関係機関・団体と連携し、教育諸課題の解決及び教育諸条件の改善・整備・充実に努める。
- 4 校長会の組織を強化し、活動の活性化を図る。

### 1 研究部

(1) 宗谷校長会の活動方針に基づき、事業計画を立て、その遂行にあたるとともに、地域社会の期待と要請に応え、教育課程についての研究と当面する教育課題に向き合う学校経営を究明する。

- (2) 『ふるさとを愛し、志を持って、新しい社会を切り拓く力を育む学校教育』を研究主題とする三か年継続研究の三年目の再取組を行う。「学校経営」「教育課程」「資質向上」に関わる信頼される学校づくりの共通課題を明らかにし、実践的研究の充実に努める。
- (3) 関係機関・団体との連携を図り、宗谷における教育研究の一層の発展・充実に努める。
- (4) 道小、道中、全連小、全日中の研究大会などに積極的に参加し、宗谷校長会として組織的な提言を行う。
- (5) 『学力向上プラン』（我が校・小中連携・ロードマップ）を宗谷の抱える学力課題を解決していく手だてとし、

## 四 役員一覧

- 2 その実効性・有用性を評価していく。経営・情報部
- 2 学校経営上の諸問題の解明に努める。
- (1) 学校経営の管理運営に関する調査及び研究に努める。
- (2) 意欲を高め、やりがいのある人間関係づくりのための学びを高める。
- (3) 会報と会誌を編集・発行するとともに、各種原稿依頼に迅速に対応する。

### 3 対策部

(1) 関係機関・団体との連携を一層強め、会員の福利厚生の充実と向上を図る。

(2) 道小・道中からの諸調査を迅速且つ正確に行うとともに、本会独自の調査活動を必要に応じて行う。

会長	杉本 浩一（潮見が丘小）
副会長	佐藤 佳弘（兜沼小中）
	桜井 和則（浜頓別小）
	藤田 淳（拓心中）
	畠山 博次（豊富中）
	吉崎 健一（潮見が丘中）
	今野 亘（稚内中央小）
事務局次長	小林 清一（中頓別中）
	三野宮誠一（豊富小）
	塩原 悟（幌延小）
	林 智宏（枝幸中）
	坂見 明信（稚内東中）
	黒木 敏郎（天北小中）
会 計	藤原 雅宏（稚内中）

（豊富町・豊富中 畠山 博次）

# 留 萌



サケの遡上

今年度の留萌管内小中学校長会は、コロナ禍ではあったが例年どおりの形で総会研修会を実施し、新体制がスタートした。

総会で承認された長尾会長は「会員の皆様の御理解をいただき、『開かれた校長会』を目指し鋭意努力したい」と述べ、会員への協力も求めた。また、「ウイズコロナの時代、私たちの強みである『お互いの顔が見え、声が届く校長会』を最大限に発揮し、予測困難な状況でも、ひるまず、揺らぐことなく教育課題に向き合い、この局面を乗り越えていくことが肝要である。教育の大きな変節期の今、子供たちが活躍する未来を、求められる教育を、広い視野と高い視座から俯瞰する必要がある、未来社会を拓く子供たちを確かに育て上げなければならぬ」と呼びかけた。

## 一 運営方針

- 1 校長の使命と責任を自覚し、自らの識見を高める研修の充実と情報共有を図る。
- 2 会員相互の連携を密にして信頼関係を深め、組織の強化と活動の充実を図る。
- 3 物事や事象の変化に対し、柔軟に対応

## 二 活動の重点

- できる組織を確立し、ベストを目指す。
- 4 教育関係機関・団体及び地域社会との連携を強化し、諸問題の解決を図る。
  - 1 教育改革を具現化する学校経営に努める。
  - (1) 創意ある教育課程の編成・実施と評価、改善
  - (2) 地域等に開かれた学校経営の推進
  - (3) いじめや不登校等の生徒指導上の諸問題への迅速な対応
  - (4) 児童生徒の安全確保の徹底と危機管理体制の確立と充実
  - (5) 法令遵守の徹底と服務規律の保持
  - 2 研修活動の充実と還流に努める。
  - (1) 管内校長会教育研究協議会の開催
  - (2) 留萌地区教育経営研究会の開催
  - (3) 道小・道中大会、全連小・全日中大会への参加
  - (4) 新任校長研修会の開催
  - (5) 研究集録や会報などによる還流
  - 3 組織の強化と活動の効率化に努める。
  - (1) 理事研修会の充実と市町村校長会との連携
  - (2) 各部及び各市町村校長会との連携
  - (3) 教育の諸課題に対する的確な対応
  - (4) 全道(国)校長会、管内教育関係機関、団体との連携強化
  - 4 教職員の待遇改善に努める。
  - (1) 管理職手当、給与体系の改善

## 三 各部の活動計画

### 1 研究部

- (1) 留萌管内小中学校長会教育研究協議会の開催
- (2) 令和三年度道小提言プロジェクト委員会の充実と研究推進
- (3) 研究集録の発行
- (4) 留萌管内教育研究団体連絡協議会の業務推進

### 2 組織部

- (1) 留萌地区教育経営研究会の開催
- (2) 教育条件整備や福利厚生の実態把握
- (3) 組織・法制に関する研修の充実等

### 3 広報部

- (1) 会報の発行・市町村会報の交流
- (2) 道小・道中情報部との連携

## 四 役員組織

- |        |            |
|--------|------------|
| 会 長    | 長尾 真(留萌中)  |
| 副 会 長  | 藤田 智哉(増毛中) |
| 事務局 長  | 石田 正樹(留萌小) |
| 事務局 次長 | 早坂 康(東光小)  |
| 会計委員   | 村井 亨(鬼鹿小)  |
| 監査委員長  | 明田 豊(苦前中)  |
| 監査委員   | 山田 閑子(天塩小) |
| 研究部長   | 小柳 豊(小平小)  |
| 組織部長   | 堀井 理(羽幌小)  |
| 広報部長   | 本間 博樹(遠別小) |

(増毛町・増毛中 藤田 智哉)

# 檜 山



なべつる岩  
(奥尻町)

檜山校長会は、檜山管内七町の小学校二〇校、中学校一〇校の校長で構成している。本会は、昭和二十三年の創立以来、管内教育の充実・発展のために研究と実践を積み重ねるとともに、教育条件の整備等に努めるなど、組織の総力を挙げて取組を推進している。

## 一 今年度の運営方針

教育改革は未来を見据えて急速に展開し、学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められている。また、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実等、自立した人間として、多様な社会の中で他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力の育成が求められている。

校長は、いじめ・不登校等の生徒指導、教職員の資質・能力の向上、働き方改革、子供と向き合う時間の確保など緊急且つ重要な課題に向けてリーダーシップを発揮し、対応していく必要がある。

檜山校長会は、こうした教育課題解決のため

めに「ふるさと檜山に誇りを持ち、自己実現に向けて未来を切り拓く児童生徒」を育む学校経営の在り方を究明し、保護者や住民の負託と信頼に応えるため学校組織の活性化と活力ある学校づくりに全力で取り組んでいく。

## 二 今年度の活動の重点

- 1 組織マネジメントを活かした活力ある学校経営の推進(重点)
- 2 「生きる力を育む」適切な教育課程の編成・実施・評価・改善
- 3 時代の変化に即した生徒指導や特別支援教育の組織的推進
- 4 教職員の資質・能力の総合的向上
- 5 服務規律の厳正な保持
- 6 組織活動の活性化と充実
- 7 ミドルリーダーならびに管理職候補者の育成
- 8 防災教育と健康安全教育の充実
- 9 学校における「働き方改革」の推進(重点)

## 三 主な各部の活動

- 1 経営部  
(1) 教育研究事業の推進  
(2) 檜山校長会教育研究大会の開催  
(3) 檜山校長会教育研究大会の事業反省と意見・要望等の調査
- 2 道小・道中の調査協力等の連携
- 2 研修部  
(1) 檜山校長会研究計画の作成及び推進  
(2) 檜山校長会教育研究大会分科会運営

及び大会集録の編集

- (3) 全道・全国研究大会への参加集約
- (4) 道小・道中との連携

## 3 対策部

- (1) 各種調査に対する取組
- (2) 新採用校長研修会の開催・運営
- (3) 各種資料の収集と整備
- (4) 福利厚生の活動及び道小・道中との連携

## 4 情報部

- (1) 檜山校長会誌『清風』の編集・発行
- (2) 道小「教育北海道」の執筆依頼・原稿の提出
- (3) 道中「道中だより」・「全道中」の執筆依頼・原稿の提出
- (4) 『清風』の復刻版の閲覧の実施

## 四 役員一覧

会長	角田 昌宏(江差小)
副会長	福井 順一(江差中)
監査	本谷 弘之(若松小)
監査	皆川 一海(江差北中)
事務局次長	谷口 光伸(乙部小)
事務局次長	玉置 英樹(厚沢部中)
事務局次長	佐藤 等(館小)
会計	笠松 靖史(上ノ国小)
経営部長	米田 昌(瀬棚中)
研修部長	久慈 学(今金小)
情報部長	酒井 豊志(今金中)
対策部長	石澤 修介(北檜山小)

(江差町・江差中 福井 順一)

# 渡 島



渡島小中学校長会は昭和五十二年度に渡島小学校長会と渡島中学校長会の統合により会員数一三二人でスタートし、今年度で統合四十五年目を迎えた。一〇市町校長会で、小学校三九人、中学校一八人、小中併置校一人、義務教育学校一人の合計五九人の会員で組織されている。

今年度は、楢山聡新会長のリーダーシップのもと、「オール渡島」をキーワードに、先輩諸氏が築き上げてきた実績と伝統を守りながら、更なる課題と渡島教育の更なる充実と発展に寄与したいと考えている。

## 一 活動方針

- 1 創意と秩序のある渡島小中学校教育の充実と発展に努める。
- 2 教育の動向を踏まえ、教育関係機関・団体との連携を強化し諸課題の解決に努める。
- 3 新しい時代を担う学校経営の充実に努める。
- 4 未来を切り拓き豊かな社会を創り出す

子供たちを育成するカリキュラム・マネジメントの確立に努める。

5 子供の自己実現をめざす開発的・予防的な生徒指導に努める。

6 会員個人や協働の研修を通し、校長としての識見や指導力の向上に努める。

7 教職員の意識改革と資質・能力の向上を図るとともに、後継者の育成に努める。

8 教育条件の整備と福利厚生施策の充実に努める。

9 渡島小中学校長会の組織の強化と活動の充実に努める。

## 二 各部・事務局の主な業務計画

### 1 研修部

(1) 第一七期二か年継続研究二年次の研究計画の策定と推進

(2) ブロック研究推進との連携

(3) 第四五回研究大会の開催

### 2 経営部

(1) 新採用会員研修会等での研修講話

(2) 各種調査の実施と協力

(3) 経営部ニュースの発行

(4) 渡島・函館地区教育経営研究会運営

### 3 対策部

(1) 厚生事業（PG大会）の企画・運営

(2) 各種懇談会への協力

(3) 住宅要覧の追加・修正等

### 4 情報部

(1) 会報「渡島」、会誌「拓創」の発行

(2) 道小・道中広報紙への協力

5 正副会長・事務局

(1) 会務の推進、連絡・調整

(2) 予算・決算の作成、会計事務の執行

(3) 各種会議、研修会・研究会等の開催

・渡島小中学校長会研究大会

・夏季・冬季教育研修セミナー

・新採用会員研修会、歓迎会

・退職準備研修セミナー（隔年実施）

・退職者感謝の会

・諸機関・関係団体との研究協議会等

・渡島・函館地区教育経営研究会

・三地区校長会役員研修会

(4) 「教育実践表彰」の企画・実施

(5) 渡島管内教育関係管理職名簿発行

(6) 全道・全国校長会との連携・協力

## 三 役員一覧

会 長 楢山 聡（大沼岳陽）

副 会 長 三浦 哲也（上磯小）

副 会 長 石川 宏司（森 中）

監 査 渡邊 聡（大野小）

監 査 石岡 一智（八雲中）

事務局 長 池田 克己（知内小）

事務局 次長 西田 浩人（八雲小）

会計 理 事 石山 史（萩野小）

庶務 理 事 金澤 力（森 小）

庶務 理 事 後藤 正弘（鹿部中）

（七飯町・大沼岳陽 楢山 聡）

# 函館市



函館ハリストス正教会

函館市中学校長会は、今年度二〇人の会員（新会員四人、義務教育学校一校）でスタートした。木村雅彦会長の強力なリーダーシップのもと、小規模校長会ならではの機動性を生かしながら、函館市の教育振興計画に基づき、会員の知恵と力を結集し、函館の教育の充実に寄与したいと考えている。

## 一 基本方針

- 1 校長会の組織を機能させ、一丸となって教育課題、経営課題の解決に努める。
  - 2 全教育活動を通して「生きる力」を育む「信頼される学校」の創造に努める。
  - 3 関係機関との連携を基に、教育課題の解決、教育条件の整備充実に努める。
- ## 二 活動の重点
- 1 関係機関、各種団体とのネットワークづくりとCSを活かした学校力向上
  - 2 中学校教育の在り方についての研修と幼・小・中・高の連携の強化
  - 3 校長会としての組織マネジメント力が機能する実践交流の機会の充実
  - 4 業務改善に向けての具体的実践と信頼

される学校づくりの経営研修の充実  
5 関係機関と連携した管理職後継者の育成

6 函館市の「教育振興基本計画」と自校の学校経営の融合と実践・検証

## 三 各部運営計画の概要

経営・研修・対策部の三部構成

### 1 経営部

(1) 道中経営部との連携

(2) 運営要項の作成

(3) 小中合同特別研修の運営の支援

(4) 学校教育生き生きセミナー資料作成

(5) 函館・渡島地区教育経営研修会の計画と運営（今年度中止）

(6) 三地区校長会役員研修会の支援（今年度書面開催）

(7) 学校管理・服務に関する情報提供

(8) 各校教育課程に関する調査とまとめ

### 2 研修部

(1) 道中研修部との連携

(2) 実践事例交流会、局長講話、教育経営研修会の計画と運営

(3) 道中研究大会の参加・協力

(4) 渡島管内中高連絡協議会の運営協力

(5) 研究主題のへ対応

### 3 対策部

(1) 道中対策部・調査部との連携

(2) 道中等各種調査の協力・まとめ

(3) 函館市への予算要望調査の依頼とまとめ、各部各課、教育長への要望

(4) 教育実習生の受入れに関すること

(5) 福利厚生に関すること

(6) 道中会報・会誌の原稿依頼

(7) 函館市中学校長会誌「桐影」第四一  
号の編集と発行

## 四 主な活動の概要

### 1 定例研修会

職能向上を図るため経営課題や教育問題の報告と協議を行い、円滑な学校運営の推進を目指し研修の成果をあげている。

### 2 経営研修会

各種研修会の性格に応じた講演や提言により今日的課題への理解を深めている。

## 五 役員一覧

会長	木村 雅彦（五稜郭中）
副会長	内山 作（湯川中）
副会長	小林 徹也（赤川中）
副会長	松田 賢治（深堀中）
監査	齊藤 淳一（榎法華中）
監査	古俣みきお（戸倉中）
事務局次長	佐藤 雅博（巴中）
事務局次長	長谷川秀雄（桔梗中）
事務局次長	田上 直広（旭岡中）
経営部長	吉田 敬三（亀田中）
研修部長	佐々木理之（戸井学園）
対策部長	仲井 靖典（本通中）

（函館市・巴中 佐藤 雅博）



# 空 知



空知校長会  
シンボルマーク

空知校長会は、管内二四市町、小学校五七校、中学校三九校、義務教育学校一校の九七人の会員で組織されている。

昨年に引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染症による非常事態宣言等により、多くの事業が中止や延期、またはZoom等を活用した内容への変更を余儀なくされている。しかし、こうした時だからこそ、『チーム空知』として全会員の英知を結集させ、空知の子供たちの健やかな成長を願い、確かな教育理念に基づいた課題解決と空知の教育の充実発展に全力で取り組む決意である。

## 一 活動方針

- 1 空知の校長としての使命を自覚し、皆さんに励み、学校の自主性・自律性を発揮して、学校経営の充実・発展に努める。
- 2 校長相互の連携を図り、組織の在り方を再検討する中で、組織運営の効率や業務削減、諸課題の解決に努める。
- 3 教育関係機関・団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたり、地域・保護者から信頼される学校づくりに努める。

## 二 活動の重点

- 1 学校経営の充実
- 2 研修活動の充実
- 3 調査活動の充実と諸問題の解決
- 4 広報活動の充実

## 三 活動の具休策

- 1 適切な教育活動の編成と実施
- 2 校内運営組織の機能化
- 3 信頼に応える学校経営の推進
- 4 特別支援教育の充実
- 5 会員相互の協力と教頭会との連動による取組の推進

## 四 各部の主な活動

- 1 経営部
  - (1) 学校経営研究会の開催
  - (2) 教育条件の整備拡充に資するための調査・要請活動
  - (3) 校長会・教頭会役員研修会の開催及び教頭会研修への支援
- 2 研修部
  - (1) 空知校長会研究大会の開催
  - (2) 各種校長会研究大会への参加
  - (3) 各種研究団体・研修会への協力
  - (4) 研修便りの発行
- 3 対策部
  - (1) 教職員人事の課題把握と対応
  - (2) 働き方改革の調査及び実態把握
  - (3) 当面の問題に対する対策と説明
- 4 情報部
  - (1) 会報「空知野」の編集・発行
  - (2) 各種名簿・資料の作成・保管

## 五 組織と役員

- (3) 道小・道中広報関係への原稿執筆
- (4) 北海道教育振興会に関する業務

- ・ 会 長 喜多 慎治(岩見沢中央小)
- ・ 副会長 粟井 康裕(滝川第一小)
- ・ 副会長 河戸 悟(芦別中)
- ・ 事務局長 菅原 伸介(岩見沢南小)
- ・ 事務局次長 松本 伸彦(岩見沢日の出小)
- ・ 監 査 矢原 雄平(美唄東小)
- ・ 監 査 石成 牧子(深川中)
- 〈経営部〉
- ・ 部 長 山中 晴吾(上砂川中)
- ・ 事務理事 西田 篤人(滝川第三小)
- 〈研修部〉
- ・ 部 長 小熊 孝一(秩父別中)
- ・ 事務理事 戸澤 法史(砂川空知太小)
- 〈対策部〉
- ・ 部 長 牧野 良信(砂川小)
- ・ 事務理事 富樫 孝行(赤平中)
- 〈情報部〉
- ・ 部 長 鳥谷部賢太(滝川江部乙中)
- ・ 事務理事 古畑 聡子(砂川豊沼小)
- 〈地区幹事〉
- ・ 北地区幹事 細木 隆浩(深川一巳小)
- ・ 中地区幹事 高原 直樹(滝川第二小)
- ・ 南地区幹事 野田 泰史(岩見沢北村小)
- ・ 東地区幹事 小泉 寧(南幌中)
- 〈道中役員〉
- ・ 運営委員 太田 知子(美唄中)
- ・ 事務局幹事 河村 克也(滝川江陵中)
- ・ 事務局幹事 坂本 征人(妹背牛中)

(情報部部长 鳥谷部賢太)

# 胆 振



晴海公園から望む  
「苫小牧港の夜景」

胆振管内校長会は、管内一市町、小学校六七校、中学校四一校（含併置校二校）義務教育学校一校の一〇九校、一〇九人の校長によって構成されている。一市町中、苫小牧市が小・中ごとの校長会を組織しており、管内校長会としては一二校長会から成り立っている。

## 一 運営・活動方針

本会は、子供たち一人一人に「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」といった生きる力を育むとともに、保護者や地域住民の負託と信頼に応え、管内教育の充実と発展のために努力を積み上げてきた。今年度は、渋川会長のもと、時代の要請や新学習指導要領の理念を実現するために、「チームとしての学校」への改善充実に努めることを主たる活動方針に、教育改革の着実な推進、今日抱える教育的課題の解決に取り組んでいる。

### 1 活動方針

- (1) 校長としての識見・能力を高めるため、自ら研さんに励むとともに組織のリーダーとしての指導力を培い、時代の要請や新学習指導要領の目標を実現するため、「チームとしての学校」への改善充実に努める。
- (2) 会員相互の信頼関係を基盤として、組織の充実・強化に努めるとともに、校長会の総力を結集して、迅速且つ適切に諸問題の解決に努める。
- (3) 教育関係機関や諸団体との連携を強化し、働き方改革を中心とする、今日的な課題の解決に努める。

### 2 活動の重点

- (1) 校長としての職能向上を図る研修の充実
- (2) 学校経営の適正化を図る研究・実践及び教育条件の整備・充実
- (3) 教職員の意識改革と資質・能力の向上による学校改善と後継者の育成（教員のキャリアデザインへの働き掛けと、女性教員の積極的な登用）
- (4) 道小・道中、第4ブロック、各市町校長会との組織的な連携重視と行政諸機関や関係団体との連携強化と働き方改革の着実な推進
- (5) 会員同士の親睦と福利厚生の充実に関する事業の推進

- (6) 諸事業の機能的・効率的な運営改善と予算執行の適正化

## 二 各部の事業推進概要

- 1 研修部 研修の活性化
- 2 経営部 組織・法制上の諸問題、法令・法規の情報収集や資料化
- 3 対策部 各種調査、福利厚生事の推進
- 4 情報部 会報・会誌「響箭」の発行

## 三 役員名

会長	渋川 賢一（室蘭西中）
副会長	瀬川 恵（日新小）
前田 辰夫（凌雲中）	
運営委員	森田 芳明（緑小）
坂本 博（幌別中）	
事務局 長	瀧澤 義守（虻田中）
事務局 次長	阿部 聖司（長和小）
菅林 秀樹（洞爺中）	
研修部長	松井 操人（拓勇小）
経営部長	大谷 昌史（豊浦小）
対策部長	遠藤 玲（明倫中）
情報部長	吉岡ゆかり（厚真中央小）
山下 文人（とうや小）	
大塚 志保（鶴川中央小）	

（苫小牧市・和光中 大村 浩喜）

# 日 高



えりも町 豊似湖  
(白い恋人で有名になった)

日高地区校長会は、管内の小・中学校四一校(中学校一五校)の校長により組織されており、日高の教育課程の解明のため積極的に提言し行動する校長会を目指し、活動を推進している。

## 一 活動方針と活動の重点

日高地区校長会は、結成以来、真摯な研究と実践を積み重ね、学校が公教育としての役割と使命を果たすため、管内教育の諸課題の解明と教育の質の向上に取り組み多くの成果をあげてきた。しかし、学力向上やいじめ・不登校等の生徒指導上の問題、教職員の服務規律、教職員の資質向上等、様々な課題が山積している。

特に学校運営の組織化、後継者育成の問題は地区校長会として継続した重点課題として取組を進めている。このような現状を踏まえ、校長会の機能を活かし、各会員の取組を発信、共有化を進めることにより、指導性を発揮し、管内教育の充実に努めている。

今年度は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実にどう関るかを重点として学

習を深め、全会員で交流、共有化した。

## 【活動の重点】

- 1 新しい生活様式を踏まえた信頼と秩序に基づく学校経営の推進
- 2 社会の開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善
- 3 教職員の資質・能力の向上と後継者育成
- 4 校長の研修活動による機能向上と組織体制の強化

## 二 各部の活動

### 1 研修部

新学習指導要領の理念を踏まえた学校経営ビジョンの実現のため、校長の指導性の向上をどのように図るのかを、個人研究と組織研究を関連付けて行っている。また、会員相互の研修を深めるために、研究活動の実践状況の交流・協議・検証の場として「管内小中学校長研修会」の他、年二回の全体研修を企画し、研究実践の状況や成果・課題の交流、協議の場として「研修部長研修会」を年四回開催している。

今年度はコロナ禍により全体研修の回数の工夫、オンライン研修を取り入れ行った。十一月の研修会は会合し実施することができ、生の声を聴く機会となり、一定の成果をあげることができた。

### 2 法制・広報部

教育経営・法制研修会については、コ

ロナの影響で課題別研修会と兼ねて行った。校長会員の連携を高める広報誌「教育ひだか」の発行は予定どおり行う。

### 3 調査・厚生部

学校経営に必要な調査を道小・道中と連携しながら情報の共有化を図った。福利厚生については、主体的に研修を深め、厳しい共済制度に対して見直しをもち、支援に努めている。

### 4 課題別研修会

平成二十八年度から行っている研修会で、日高管内における喫緊の課題について研修を深めている。今年度は会同して実施できなかったが、オンラインで二つの講話を聞くことができた。

### 5 教育課程特別委員会

小中学校における新学習指導要領への対応を確実に推進させるため、実践事例の集約、発信を目的として発足した。今年度は五つのテーマについて実践をもち寄り、収録を発行した。

## 三 役員

- |       |             |
|-------|-------------|
| 会長    | 品田 和輝(富川小)  |
| 副会長   | 盛永 明寿(浦河一中) |
| 副会長   | 小嶋 範彦(静内三小) |
| 事務局長  | 水上 義則(平取小)  |
| 事務局次長 | 鈴木 晋作(高静小)  |
| 事務局次長 | 玉手 広昭(静内小)  |
| 会 計   | 中田実千代(えりも中) |

(えりも町・えりも中 中田実千代)

# 十 勝



十勝地区は管内一八町村の小・中学校長の九三人で構成されている。本校長会は「校長の教育実践指標」を掲げ、会員相互の研さんに励むとともに、公教育の役割と使命の高揚に努めてきた。そして創意と工夫に富んだ学校経営と教育活動の推進で、十勝教育の充実・振興に多くの成果をあげてきた。

また、校長一人一人が一校を預かる責任者であり「子供の成長に責任を負う」という態度のもとに十勝教育の推進・発展に寄与するよう努めてきたところである。

今年度についても、「コロナ禍」による活動の中止や修正を行いながら、今できる最大の連携協力により「十勝らしい一人一人の学びの実現」を合言葉に、保護者・地域とともに「子供の確かな育ちの創出」に努めてきた。

## 一 活動方針・重点

- 1 信頼に基づく創意工夫に満ちた活力ある学校経営に努める。
- 2 協働体制の確立と信頼関係の深化を図り、組織体として機能の充実に努める。

- 3 研修を深め、主体性を確立し、教育上の諸問題の解決に努める。
- 4 地域社会・関係機関との連携を強化し、教育諸条件の整備に努める。
- 5 待遇改善・福利厚生等の向上を図るため、情報交換と要望活動の充実に努める。

## 二 各部の活動(予定していた主な業務内容)

### 1 研修部

- (1) 第一八次教育研究三か年計画二年次の推進(第五三回十勝小・中校長会教育研究大会の開催)
- (2) 教育研究大会の収録の発行
- (3) 道小・道中研修部との連携(地区活性化支援事業への参加等)
- (4) 全国・全道校長研究大会への参加促進
- (5) 情報誌等を通じた教育情報の提供

### 2 経営部

- (1) 第五五回十勝・帯広地区教育経営・法制研究会の開催
- (2) 「学校運営に関わる調査」「人事異動調査」の実施と調査報告書の発行
- (3) 北海道教育公務員弘済会との連携(教育研究実践校助成事業等)

### 3 対策部

- (1) 「十勝教育・学校の顔」の発行
- (2) 「教育懇談会」の運営
- (3) 「退職校長感謝激励の会」の運営
- (4) 令和三年度「十勝・帯広 校長・教頭・主幹教諭名簿」の発行

- (5) 全道・管内学校給食研究協議会への協力

### 4 情報部

- (1) 会報「十勝川」の発行(年間三回)
- (2) 各町村校長会情報部との連携、各種情報の提供
- (3) 道小会報、道中会報等への寄稿

## 三 諸会議

- 1 総会(四月) 活動計画・予算・役員
- 2 町村会長会議(年一回)・事務局長会議(年二回)
- 3 評議員会(年一回)
- 4 常任委員会(月一回)

## 四 十勝小・中校長会役員

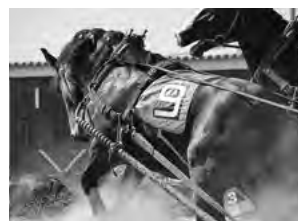
会 長	喜多 敦(幕別中)
副 会 長	沼田 拓己(音更小)
副 会 長	長江 教貴(大樹中)
事務局 長	橋本 靖宏(札内中)
次 長	中村 俊緒(足寄中)
会 計 長	野村 勉(緑南中)
会 計 次 長	栗原 賢次(更別小)

## 五 役員一覧

代 表 者	喜多 敦(幕別中)
事務局 長	長江 教貴(大樹中)
会 計 担 当	橋本 靖宏(札内中)
経 営 担 当	玉川 弘幸(瓜幕中)
研 修 担 当	佐藤 育子(音更中)
対 策 担 当	佐々木典郎(下音更中)
情 報 担 当	松井 眞治(上美生小)

(幕別町・札内中 橋本 靖宏)

# 帯 広 市



ばんえい競馬

帯広市中学校長会は、一四校の校長で構成している。今年度は、新会員三人を迎え、藤崎禎人会長を中心に、一枚岩となり諸課題に取り組んでいる。

はじめに  
帯広市中学校長会は、全日中新教育ビジョン「学校からの教育改革」、帯広市教育基本計画の理念「ふるさとの風土に学び 人がきらめき 人がつながる おびひろの教育」、帯広市校長会の方針「新しい時代を生き抜く 帯広っ子の育成」を踏まえ、校長としての主体性と指導性をもち、中学校教育を推進し、帯広市民の負託に応えていく。

## 一 運営方針

1 校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、今後に向けた組織の充実・強化を図り、会の総力を結集して活動の効率化と諸課題の解決にあたる。

2 帯広市教育委員会をはじめ、全日中、道中、管内小・中学校長会、中高特連絡協議会等の教育関係諸機関・諸団体と緊

密に連携し、教育課題の解決にあたるとともに、家庭や地域に信頼される学校づくりに努める。

3 一校を預かる校長としての使命を自覚し、学校の自主性・自律性を基に学校運営の改善・充実に努める。

4 新型コロナウイルス感染症対策としては、「コロナ禍における帯広市学校教育の方針」に基づき、感染状況を踏まえ、関係機関と連携しながら対応を進めていく。

## 二 活動の重点(今年度の重点課題)

1 中学校長会の組織を強化し、活動の充実に努める。

■校種間の学びをつなぐ取組の充実・行動連携(エリアファミリー、小中一貫教育)

■危機管理上の迅速な対応(中学校長会ならではのスピード感を生かした協力体制)

■コミュニケーション・スクールの推進

2 教育課題の解決を図り、学校経営の改善に努める。

■社会に開かれた教育課程の実現(主体的・対話的で深い学びの実現)

■教職員の服務規律保持の徹底  
危機管理・コンプライアンス研修強化  
不祥事ゼロKTSBA(交通事故違反、体罰、セクハラ、暴言・安全管理)の誓いの取組

■働き方改革の推進(北海道アクション

プラン、帯広市立学校における働き方改革推進プランの推進、部活動休養日の完全実施、定時退勤日の完全実施、学校閉庁日の設定・校務分掌のスリム化、スクラップアンドビルドの組織的検討

3 教育課程の整備・充実と特色ある学校づくり、確かな学力、体力の向上に努める。

■新学習指導要領の趣旨を踏まえた組織的な授業改善の推進

■妥当性や信頼性を高めた学習評価の実施及び円滑化を図る各校連携した取組

■GIGAスクール構想における個別最適な学びの実現

■いじめ・不登校の問題への適切な対応と生徒指導体制の強化

■多様化した高等学校教育並びに入学者選抜方法への適切な対応

4 円滑な教育活動推進のための教育諸条件の整備・充実に努める。

■校長の人事権の尊重、人事異動要綱に基づく適正な配置

■人的条件の改善・物理条件・人的情報の交流及び管理

## 三 役員

会 長 藤崎 禎人(帯二中)  
副 会 長 春山 俊裕(帯四中)  
事務局 長 能戸 貴英(帯八中)  
事務部 長 堂山 貴也(帯七中)  
研修部 長 嶋 健(八千代中)  
計 村松 正仁(大空中)

(帯広市・八千代中 嶋 健)

# 釧路



釧路湿原の神  
「タンチョウ」

釧路校長会は、令和三年度、採用八人の新会員を迎え、六町一村、四五人（小学校長二三人、中学校長一七人、小中併置校長四人、義務教育学校長一人）で構成している。

今年度、湊谷美樹治会長を中心に、本会が歴史的な背景をふまえて作り上げてきた釧路校長会の理念『調和のある学校運営を目指して』の五項目の方針を全体で確認し活動を開始した。

## 一 基本方針

本会は、常に「釧路校長会綱領」を基底に、釧路の教育の発展・充実に期する「学校経営にあたっての基本的な姿勢」を堅持し、「釧路の風土で新たな価値を創造し、未来を生き抜く児童生徒の育成を目指す学校教育」という令和三年度の校長会研究主題と「学習の保障」という釧路管内教育推進キーワードをもとに、子供のために最善を尽くす校長会として、関係機関との連携協力を密にして、保護者や地域の信頼に応える学校経営を推進するよう努力する。

## 【釧路校長会綱領】

私たちは釧路教育の充実、発展に重要な役割を果たし、子供の未来に責任を負う者として、ここにこの綱領を定める。

- 一、校長の使命を自覚し、常に厳しい自己研鑽に努める
- 一、情熱と強固な意志をもって、公教育の推進に努める
- 一、たがいに強い連帯感をもって、職務の遂行に努める
- 一、職員相互の信頼関係を基盤とした学校経営に努める
- 一、釧路の風土に生き、未来を拓く子供の育成に努める

## 二 本年度の運営方針

- 1 校長としての経営ビジョンを明確にし、その職責の重さを自覚して「釧路の風土に根ざす学校づくり」の経営感覚を磨き、その実践力を高めるために職能の向上に努め、諸課題を解決する。
- 2 教職員として服務規律を徹底し、地域や保護者からの信頼や期待に応え、「子供たちや教職員が明るく、楽しく学べる環境づくり」を志向する学校経営に努める。
- 3 新しい時代に求められる資質・能力など児童生徒の「生きる力」を育成する新学習指導要領の確実な実施に向けて、授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立等の取組を進め、自校の教育活動の

質の向上を図る。

- 4 教育関係諸団体、特に町村教育委員会と町村校長会との連携協力を密にし、教育の動向や情報を共有して諸問題への対応と解決に向け迅速に行動する。

5 釧路校長会綱領を基底とし、会員個々の意識を高め相互に連携・協働を図りながら、各校の調和のある学校運営を目指す。

## 三 活動の重点

- 1 学校経営の充実
  - ・学校における働き方改革の推進
- 2 創意ある教育活動の推進
  - ・教育の質の向上
  - ・男女平等教育の推進
- 3 組織の充実と強化
  - ・後継者の育成

## 四 役員

- |       |                 |
|-------|-----------------|
| 会長    | 湊谷美樹治（標茶町標茶中）   |
| 副会長   | 野口 育子（標茶町標茶小）   |
| 副会長   | 水野 秀哲（釧路町富原中）   |
| 事務局次長 | 佐藤 毅（白糠町白糠中）    |
| 事務局次長 | 田中 敏行（鶴居村鶴居小）   |
| 会計    | 土居 慎也（鶴居村下幌呂小）  |
| 釧路研所長 | 大西 展史（弟子屈町弟子屈小） |
| 監査    | 佐藤 岳彦（浜中町霧多布中）  |
| 監査    | 小原 正寿（標茶町虹別小）   |
| 研修部長  | 中岡 美緒（弟子屈町川湯小）  |
| 経営部長  | 須藤 光秋（厚岸町厚岸小）   |
| 対策部長  | 齋藤 超（白糠町庶路学園）   |
| 情報部長  | 大宮 秀夫（浜中町浜中小）   |

（釧路町・富原中 水野 秀哲）

# 釧路市



「世界三大夕日」と称される  
弊舞橋からの夕景

令和三年度釧路市中学校長会は、五人（新採用一人）の新会員を迎え、一五人（併置校・義務教育学校各一校）でスタートした。伊藤晃一会長のもと、今日的な教育課題についての研究や、生徒指導上の諸課題について、具体的な事例をもとに研究協議を行い、校長としての資質及び職能の向上に努めている。

## 一 活動方針（概要）

- 1 校長は「命の尊さ」を強く打ち出し、危機管理意識の醸成及び危機管理の対応（含自然災害）について、継続的に取り組む。
- 2 校長は指導性・先見性を発揮し、教育課程の方針等を家庭や地域と共有する「社会に開かれた教育課程」の実現に努める。また、教育効果を高める「カリキュラム・マネジメント」の取組を積極的に推進する。
- 3 服務管理の適正化に努め、秩序ある学  
校運営を推進する。
- 4 自校の最高責任者という責任と自覚を

もち、これからの時代における学校の在り方に迫る強い意志と気概をもつ。

5 制度的な改革に具体的な対応ができる校長として、必要な職能及び専門性を向上させる研修を組織的に推進する。

6 校長会組織としての関わりを大切にするとともに会員相互の情報共有をより一層深め、一枚岩の姿勢で取り組む。

7 各種校長会と連携を深めるとともに独自性を発揮しながら、各部の活動の円滑な進め方を共通理解する中で、効果的な組織運営に努める。

8 教育局・教育委員会並びに釧路校長会との連携を密にし、教育環境や管理、勤務条件等の整備促進に努める。

9 校長会としての地位の確立と主体性を高め、職能組織としての充実と会員相互の結束強化及び親睦を図る。

## 二 活動の重点（概要）

### 1 学校経営

- (1) 新型コロナウイルス感染症対策、GIGAスクール構想の推進、働き方改革といった喫緊の課題への対応
- (2) 生きる力の育成を目指した教育課程の編成・実施・改善及び全面実施となつた学習指導要領の適切な実施

### 2 研修

- (1) 教育界の動向と教育課題を勘案した計画的・継続的な研修の充実
- (2) 職能向上のための研修会の企画と、

生徒指導上の課題の交流と対応

### 3 組織運営

- (1) 学校運営に関する法制問題の調査研究
- (2) 後継者育成のための職能向上を図る研修の充実
- (3) 会員相互の理解と連携を深める広報活動

### 4 教育条件

- (1) 行政機関（教育局・教育委員会）との連携強化

### 5 厚生

- (1) 道小・道中、互助会との連携を密にした会員の福利厚生に関する業務の推進

## 三 主な活動

- 1 法制研修の推進等
- 2 学校教育経営研究会等
- 3 学力向上についての調査等
- 4 生徒指導についての調査・研究等
- 5 高等学校、高専、特別支援学校との情報交換交流

## 四 役員名

- |       |            |
|-------|------------|
| 会長    | 伊藤 晃一（共栄中） |
| 副会長   | 青木 悟（桜が丘中） |
| 事務局長  | 本川 敬一（幣舞中） |
| 事務局次長 | 松岡 伸之（景雲中） |
| 会計    | 水上 俊司（北中）  |

（釧路市・景雲中 松岡 伸之）

# 根 室



車石（根室市）

## 一 はじめに

根室管内小中学校校長会は、新採用校長七人を迎え、「継承と発展」を合い言葉に、管内教育の振興にあたってきた。全四〇校の校長がそれぞれ「チーム根室」を意識し、今年度は特に管内課題でもある後継者の育成を組織的、計画的に推進するべく、管内教頭会とも連携して活動を進めてきた。

## 二 運営方針

- 1 教育をめぐる諸情勢を的確に捉えるとともに、校長の抱える問題を組織として共有化を図り、その解決に向けた情報提供や解決策の提案に努める。
- 2 信頼される公教育の確立を図るとともに、関係諸機関との連携を深め、北海道や国の諸改革の動向を踏まえて適切な対応に努める。
- 3 校長の経営力の向上を図り、地域に開かれた学校経営の改善・充実に努める。
- 4 会員相互の連帯意識を強め、信頼関係を基盤にした、組織の強固な体制作りに努める。

## 三 活動の重点(概要)

- 1 家庭・地域に信頼される学校づくり  
・学校評価改善と教職員資質・能力の向上  
・家庭・地域社会との連携・協力の強化  
・教育委員会等との関係の強化  
・法規や服務規定に基づいた学校経営の推進  
・今日的課題に向けた組織体制の充実
- 2 社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善  
・特色ある教育課程の編成・実施  
・学力向上に向けた指導・評価の工夫  
・道徳教育・健康教育の充実  
・北方領土学習・ふるさと学習の充実  
・地域社会の人的・物的資源の効果的活用
- 3 研修活動の推進  
・学習指導要領の理解やカリキュラム・マネジメント等における研修の充実  
・根室管内小中学校校長研究大会及び地区教育経営研究大会開催と内容の充実  
・全道・全国の研究大会への積極的な参加  
・今日的な課題に対応する研修計画推進
- 4 教育諸条件の整備・充実  
・後継者育成の推進  
・教員試験受験予定者への支援の充実  
・人事課題に対する意思集約と発信  
・女性活躍推進
- 5 教職員の待遇改善への働き掛け  
・管理職の抜本的待遇改善  
・住宅環境や職場環境の整備と充実  
・教職員の健康管理、働き方改革の推進

- 6 事務・栄養職員、退職者等の処遇改善  
・業務見直しと組織強化  
・役員業務の見直しと改善  
・活動の充実及び組織・事業の改善  
・市町単位校長会と連携した活動の推進  
・組織的な情報収集と的確な情報提供  
・各種調査活動の協力と推進  
・関係機関や諸団体との連携  
・適正な予算執行に向けた見直しと改善

## 四 主な活動内容

- 1 根室管内小中学校校長研究大会  
・一人一レポートを作成し、今年度は紙面研修。
- 2 根室地区教育経営研究大会  
・北海道小学校長会・北海道中学校長会幹部による教育情勢等の解説をもとに、諸課題を協議した。
- 3 定例理事研修会の開催  
・各市町単位校長会の活動を交流し、課題と改善策について協議した。また、北海道教育庁根室教育局から教育の動向や今日的課題について情報提供を頂いた。

## 五 令和三年度役員体制

- 会 長 二本柳千尋（中標津・広陵中）  
副 会 長 近藤 康（別海・上西春別小）  
副 会 長 齋藤 征志（標津・標津小）  
事務局 長 藤原 秋彦（根室・光洋中）  
会 計 小崎 伸人（別海・野付中）

（根室市・光洋中 藤原 秋彦）



# オホーツク



網走から臨む知床連山

オホーツク管内校長会は、オホーツクの教育の充実・発展のため、心豊かでたくましい子供の育成に鋭意努力を重ね、組織の総力を傾注して研究と実践に努めてきた。

今年度は、二人の新たな会員を迎え、小学校七五校、中学校四四校、小中併置校一校、義務教育学校三校の計一二三人の校長で組織されている。

これまでの成果を踏まえ、「オホーツクの子供たちのために、志を高く掲げ、力強く前進する校長会」のスローガンの下、創意と活力に満ちた学校づくりに努めている。

## 一 活動方針

1 ふるさとの地から世界を見つめ、新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育成するため、「チームオホーツク管内校長会」として、関係機関との連携をより一層強化し、管内的な取組を通して課題解決に努め、以て、地域・保護者の信託に応える学校経営を推進する。

2 自らの使命を自覚し、リーダーシップ

と指導力を発揮して、学校組織の活性化と職員の資質・能力の向上等に努め、活力ある学校づくりに全力で取り組む。

## 二 活動の重点

1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の推進に努める。

2 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施と評価・改善に努める。

3 子供理解を深め、時代の変化に即した生徒指導の充実に努める。

4 校長の資質・能力の向上を図る研修活動の推進に努める。

5 教職員の資質・能力の総合的な向上に努める。

6 組織内や関係機関との連携による組織の強化に努める。

7 教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。

8 教職員の処遇の改善に努める。

## 三 各部の活動計画

### 1 研修部

(1) 第四九回 オホーツク管内校長教育研究大会(オンラインでの開催)

(2) 市町村・ブロック研修会

(3) 道小・道中全道大会、全国研究大会への参加促進と研究交流(オンライン)

(4) 教育課程に係る調査への協力

### 2 情報部

(1) 「会員の顔」の発行

(2) 道小・道中及び全連小・全日中と連携した広報活動

(3) ホームページの更新

### 3 経営部

(1) 地区別教育経営研究会の開催

(2) 学校経営に関する調査の実施

(3) 管内における諸課題の把握と分析

### 4 対策部

(1) 管内の教育課題を集約した学校経営資料の提供

(2) 道小・道中関係の諸調査への協力

## 四 役員一覧

会長 片桐 聡(北見三輪小)

副会長 大岩 芳江(紋別小)

副会長 垣内 孝仁(網走第二中)

監査委員 河岸 英樹(美幌小)

監査委員 畠山 治夫(遠軽南小)

事務局次長 緒方 隆人(北見北中)

事務局次長 天野 昌明(北見小泉小)

事務局次長 河村 一恵(網走白鳥台小)

事務局次長 徳増 秀隆(網走第一中)

事務局次長 平田 和史(北見小泉中)

会計 橋本 正之(おんねゆ学園)

研修部長 上野 弘一(訓子府中)

情報部長 大崎 禎浩(小清水中)

対策部長 畠山 淳(北見豊地小)

経営部長 坂田 直繁(紋別中)

(北見市・小泉中 平田 和史)

# 札幌市



大倉山ジャンプ競技場

札幌市中学校長会は、市立中学校九七校と北海道教育大学附属札幌中学校、北翔養護学校、市立札幌開成中等教育学校を加えた計一〇〇人の校長で構成されている。

今年度も、中村邦彦会長の下、副会長六人、会計一人、事務局長一人が役員として会務を担うとともに、道中体連会長、各部部长七人、監査委員二人、事務局員七人の計二十六人で理事研修会の運営にあたる。

## 一 活動方針

市民の負託に応え信頼される中学校教育を推進すべく、「教育の動向を的確に捉える、保護者や地域、関係機関等との連携を図る、会の組織と機能を一層充実させる」を基本に校長としての研さんと職能の向上を目指す。また、「学びの保障と感染症対策の両立」、「学校における働き方の見直し」等を含め、今年度の重点項目は以下の四つである。

- ・校長会の組織・運営の強化と研修の充実
- ・学校経営の改善と充実
- ・学校経営の条件整備と教職員の待遇改善
- ・教育関係機関や諸団体との連携強化

## 二 各部署の運営の方針

### 〈管理部署〉

- ・学校経営上の管理、運営についての現状把握と分析を行い、課題の解決を図る。

### 〈施設部署〉

- ・長期的展望に立った学校施設・設備の整備・充実及びICT教育に関わる施設・設備や学習環境に関する諸課題の改善・充実に努める。

### 〈研究部署〉

- ・研究基本主題による共同研究を総括し、校長としての職能向上を目指すことにより、中学校教育の充実・発展に努める。

### 〈指導部署〉

- ・生徒の実態を的確にとらえ、問題行動の質的变化にも適切に対応できる生徒指導の在り方について検討する。

### 〈保健体育部署〉

- ・全市的立場で生徒の心身の健康保持、増進と体育・スポーツの充実発展を図る。

### 〈進路指導部署〉

- ・キャリア教育の視点に立った進路指導の充実を図り、適正な学校経営を行うための研究と条件整備にあたる。

### 〈特別支援教育部署〉

- ・特別支援教育に関する諸問題について研究協議し、その推進と充実を図る。

## 三 具体的な運営・活動

- 1 「例会・研修会」は全会員出席の対面会議と書面会議を年間一〇回予定している。

- 2 「理事研修会」は、例会・研修会の前週に二六人の理事の出席で開催され、運営に関する協議、議題の整理等を行う。

- 3 「部会」（七部）は、年間数回設定され、担当する諸課題に取り組んでいる。

- 4 「各区校長会」（一〇区）は、行政区ごとに設置され、区内の情報交流や課題に応じた協議、検討、研修等を行っている。

- 5 「学教連絡会」では、毎月、幼小中高の四種校長会代表と市教委が一堂に会し、情報交流等を中心に連携を深めている。

- 6 「小・中学校生徒指導特別委員会」は、小・中学校長会代表と関係機関で構成され、生徒指導上の諸課題について、連携・協力を深めている。

## 四 研究活動

研究基本主題「新たな未来を紡ぎ、より良い社会を創る力を育む札幌市中学校教育」を掲げ三年継続の研究が行われ、本年度がまとめの年となる。七つの部がそれぞれ教育課程や学校経営、生徒指導、教育環境等の視点から課題の究明に取り組んでいる。研究成果は、十一月の「全体研修会」で全会員に発表され、三月には「研究紀要」として発行される。

また、札幌市中学校長会は、政令指定都市中学校長会で構成する「大都市中学校長会連絡協議会」に加盟しており、本年度のさいたま大会はオンライン開催となった。大都市が抱える教育諸課題について協議を行った。

（札幌市・啓明中 須藤 勝也）

# 北海道

# 風土記



イワヒゲ 樽前山



イワブクロ 羊蹄山



クマガラ 有珠善光寺



チングルマ 大雪山



ハクサンチドリ 夕張岳



五稜郭公園



積丹ブルー 幌武意海岸



雪渓 トムラウシ北沼

## 田園福祉の村

### ふれあいの里 新篠津



新篠津村・新篠津中

吉本浩志

明治十六年、初めて開墾の鍬が下ろされ、その後明治二十九年、当時の篠津村（現在の江別市篠津）から分かれ新篠津村が誕生。以来、先人たちの絶え間ない努力と新天地創造への熱き情熱により、恵みをもたらす豊かな大地へと変貌を遂げた。

新篠津は、石狩管内北東部に位置する人口約三、〇〇〇人の小さな村である。村域の全ては石狩平野に属し、美しい田園風景が広がっている。山間部もなく、地平線に沈む夕日は絶景そのもの。冬は季節風の影響を受け、道内でも屈指の特別豪雪地帯に数えられる。



#### 【厳つ自然との闘い】

村の東部を流れる石狩川は、村民に潤いと恵みをもたらす一方で、大水害の元凶ともなり、村全体が度重なる甚大な被害に見舞われた。昭和三十年以降、北海道開発の中核として石狩川水域総合開発が計画され、その支流である篠津川大運河の開削を中心に、排水・

客土・造田・道路建設などの事業が一五年がかりで行われた。かつては洪水と泥炭地に悩まされていた新篠津村も、この事業によって畑作から水田経営へと大きく転換した。現在は、一戸あたりの農地面積も全道トップクラスであり、良質米の生産、環境や消費者に配慮した野菜や花卉栽培にも取り組むなど、基幹産業の農業にも広がりを見せている。

#### 【水とともに生きる】

新篠津村を語るときに水とのつながりは欠かせない。かつては水田の真ん中で漁業が行われていた。農家の年配の方々で組織する「どじょう生産組合」が中心となって捕獲し、都市圏に販売していた歴史もある。

近年、石狩川の水空間を活用し、ゆとりや楽しみを見いだそうと、河川緑地構想に基づき開発事業が進められた。石狩川沿いの三日月湖である「しのつ湖」に隣接した「しのつ公園キャンプ場」は、整備の行き届いた環境であり、春から秋にかけてはキャンプ、冬はワカサギ釣りを楽しむ人で賑わっている。また、低農薬で管理されている「ニューしのつゴルフ場」では、時には水鳥が飛来するなど、正に河川敷のコースならではの風景を目にする。さらには、「グライダー滑空場」があり、大空を目指す鳥人たちが飛び立っている。

#### 【田園福祉の村における自立と共生】

市街地には、人々のぬくもりが通う福祉ゾーンが存在する。特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、障がい者生活施設及び授産施設、更には高等養護学校があり、村内の至る所で障がい者と健常者が心を通わせ、

一緒に働く姿を目にすることができ。太陽の光を浴びた美しい田園風景に心を癒やされた人々が、ゆつたりと流れる時間を笑顔で過ごしている。村全体がノーマライゼーションの理念に包み込まれ、談笑するその姿から、心のバリアフリーが形成されている。

#### 【ふれあいの里は良好なコミュニティから】

八月下旬。新篠津は祭りのときを迎える。特に「青空まつり」は村をあげての一大行事である。しんしのつ田園太鼓の迫力ある演奏に始まり、実行委員会が中心となって企画運営する様々なイベントに参加者の心が躍らされる。クライマックスは、各自自治区、福祉施設、学校等が一堂に会し、老若男女が街中をねり歩く踊りパレードと、青森ねぶたを想起させる、電飾・デザイン鮮やかな山車の行列である。祭り会場は、

大変な盛り上がりであり、人々のよきふれあいの場にもなる。この青空まつりで村民は更なる結束を固め、九月一日の「新篠津村の日」で村の発展のために決意を新たにし、基幹産業の農業における収穫の最盛期に入るのである。



「何も無いぜいたく」。都会の中のオアシス・新篠津村に、ぜひ一度、足を運んでみてほしい。眼前に広がる美田と人々のぬくもりがあなたを待っている。

## 自然の恵み野「わっさむ」町 〜日本一のカボチャ&越冬キャベツ〜

和寒町・和寒中

中間 靖之

### 《塩狩峠》

和寒町は、旭川駅から北へ約四〇km、作家の三浦綾子さん著作『塩狩峠』を擁する自然環境豊かな町です。塩狩峠は、国道四〇号線沿いにあり、峠以北の天塩国と隣町である比布町方面の石狩国との境を意味しているそうです。天塩国・石狩国と名付けられたのは、戊辰（函館）戦争終結後とのことです。

また、天塩川水系と石狩川水系の分水界でもあり、標高二六三mの峠です。

塩狩峠は、桜の名所としても知られ、五月中旬頃には、約一、六〇〇本のエゾヤマザクラが咲き誇ります。頂上付近には、JR塩狩駅や塩狩峠記念館（三浦綾子旧宅）があります。記念館には小説を執筆した部屋が復元されており、全国・世界中から観光客が訪れます。本校生徒も総合的な学習の時間



で、約一〇kmの道のりを和寒町の自然の恵みを感じながら歩いて訪れています。

### 《近藤重蔵ゆかりの地》



近藤重蔵（二七七一〜一八二九）は江戸時代後期に活躍した幕府の役人で、蝦夷地開拓に貢献した探検家です。幼少期より学問、剣術ともに優秀で、二〇代半ばで幕府に北方調査の重要性を訴え、蝦夷地を五度にわたり探索したそうです。

一八〇七年の派遣踏査で、天塩川河口（現在の天塩町）からさかのぼり、支流を経て塩狩峠を越え、石狩川に抜けたとされています。この踏査は、幕末の探検家である松浦武四郎が天塩川流域を調査する五〇年前だったそうです。現在の塩狩峠付近で「山越え、山中泊」を行ったことから「近藤重蔵ゆかりの地」として、一九七六年に石碑が建立されました。

今年、近藤重蔵生誕二五〇年を迎え、町ではパネル展や「天塩越えフットパス」などの記念事業が催されています。

### 《日本一のカボチャ》

和寒町の人口は、現在三、〇〇〇人あまりです。かつて小中高合わせて一五校もあった学び舎は、現在小学校一校・中学校一校となりました。基幹産業は農業であり、特にカボチャの生産においては作付面積・収穫量とも

に日本一を誇ります。二〇一二年からは、和寒町の新たな特産品としてペポカボチャ（ストライプペポ）の栽培がスタートしました。現在は「わっさむペポナッツ」として商品化し販売されています。



また、カボチャや基幹産業である農業についての学びを本校では総合的な学習の時間に位置付けています。例年、八軒ほどの農業生産者様の御協力をいただき、全校生徒がカボチャ収穫作業などの勤労体験学習を行い、学んだことをまとめて発表しています。

### 《越冬キャベツ》

二〇一〇年二月二十六日、「和寒越冬キャベツ」が特許庁に商標登録されました。秋に収穫したキャベツを畑に並べておいて、冬の間、雪の下になるようにします。このキャベツを掘り出し、ゆつくりと暖めるとみずみずしい新鮮なキャベツになるのです。越冬キャベツの始まりは一九六八年の冬から翌年の春にかけてです。当時、秋キャベツの豊作により価格が暴落し、採算が取れなくなつたことから出荷を諦め放置していたそうです。しかし、翌春、畑に放置されていたキャベツは青々として甘みが増しており、その後、ブランド化していったそうです。

自然の恵みにあふれている和寒町です。ぜひ、訪れていただきたいと思ひます。

## 三浦綾子発

### 旭川市文芸散歩道

旭川市・中央中

菅 藤 真由美

#### 【三浦綾子生誕一〇〇年】

JR旭川駅の東口を出て氷点橋を渡り、1kmほど進むと、住宅地の突き当たりにある「外国樹種見本林」の背の高いストロープ松が、私たちを迎えてくれる。夏の暑い日は、およそ六、〇〇〇本の樹木の間を時折吹き向けてくる風が、一服の清涼剤となる。

ストロープの松の影が、くつきりと地に濃く短かった。その影が生あるもののようにくろぐると不気味に息づいて見える。

#### 『氷点』

見本林入口のストロープ松に隠れるようにひっそりとたたずんでいるのが、「三浦綾子記念文学館」である。三浦綾子のデビュー作『氷点』の舞台となった

「外国樹種見本林に文学館を」という市民の願いが実現し、九八年に開館した。道外からの来館者も多く、遠方から毎年、訪れているという熱烈なファンもいる。先日出会った御婦人も、来年は、三浦文学初心



者の娘さんを誘って大阪から来る予定だという。コロナ禍で休館の間も、全国から再開を楽しみにしているといった手紙やメールが数多く寄せられたそうだ。

私も、年に一、二回訪れるが、その度に展示方法が工夫され、新鮮さを感じる。三浦綾子生誕一〇〇年の来年は、各地から多くの方が来館できる状況であってほしい。

#### 【小説を彩る藤田邸】

『氷点』の辻口邸のモデルとなったのが、旭川ゆかりの俳人、藤田旭山が住んでいた「藤田邸」である。

和洋折衷でペチカがあるこの家は、ドラマでも再現された。酒造会社を営んでいた旭山の父により昭和五年に立てられ、今年、旭川市の建築賞を受賞している。

雪虫の タぐれ 青し 旭川

個性と自由を尊重する俳句を目指した旭山の句碑は、旭山公園に建てられている。

#### 【世界を知る井上靖の誇り】

三浦綾子が朝日新聞の『氷点』の連載を終えた後、しばらくして同新聞の連載を作家、井上靖が担当している。井上靖も軍医である父の従軍により、旭川の師団官舎で生まれており、『幼き日のこと』の中で、次のように書いている。

私は物心がついてからずっと、自分が生まれた旭川という町にも、自分が生まれた五月という月にも、理由の定かでない誇りを感じ



ていた。

井上靖没後三〇年の今年、旭川市春光にある「井上靖記念館」に、東京・世田谷区の旧井上靖邸が移転され、国内外から多くの客人を招いた応接間や数々の名作が生まれた書斎が再現されている。そこには、小説を書くための様々な文献に加え、文化・芸術に造詣の深い井上靖が大切にしていた芸術品が置かれ、在りし日の文豪の生活に思いを馳せることができる。

また、隣接する「中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館」では、「彫刻絵本」展と題し、彫刻の造形性や面白さ、不思議さをオリジナルの物語と結び、芸術を身近に感じさせる展示を行っている。

#### 【旭川文学資料館、プラス美術館、博物館】

旭川ゆかりの作家や詩人・歌人は枚挙にいとまがない。両親が北海道開拓民で旭川に本籍がある阿部公房や『置かれた場所で咲きなさい』の渡辺和子も旭川出身である。また、旭川新聞社の記者だった詩人の小熊秀雄やアイヌ文学の知里幸恵などの足跡が常磐公園内の「文学資料館」で一度に見ることができ

る。好きな文芸、興味のある作品をきっかけに、目移りしながら気ままに散策することができるのが、旭川の魅力の一つである。



## 道南の交通の要衝、長万部町 〜北海道、ここが旅の始発駅〜

長万部町・長万部中

雨澤 啓司

札幌と函館のほぼ中間に位置する長万部町、古く江戸時代から交通の要衝として発展してきました。また、自然環境において、津軽海峡を本州と北海道の動植物分布の境界線とするブラキストン線 (Blakiston Line) は有名ですが、ここ長万部は南と北の植生境界として固有の自然環境を有しています。

二〇一六年三月二十六日にはJR北海道新幹線が津軽海峡を越え、新函館北斗駅が開業しました。長万部はそこからほぼ一時間、JR函館本線・室蘭本線の分岐始発駅です。そして今後、北海道新幹線の札幌延伸時には新幹線長万部駅となります。南から北へ、北から南へ、長万部は魅力尽きない旅の始発駅です。

長万部を知る人の中には、町のPRキャラクターの「まんべくん」の存在を御存じの方もいるのではないのでしょうか。二〇〇三年、

「長万部町開礎一三〇年 町制施行六〇年」の記念事業として行われたイメージキャラクターの公募で入選した作品が起



源。外見は長万部町の名産品であるカニ、ホタテ貝、アヤメを組み合わせたデザインになっています。「まんべくん」の誕生日は、二〇〇三年七月三十一日。週末のお昼前後に長万部駅に着く特急列車のお出迎えをする「お仕事」をしています。まんべくんのグッズも豊富で、ぬいぐるみ・キーホルダー・ストラップ・エコバッグ・Tシャツ・タオル・メモ帳・うちわ・クッキーなど、まだまだいろいろあります。是非、「まんべくん」に会いにきて、グッズもたくさん御購入ください。

ここ「長万部(おしやまんべ)」という特徴的な名前は全国的に有名です。この町名の由来は、諸説ありますが、

一説には、沿岸でカレイが豊富にとれるためアイヌの人々が「カレイの居るところ」という意味の「オ・シヤマンペ」と呼んでいたためという説もあります。



また、渡島山系の北端に位置する長万部では、噴火湾のパノラマを楽しむ軽登山には最適です。写万部山山頂には二等三角点が置かれ、標高は四九八・八mと高くはないが、噴火湾を見渡すその広大なパノラマ風景は素晴らしく、訪れた人々の心をつかむこと間違いありません。また、標高九七二・四mの長万部岳は、日本海側と太平洋側を分ける分水嶺となっており、両方の海を見渡せる貴重なスポットです。他にも「静狩海岸の鳴き砂」や海釣り溪流釣りの両方を楽しめる海や河川、絶景と奇

岩が人気の景観、「小幌海岸」、平地としては最南端の高層湿原の「静狩湿原」、パワースポットの「大峯のぶなの巨木」は樹齢三〇〇〜四〇〇年と推定され、幹まわりが約四mもあり、再北限のぶなの巨木とも言われています。

豊かな自然だけでなく、長万部のもう一つの顔は文化の香り豊かな文化施設群です。「平和記念館」には、反戦と平和を願う心が生んだ数々の美術工芸作品が展示されています。前庭の彫刻の庭では、北海道出身の世界的彫刻家・本郷新の作品が平和を祈る様子を見ることができます。「植木蒼悦記念館」では、北海道有数の水墨画家で、俳人もあつた植木蒼悦(本名・悦郎)は、「仙人」とも呼ばれた孤高貧窮の暮らしの中、自己表現を貫いた人物で、コレクター寄贈によるこの記念館には、作者の現在の生き方を投影したかのような独特の河童絵、油彩画、句書などおよそ一〇〇作品が展示されています。



長万部中学校は、昭和五十七年に町内四中学校(長万部・国縫・静狩・双葉)を統合して開校されました。かつては、四〇〇人を超える大規模校でしたが、現在は全校生徒九三人が在籍しています。幼・小・中・高・大の連携による教育活動の充実が図られ、地域の未来を創造する人づくりを推進しています。函館への道すがら是非お立ち寄りください。

# 新「〇〇の街、歌志内」を

## 目指して

歌志内市・歌志内学園

織田靖雄

歌志内市は、北海道のほぼ中央、石狩平野の東北端の山麓地帯に位置しており、面積の約七五%を占める緑あふれる山並みに囲まれている。この山岳地帯に源を発するペンケウタシユナイ川が東西に貫流し、この兩岸に続く約9kmの平坦地と斜面が歌志内市のたまたまみである。

歌志内市は、石炭産業によって栄え、戦後の経済を支えてきた。昭和二十三年には人口四万六、〇〇〇人余となり、山の斜面全体に住宅がひしめき合う光景もあった。しかし、日本のエネルギー政策の変換に伴い人口は炭鉱の閉山とともに減少の一途をたどり、平成七年に空知炭鉱が閉山したときには六、八〇〇人となり、現在は三、〇〇〇人を下回っている。



### 【スイスランド計画】

歌志内に来るとまず驚かされるのが街並みの綺麗さである。昭和六十年代にスイスランドの自然豊かな景観をイメージさせるような「トレーニングキャンプ歌志内スイスランド計画」を市が打ち出し、公共施設を中心にスイス風のデザインを取り入れた建物が多く建てられた。また、スキー場や宿泊施設の整備を行い全国的な競技スキーの大会を誘致するなど、「スキ一の街」としても名が知られるようになった。先の

平昌オリンピックでは、このかもい岳スキー場をホームとしていた石井智也選手が出場し、好成績をあげていた。しかし、昨今のスキー人口の減少の波に吞まれ、令和元年度は営業を取り止めたが、令和二年度には新たな経営者のもと営業再開を果たし、再び賑わいが戻ってきた。



一方で夏場のかもい岳は現在、雲海がきれいな場所としてロコミが広がり、寒暖差が大きくなる時機には早朝よりたくさんの方が訪れており、新たな観光名所となっている。

### 【歌志内なまはげ祭り】

炭鉱閉山が続き、街に活気が失われてい

く様子を感じていた市民の思いをヒントに、昭和六十二年から開催され、歴史は三〇年を超えた。秋田県男鹿半島に根付く伝統行事ではあるが、炭鉱で働いていた人に東北出身者が多くいたこともあり

秋田県男鹿との協力の下、始まった。毎年二月の第一日曜日に開催され、この日ばかりは会場が熱気に包まれ、「いやだ〜!」「もう悪いことはしません!」と泣き叫ぶ子供の声が行き交う。歌志内を離れた人もこの日をめぐって里帰りを行う人もいるという。



### 【ヴァインヤードの復活】

平坦地が少ない歌志内市では、新しい基幹産業を興すことは容易ではない。以前、歌志内で栽培されたブドウを使ったワインが商品化されたが、鹿による食害の頻発や栽培技術者の不在により、耕作放棄地となり平成二十二年を最後に「うたしないワイン」の名前は消えてしまった。平成二十九年、再び市が買い戻し、地域おこし協力隊員や市民の手で約六、〇〇〇本の苗が植えられ、年々収穫量が多くなってきており「うたしないワイン」が再び市場に並ぶのも、もうそこまで来ている。



## 歴史と文化を継承

### 「アイヌとともに歩む「まち」」

平取町・平取中

會 田 大 祐

日高地方の西部にあつて、やや三角形に似たまちの平取町は、丘陵が多く森林に囲まれ、地形効果もあいまって、四季を通じて温暖な降雪量の少ない、比較的、温かな地域になります。

基幹産業としては、水田、乳牛・肉牛、そして言わずと知れたトマトが有名なまちです。

また、道内においては、アイヌ文化拠点のまちの一つとしても広く知られ、学校教育の場だけでなく、地域をあげて文化伝承、後継者育成に向けた取組が進められています。

さて、私事ですが、平取町立平取中学校への勤務を命ぜられ、平取町にお世話になることが決まったときから、「この「まち」への強い縁を感じています。前職時代に、とある講習会でアイヌ文化について学ぶプログラムの講師を担っていたいた町在住の女性とその娘さん（今ではSNSを使い「アイヌ」を発信）との出会いや、オブザーバーとして、町の「高齢者フォーラム」に関わった経緯もあり、縁を感じて勤務させていただいています。

アイヌ文化拠点のまちである平取町、学校教育においては、小中学校ともに、アイヌ文化を体験し歴史を学ぶ機会として、前述した女性を中心にアイヌ文様を施した工芸品づくりを総合的な学習の一つとして体験させていただいております。今後は小中学校で系統的に文化・歴史を学ぶ機会にできればと考えているところです。この女性は、学校教育にも大きく関わっていたいておりますが、「アイヌ文化・歴史」について



の発信者としても活躍をされており、皆様には、「二風谷コタン内にある「二風谷アイヌ文化博物館」に来ていただき、「アイヌ」に関する貴重なお話を聞いていただければと思います。また、昨年から開館されている「民族共生象徴空間ウポポイ」にも平取町の「アイヌ工芸品」が多く展示されておりますが、直接、平取町の「二風谷アイヌ文化博物館」にも来ていただき、工芸品等の技術の高さを見るとともに価値ある「アイヌ文化・歴史」に触れる機会としていただければ幸いに思います。

**平取情報を少しだけ発信します！**

**【「セタプクサ号」で平取へ】**

アイヌ文化拠点交流促進バス「セタプクサ号」が「民族共生象徴空間ウポポイ」と平

取町二風谷地区にある「二風谷コタン」間を運行しております。ラッピングバスのデザインはアイヌ文様を描いたもの（デザインは町在住の工芸家）。もちろん「二風谷アイヌ文化博物館」は「二風谷コタン」内にありますので、「セタプクサ号」に乗りし「アイヌ文化」に触れに来てください。

**【「びらとりトマト」と「ニシパの恋人」】**

暑さと湿気が苦手なトマト。日高山脈を源とした清流、沙流川沿いに広がる平取町は、冷涼な気候でトマトの一大産地です。この土地で愛情たっぷりに育てられたトマトを味わいに来てみませんか。真っ赤に熟され、旬を閉じ込めたトマトジュース「ニシパの恋人」もおすすすめです。

**【生産者の思いが詰まった「びらとり和牛」】**

凍てつく寒さを乗り越え、肉の旨味が凝縮された牛肉「びらとり和牛」。今では、ブランドとなっているので、皆さんも一度は見聞きしたことがあるのではと思います。二風谷地区にある「びらとり温泉 ゆから」で提供していますので、平取探索に来た際には温泉に入つて、ゆっくり食してみてください。

**「アイヌ文化」「平取トマト・ニシパの恋人」**

「びらとり和牛」のみならず、まだまだ魅力のある平取町です。観光を視点とした街づくりにも取り組んでおり、「道の駅」構想も復活。これから更に発展していく「まち」平取町、機会があれば、是非足をお運びください。

## 知らぬかった！白糠町

白糠町・茶路中

小林 香織

白糠町は令和二年度に町制七〇周年を迎えた。町の歴史をひも解くと、一六三二年の白糠場所開設以降、約四〇〇年にわたる歴史ある町である。また、近年では「ふるさと納税」二年連続全国四位と、本町で生産される食材の豊富さが評価を受けている。本町の様子を歴史、産業、教育の側面からいくつか紹介する。

### 【八王子市・白糠町子供交流事業】

平成十一年より、白糠町は東京都八王子市と「八王子市・白糠町子供交流事業」を行っている。これは、江戸時代（一八〇〇年頃）に八王子に置かれた千人同心の組頭の一人、原半左衛門が幕府の命を受け、蝦夷地開拓とロシアに対する警備を任務として白糠に入植し、四年間の在任中に農耕や道路開削などに従事しながら海岸線の警備やアイヌの人たちとの関係構築を進めたという史実に基づき、八王子市との交流が始まった。

現在はコロナ禍のため、やむなく中止しているが、小学五・六年の児童が訪問と来町を隔年で交互に



行い、互いの自然環境に親しみ、交流を深めている。

### 【北海道石炭採掘創始の地】

白糠町は、北海道での石炭採掘最古の地である。一八五四年の神奈川県下田・北海道箱館の開港に伴い、寄港する外国船への燃料として石炭を供給することとなり、一八五八年に白糠シリエト岬（現石炭岬）に石炭採掘場を開設。その後、函館近くの岩内に炭鉱が開設されるまでの七年間、石炭採掘を行っていた。現在は、当時の石炭採掘場跡に碑が建てられている。



### 【町章と町が誇る五大産業と特産物】



外円は平和と団結を語り、円の星は白糠の白を図案化したものです。また、五角は白糠町のかつて五大産業といわれた、農業・林業・漁業・工業・畜産業の伸展を表しています。外円の結ばれるところは、白糠の「又」と「カ」をそれぞれ表しているとともに、北海道の「北」も意味しています。この町章は、昭和二十五年に町制が施行されたことを記念して制定されました。（白糠町ホームページより）

白糠町は海に面しており、ふるさと納税等でも海産物が人気を博していることから、海

の町と思われがちである。しかし、本町は海も山もあり、HPにもあるように農・林・漁・工・畜産の五大産業がある。漁業は言うまでもないが、農業では「鍛高譚」という紫蘇焼酎の紫蘇の栽培、畜産業では乳牛はもとより二〇〇八年の洞爺湖サミットの際には本町で生産された羊肉を提供、林業・工業では札幌ベニヤの本社機能が白糠工場に移管、釧白工業団地に国内最大級の大規模太陽光発電所など、質の高い物が生産され、地の利を活かした産業の振興が進められている。

### 【伝統芸能と白糠駒踊り】

白糠町のカントリースインにも描かれている「白糠駒踊り」は、一〇〇年の歴史ある白糠町の伝統芸能である。



ルーツは青森県の「南部駒踊り」「野馬追い」と言われているが、後継者の創意工夫により、白糠独特の駒や衣装を作成し、踊りも振り付け構成され、現在では白糠町の様々なイベントや上海・台湾等の親善公演も行っている。令和元年には一〇〇周年記念で、八王子市でも公演された。

### 【小中一貫教育の推進】

平成三十年度より、白糠、庶路、茶路の三地区それぞれの特徴を活かし、町内の全小中学校で小中一貫教育を推進している。また、現在「分離型一貫教育」を推進している白糠小・中が令和四年度から義務教育学校に生まれ変わり、三地区のうち二地区が義務教育学校になる。他に類を見ない全町あげての小中一貫教育を進めているところである。

# 鮭に笑い、鮭に泣いた

## 標津の人々の歴史と文化

標津町・標津中

飯田雄士

### 【プロローグ】

道外出身の私が初任教員として赴任した昭和六十三年、心地よく揺れるJR標津線に魅了された。その終着は標津駅であり、釧網線標茶駅と根室本線厚床駅へとつながっていたのである。平成元年に廃線となり三三年が経過した線路跡を歩くと、敷いていた碎石や鉄橋は残るものの、既に鬱蒼と草木が繁り、罷避け鈴の音に誘われるように、先人たちがどうこの原野を切り拓き、どんな心持で車窓からこの景色を眺めていたのだろうと、想いを馳せるのである。

### 【海・山・川の恵、鮭に支えられ二万年】

標津町には、激しく蛇行を繰り返しながら穏やかに流れるポー川がある。水は澄み、秀峰に抱かれた森が豊富な栄養素を含ませてくれる。流域には四、〇〇〇ものくぼみがあり、日本最大の



堅穴式住居跡（標津遺跡



群）を形成している。一万年前から十七世紀に至るまで、あらゆる時代の堅穴から大量の鮭の骨が見つかっており、チャシ（アイヌの柵囲い）跡群の位置から、多くの人が鮭を求めて標津へ往来していたことが分かる。

### 【幕末会津藩士が多文化共生で育てた産業】

江戸時代、根室海峡沿岸に進出した和人は、鮭の質と量の豊かさに驚き、漁場を拓く。しかし、当初の搾取的経営がアイヌの反感を買って騒動に発展したため、鮭漁を管理する「根室下会所（現標津神社）」が設置された。標津代官南摩綱紀は、文化の異なるアイヌと和人が共に開拓に臨む水産業のまちづくりを構想し、その思いを「標津番屋屏風」にこめた。当時の鮭は、徳川將軍家にも献上されるほどの高級魚とされ、高品質の鮭を基盤にまちの礎が築かれたのである。



### 【海・山・川から大平原へ】

明治時代に入ると、缶詰工場が増設され、世界市場にも輸出されるなど隆盛を極めることとなる。しかし、天然魚に頼ってきた鮭漁は、明治の半ばから資源が枯渇し始め、明治二十四年から人工ふ化事業をスタートさせたものの、その成果はなかなか得られなかった。鮭漁を補う新たな産業（副業）として、大正時代には仔馬の飼育を推奨。日清・日露

戦争をきっかけに高騰した馬は貴重な現金収入となり、牛の飼育も積極的に行われるようになった。その後、全国から集まった開拓者の手によって根釧台地内陸部に酪農が広がったのである。昭和十二年には国鉄標津線が全線開通して内陸開拓を牽引した。

### 【人と自然の共生に向けて】

長年取り組んできた鮭の人工ふ化事業も結実した。驚異的な漁獲量を更新し続けた昭和四十年頃には、東北地方からの季節労働者が標津線の車内にはあふれ、町の人口は約八、〇〇〇人（現在の一・六倍）となった。その後、秋鮭水揚げ量は平成初期に二万t近い数字を記録したが、平成二十年には六、〇〇〇tに激減。現在に至るまで不漁傾向が続いているものの、鮭以外の漁獲を増やし、ホタテを養殖し、「標津産」に付加価値を与えるなどして、自然環境の変化に対応している。

### 【エピローグ】

鮭に笑い、鮭に泣いた標津の人々の歴史と文化。鉄路こそもう無いが、どんな苦境に立たされようとも、理想を乗せて切り拓いた道程は、現在へとつながっている。森や海を、あらゆる生物を守り、持続可能な社会を創ることが「地球人」として最重要課題となっている今だからこそ、標津町の子供たちには、誇りをもって先人から学び、予測困難な変化を乗り越えていってほしい。今年度改訂した「社会科副読本しべつ」には、そんな願いがこめられている。



# 文芸

## 昭和五十年代に想いをはせる

石狩市・浜益中

水崎 理

現任校へは徒歩で、日本海に向かって通勤している。空気が澄んで、天候の良い日には、正面眼下に、積丹半島が一望できる。

過日、宿泊研修の引率に小樽市へ出向いた。バスでは二時間ほどを要する。国道が整備される以前は、小樽市との物流は海運が中心で、旅客定期船は、約二時間半で、当地とを結んでいたという。

札幌市北区から留萌市までを結ぶ国道二二二号線が全通したのは、昭和五十六年だという。浜益く増毛間、雄冬のトンネル工事を完了させて開通させたニュースは、かすかに記憶がある。小生が、高校生のときだ。四〇年も前のことだが、意外と近い過去のような気がする。地域の方からのお話や各種資料によると、そのトンネルの掘削作業や土砂の搬出には、やはり船が活躍したとのことである。当時、荒波も寄せるその硬い岩盤に挑んでトンネルを開通させた。今では容易に増毛に行けるようになってきている。それは、「オロンライン」として、小樽・札幌から稚内までの最短ルートともなり、国道二二二号・四〇号で旭川を経由するよりも六〇kmの短縮となったそうだ。

一方、鉄路に目を転ずると、かつては札幌と帯広方面の往来は、滝川を経由していた。国鉄時代の特急「おおぞら」は、函館く札幌く滝川く釧路の長旅であった。こちらも昭和五十六年に、トマムを経由する石勝線が開通し、所要時間の短縮をみた。

昭和、しかも五十年代。郷愁を誘われ、懐かしく思い出される。それは、自分が過ごした小学・中学・高校・大学時代が全て五十年代だからか？と考えるようになった。そしてそれは、楽しく、充実した時期を過ごさせてもらったためだと思う。かつて、便利で豊かな暮らしのために尽力された当時の方々の偉業に感謝するとともに、昭和五十年代の歌謡曲を口ずさみながら、今朝も日本海に向かって出勤する。

## 若手教員の育成に思う

岩内町・岩内第二中

本田 明美

今年の年賀状に、還暦を迎える年になったこと記して教え子らに出したところ、関東圏在住の教え子から「私の中の先生は、二七歳のままで」と返事が来て、うれしくもあり、恥ずかしくもあり、教員駆け出しの頃を思い出して複雑な気持ちになりました。三十年前ですから、正に若さと勢いだけでやっていたようなものです。教育者としての技量や信念も無いまま唯々無我夢中でした。自分のスタイルにあった先輩教員の見様見真似だったような記憶しかありません。そのスタイルとは、いわゆる「熱血教師型」で、自身の感情のまま拙い正義感を振りかざして怒鳴る、吠える……。今の時代ではとくに教壇から消え去っているような教員でした。今思い出しても、あまりの未熟さに穴があつたら入りたという気持ちになります。その頃は、校内暴力の嵐が吹き荒れる真ただ中で、返事をくれた子たちの卒業式には、私服警官が校内外に張り付いておりました。掲揚塔の国旗が何度か揚がったり降ろされたりする様子を不思議そうに観ている私服警官の姿が印象的でした。

私が教員として育ってきた環境は、懐深い上司や先輩、そして協働し励まし合う同僚に恵まれ、杯を交わしながら熱く教育を語り合い、失敗してもフオロークがあり、苦しく壁にぶつかったとしても、共に支え合ってきた若手教員たちは、同僚との深い関わりを敬遠し、利便性や効率の良さ。そんな技能・情報を中心に追い求めているような傾向を感じています。大体の若手教員は優秀な人材で、生徒や保護者とのコミュニケーションもそつなくこなし、授業や事務処理にICTを活用しながらスマートフォンや危うさには常に不安を感じてしまうところなんです。

時代の流れとともに教育環境も大きく変容をしています。当然、私が歩んできた教職の道のりを今の若手に伝えても全く意味がありません。特にコロナ禍という特殊な時代の中で、これからの教育を再構築していくためには、どうしても若い力が必要で、不透明な時代に一点の光を見いだし、子供たちの将来に夢や希望がもてるような教育ができるように残された時間を惜しみつつ、教員養成指標を踏まえながら組織的にOJTを活用した若手教員の育成に力を尽くしていきたいと思っています。

## 北海製罐第三倉庫

小樽市・銭函中

山崎徹也

小樽の運河沿いを散策してみると、竜宮橋の袂に一際大きな建造物を目にします。鉄筋コンクリート造地上四階建のこの建物は「北海製罐(株)小樽工場第三倉庫」です。北海製罐小樽工場は、北洋での鮭、鱒漁業からは始まり、カムチャツカへの缶の供給の原点として、小樽運河造成後の大正十年から昭和十年頃まで次々に建てられ、第三倉庫は大正十三年に建てられました。以来、缶詰事業を中心に小樽の街と、そして多くの企業とともに発展を遂げてきました。小樽ゆかりのプロレタリア作家であり「蟹工船」作者の小林多喜二の小説「工場細胞」の舞台となつているとも言われ、小樽市指定歴史的建造物に指定されています。

この第三倉庫には、室内に広い収納空間を確保するため、また、荷物を合理的に運搬するためにエレベータと「スパイラルシユート」と呼ばれる螺旋状の滑り台が使われ、階段は運河側の外壁にまとめて配置されています。運河側から見るそれは、独特の雰囲気を感じることができません。

小樽運河のシンボルともいえるこの倉庫は老朽化などを理由に同社により解体が決められていましたが、保存活用を目指す小樽市は一年間の猶予を申し入れ、令和三年十二月、倉庫を所有していた北海製罐(東京)から、土地・建物の無償譲渡と当面の保全費の寄附を受けました。今後、観光都市として、歴史的建造物や景観をいかに保存するべきかが問われています。

この倉庫には、別な意味での歴史があります。それは、ヒーローものテレビ番組の「仮面ライダー」第十九話『怪人カニバブラー北海道に現る』において、ショッカーの基地として登場しています。小樽運河クルーズでは、このことが紹介され、古き良き小樽を散策する旅行者に、又、別の意味での小樽を印象付けると言われています。

## 隔世の感

富良野市・富良野西中

中川季賢

授業を見て回ることは、校長の仕事でもあり、楽しみの一つでもある。特に今年度は、GIGAスクール構想の実現に向け、一人一台端末の試行的な取組が進められている。

本校の職員はどちらかというと若手が多い。そのため、「まずはやってみよう」という声かけには実に柔軟に対応する。端末を使って、調べ学習は勿論だが、録画やカメラ機能の活用、共有フォルダでお互いの作品の閲覧、指定フォルダへの課題の提出、アンケートや小テストの実施、音楽では作曲、英語ではQRコードを読み取って発音練習などICT機器の活用は一気に広がった。先日は生徒総会の議案書をタブレットに収め、ペーパーレスを実現していた。これもコロナの功罪と言えようか。振り返ると私の新卒時代はワープロ全盛の時代。パソコンはマイコンからの移行期で、四〇万円ほどと高価だったが、個人でパソコンに手が届くようになっていた。勿論ウィンドウズはなかったため、自分でプログラムを入力し、動かしていた。仕事で活用するにはワープロの足下にも及ばない。それでも数学の授業で、生徒に関数のグラフを見せたくて、何時間もかけてプログラムし、線が動いただけで感動したことは今でも忘れない。徐々に職員室にもパソコンが導入され、成績処理を行ったり、データで文書報告を行ったりするようになり、パソコンの普及とともに仕事量は増大し、提出期限も一気に短くなった。それでも当時のパソコンは遅かったので、作業をしながら休憩する時間はたっぷりあった。それからわずか三〇年で、生徒も文房具の一部として活用する時代になってきた。技術の進歩には驚くばかりである。

今年、定年延長の具体案が見えてきた。役職を解かれ、一般教諭として、授業をしながら子供たちとコミュニケーションを図ることは楽しみでもあり、健康的だ。しかし、果たして私もパソコンを道具のように駆使できるかと想像すると胃のあたりがちよつと痛み出す。

## 早朝の散歩

旭川市・神楽中

江口 貴彦

教諭時代とは違い、管理職になると、授業も部活動指導もなく、デスクワークと会議の日々です。スマートフォンの歩数計を見ると驚くほど歩いていない日も多々あります。健康のためにウォーキングやゴルフ、あるいはジムに通っている校長先生も多いかもしれません。私も、学校での動かない生活と車社会の恩恵にどっぷり浸かり、体重は増える一方で、健康に黄色信号が点灯しました。昔から走ることは苦手でしたが、子供の頃の遠距離通学が幸いし、歩くことには自信がありました。

そこで愛犬との早朝の散歩が始まりました。単身赴任生活が長かったため犬の散歩は、家族任せでした。年を取ると早起きは苦にならないもので、目覚ましが鳴るのを聞いたことがあります。生来ずぼらな性格なので、天気の良い日は、散歩には行かず、犬も歳のせいかな、そんなに散歩をせがむこともありません。

早朝の散歩は、空気の清涼感が何とも言えず、実に気持ちがいいものです。小さな花が一斉に咲き出したり、ある種類の花が終わると別の種類の花が咲きだしたり、鳥や虫の声が変わっていったりと、自然は本当に豊かで神秘的な世界を、五感に働き掛け味わわせてくれます。

また、早朝にも関わらず、すれ違う人の多さにも驚かされます。そのほとんどの方が「おはようございます」と挨拶を交わしてくれます。ますます清々しい気持ちになり、日本もまだ捨てたものじゃないと感じます。そんな学校とは少し違う世界から一日がスタートすると、普段と違う脳の部分が刺激され、新たな発想も生まれるような気がします。

おかげさまで、健康診断の数値は改善されたのですが、最近、散歩のパートナーがいなくなり、寂しい散歩となっていました。これからの散歩をどうしたものかと考えている今日この頃です。

## 「故郷」を想う

浜頓別町・浜頓別中

細谷 隆志

郡部の中学校で、子供たちのたくましく生きる姿と笑顔に囲まれながら、自分の中学生の頃を重ねてふと故郷を想うときがある。

私が生まれ育ったのは、かつて「黒ダイヤ」と呼ばれる良質な石炭を産出する「炭都・夕張」だった。物心ついたときは、すでに国のエネルギー政策の転換によって斜陽産業となっていた「炭鉱」であったが、それでも人口四十万人以上を有する町であった。けれど昭和五十六年、私が中学二年生のとき、北炭夕張新鉱の大規模なガス突出事故により一気に町が生氣を失った。あの事故の様子を忘れることはない。坑内火災を鎮火するために、安否不明者がいるにもかかわらず坑道内に注水を開始したときの衝撃、そして大きな犠牲者を出した事故は、町に深い傷跡を残して、町と大人と子供は荒れた。それでもそのときの先生方はそれこそ体を張って、昼夜を問わず子供のため、地域のために奔走してくれた。あの先生方の後ろ姿が強く目に焼きついている。

「夕張 苦うばり 坂ばかり ドカンとくれば 死ぬばかり」と地域に歌い継がれていた戯れ歌にあるように、私の故郷は元来決して明るいイメージのある町ではなかった。それでもあのささくれ立った町の雰囲気、荒れの中で共に過ごした仲間たち、私たちを決して見捨てなかった先生方の姿は、今でも心のうちに灯をともしている。

夕張市は平成十八年に財政再建団体になり、伴ってピーク時には二二校あった小学校、九校あった中学校がともに一校となり、市内に四校あった公立高校も一校になった。かつての仲間はほとんど町を去り、町には、子供たちの声も聴けなくなつたと聞く。

今預かっている子供たちの笑顔を自分がかつての先生方のように守ることができているのか、地域とともに在ることができているのか。子供たちの姿から自らの過去を映し出して、故郷とあのときの先生方を想う。

# NHKドラマ『ひきこもり先生』から学ぶ

初山別村・初山別中

嶋 本 佳世子

今年度の六月から七月にかけて、NHKで『ひきこもり先生』というドラマが放映されました。佐藤二朗さん演じる一年間ひきこもりを経験した非常勤講師、通称ひきこもり先生。ひきこもりから立ち直り切れていない主人公がいえない傷を抱えながら、様々な家庭環境にある子供たちと向き合うドラマ。制作に当たっては、現場の教員にもきつちりと取材されたとのことで、教員側の苦悩も丁寧に描かれていました。

学校の役割が多様化・複雑化し、ゆとりがなくなっている閉そく感が子供たちに伝わっているのか、不登校の増加傾向に歯止めがかかっていません。本校も例外ではなく、解決策を見いだせないまま、本人はもろん、関わりの深い大人たちは日々悩んでいます。

ひきこもり先生は、複雑な家庭環境にあつたり、経済的に苦しかったり、クラスの中に居場所がなかったりと、一筋縄では解決しない課題を抱えた子供たちと出会います。そして、一人一人に向き合い、寄り添い、解決策を模索します。その解決方法は決して格好の良い、スマートなものではなく、自分の弱さをさらけ出し、無様な格好そのままでもぶつかっていきます。その姿が、心を病んだり迷ったりしている人たちに安心感を与え、心を開かせ、心を動かすきっかけや原動力になっていくのです。

不登校の子や学校に行くことに不安を感じる子がいるのが現状です。学校や校長は公の場で経営方針を伝えるだけでなく、生きにくさや不安を抱えている生徒や家庭と向き合い、寄り添い、コミュニケーションを取っていく必要があります。組織や役職にとらわれることなく、弱さや悩みを共有し、一人の人間として、飾ることなく正面から子供たちや保護者と向き合うことが、解決への第一歩なのだ。ドラマ『ひきこもり先生』から教えられたような気がします。

# 世界の窓から日本を眺めて

せたな町・瀬棚中

米 田 昌

教職生活三六年目で初めての中学校勤務となる。それまでは小学校畑で仕事をしてきた。話題は、小学校勤務時の令和元年度、全連小事業である海外教育事情視察に参加させていただいたときのことである。

訪問先は、ニュージーランド(NZ)。日本やNZの教育の違いやそれぞれの良さを垣間見ることができた。その中で、強く印象に残ったのが、NZのナショナルカリキュラム(学習指導要領)であった。

特に、「English」(日本の「国語科」)の記述の仕方である。日本の「国語科」の指導内容は、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」(話すこと・聞くこと)、「書くこと」、「読むこと」と整理されている。一方、NZでは「Listening, Reading, and Viewing」、「Speaking, Writing, and Presenting」と整理されていた。私は、二つの関心をもった。第一に、「Viewing」があるということだ。日本人はとても感性豊かな人種と言われ、「見る」という行為は当たり前と捉えているのかもしれない。しかし、認知する情報の約八割を視覚から得るとされることを考えると、日本でも「見る」ことを位置づける必要性はあるのではと考えさせられた。もう一つは、「INPUTとOUTPUTの関係がシンプルに整理されていることだ。実は、更に驚いたことがある。「English」の指導内容を見てみるとINPUTとOUTPUT両者ともに「Processes and strategies」、「Purposes and audiences」等、同じ項目で指導内容が書かれていた。何のためにINPUTするのか、INPUTしたものをどうOUTPUTするのかというINPUTとOUTPUTの相関がとても分かりやすく表記されているのである。このINPUT・OUTPUTの視点で日本の国語科の学習指導要領に目を通すと、日本でもやはりその相関が図られている。しかし、個人的には、もう少しシンプルで分かりやすい表記を期待するところである。

本視察事業に参加し、世界の窓から日本を眺めることにより、沢山の新たな気付きが生まれた。貴重な経験をさせていただいたことに感謝する。

## 郷土の誇り

福島町・福島中

柴野 貴史

平成六年に二校目の勤務地として、福島の地を訪れてから二七年後、再び福島中学校に勤務するとは夢にも思いませんでした。振り返っても教えた子たちの姿がおぼろげな記憶となるほどの歳月が流れました。

当時は、部活動と生徒指導の対応で精一杯であり、町内の歴史や文化等と接する余裕ありませんでした。その中でもはつきりと記憶にあるのは、今も体育館の壁面に設置している大相撲の大きな優勝額、そこに描かれている「千代の山」と「千代の富士」の雄姿でありました。

千代の山は、第四一代横綱、北海道出身の横綱第一号であります。福島町が「横綱の里」と呼ばれるようになったのは、千代の山の活躍があったからだそうです。引退後、九重親方となり、千代の富士をスカウトし、力士として育てた人物でもあります。

そして、千代の富士は、第五八代横綱、力士として初めて「国民栄誉賞」にも輝いた昭和最後の横綱であり、当時だれもやったことがない通算一、〇〇〇勝の記録を達成しました。福島町の偉大なヒーローです。

また、当時は全く知る由もありませんでしたが、世界で初めて津軽海峡を一人で泳いで渡った人物が、福島町出身の「中島 正二」さんです。子供ころにあこがれた海に向こう岸への夢をかなえた後も、世界の海を舞台に海洋冒険家として活躍されたそうです。

さらに、日本地図の測量を行った「伊能忠敬」が、最初に降り立った地が福島町吉岡であります。この地から日本地図づくりの第一歩を踏み出されたという歴史も知ることができました。今では、その偉業をたたえる銅像が、最初の上陸地である吉岡川近くに建立されておりあります。

この他にも紙面に書き切れない先人たちが刻んできた歴史、文化等が福島町にたくさんあることが分かりました。今後も生徒たちが郷土に誇りをもって社会にはばたけるよう、地域学習にも力を入れていきたいと決意もあらたにしたところです。

## 道草力

函館市・亀田中

吉田 敬三

前任の小学校で出会った日々の子供たちを見ていて気付いたのだが、誰一人まともに歩いていない。スキップしながら、万歳をしながら、くるくる回りながら、素っ頓狂な声を漏らしながら：など。歩行に「無駄」な動きが伴っている。これが中学校になると生徒は普通に歩いている。小学生の「無駄」な「ノイズ」が削除され「キチンとした」中学生としてデータ化されるわけである。が、ここで考察をしてみる。幼い子供が見せる無駄な動きは本当に無駄なのだろうか？ と。

デジタル化が進み、人は不連続且つ明確な数値をほしがらる。必要なデータからはノイズがどんどん削除されるのが当たり前になりつつある。けれども、ノイズだらけの子供の姿にこそ、実は連続的なアナログとしての人間の本質が潜んでいるのではないかと感じる。私にとつては、そうした人間のもつノイズとは感受性のアンテナなのではないかと思うのである。体を動かすのは欲求などの内面によるのだろうか、明確な意思とは別に、人は得体の知れない何かに突き動かされるときがある。自身を振り返っても、今思えば「無駄」な行動を随分とってきたように思う。けれども、そんな道草で掬い取られ、心に残っている見聞などが、後に自分の細胞に『生きて働くデータ』としてインプットされる。そんな繰り返しだが、いつしか自分の『味』になるのだろう。

世の中の変わり方も尋常ではなくなってきた。昭和生まれの私たちが描く立身自立モデルも急速に雲散霧消し始めた。結局、生身の人間が豊かに生きていく可能性は個々の「ノイズ」にこそあるのだと思う。そう考えると『自力で』道草を喰う力も大切なのではなからうかと、道草を喰う暇もなく走り続けてきた今、私は感じている。



## 校史の幕を閉じ、未来へ

滝川市・江部乙中

鳥谷部 賢 太

歴代校長が職員・保護者・地域の方々と手を携え、伝統と校風を築いてきた江部乙中学校が、今年度をもって校史を閉じることとなりました。

本校は、江部乙町立北辰中学校と江部乙町立東陽中学校が統合し、江部乙町立江部乙中学校として昭和四十四年四月一日に開校しました。その後、昭和四十五年十一月一日に旧校舎が完成し、北辰分教室と東陽分教室の両校生徒が旧江部乙中学校校舎に入校したことで統合が完成しました。さらに、昭和四十六年四月一日には、滝川市と江部乙町の二市町が合併し、校名も現在と同じ、滝川市立江部乙中学校となりました。平成十三年四月一日には、今の所在地である旧滝川北高等学校の校舎へ移転しました。このように、長い歴史と伝統の中で恵まれた環境が整えられ、地域のよりどころとしての役目も果たしてきました。卒業生も三、五五八人が本校を巣立ち、国内外で目覚ましい活躍をしております。

本校の特色ある教育として、一年生では江部乙の特産品などを学び、二年生になると宿泊学習の中で、生徒たち自身が江部乙観光大使として札幌地下街で江部乙の物品販売を体験し、故郷への理解と愛着を深めてきました。親・子・孫と三代にわたって母校となった家庭も数多くあり、正に地域とともに歩んだ学校であったと確信しております。

近年は、コロナ禍により体育大会や学校祭などの各種行事では、参観者に人数制限をするなど規模を縮小しての実施となりました。本年十月三十日に挙行しました閉校式も例外ではなく、御来賓の皆様を最小限に限定し、参加してくださった保護者も各家庭一人までという状況でした。思い出を語り合う惜別の会も実施できなかったことが少し残念です。

現在在籍している一・二年生は、令和四年四月一日から統合先である滝川市立江陵中学校の生徒となります。江部乙中学校の思い出を胸に、新天地で頑張ってくれることを期待しています。

## 世代交代・時代交代

伊達市・大滝徳舜警学校

横山 康彦

平成四年三月三十一日。私の父は、中学校長としての職務を終え、教職生活を後にした。そして、その翌日の四月一日、入れ替わるように私は初任段階教員として、中学校の教壇に立った。教職への志を固めたのは、父の影響が大きかったことは否定できない。父の初任校は、旧大滝村の大滝中学校。そこで、当時、教え子だった母と結婚。兄と私の二人の子供を授かり、二人とも教職の道を選んだ。幼い頃、毎日のように、父の同僚が遊びに来て麻雀卓を囲みながら、教え子たちの話題で花が咲いていた。父と一緒に、どこかへ遊びに行った記憶はないが、恵まれない家庭の教え子を父はよく遊びに連れて行くことがあった。だが、子供心に、嫉妬心みたいな感情は生まれなかったのはなぜだろう。「教師という仕事は楽しいぞ！お前も教師になれ！」が父の口癖だった。教師という仕事を天職として、現場を満喫していたにちがいない。退職後も、随分と昔の武勇伝を聞かされた。そのときの父は、いつも誇らしげな笑顔と満足感で一杯である。今は認知症を患い、グループホームでお世話になっている父。昔の威勢のよかった姿は、かけらも見えないが、今でも時折、施設の職員に対して、教員口調で振る舞うそうである。

令和三年四月一日。私は校長として採用され、現任校に着任した。父の初任校である旧大滝中学校から統合された義務教育学校大滝徳舜警学校である。「教職員同士のハラスメント」「過労死ラインの時間外勤務」「モンスター・ペアレント対応」「教師の仕事はブラック」最近、よく耳にする言葉である。随分と世の中の認識が変わったと感じるのは私だけだろうか。一日も早く、教師が魅力ある職業として、世間に認知されることを願わずにはいられない。私には、大学四年生の息子がいる。今の私に、過去の父のように「教師という仕事は楽しいぞ！お前も教師になれ！」と自信をもって話せるだろうか？

## 廃線後に残る僅かな痕跡と大きな存在感

新ひだか町・静内中

神 成 浩

令和三年四月一日に、運休中であつた日高本線の大部分が正式に廃線となつた。これにより日高管内の地図から鉄道が消えた。道内ではJR（旧国鉄）の廃線は特に珍しいことではなく、最近では令和三年の札沼線の一部、平成三十一年の石勝線夕張支線が廃線となつたことをはじめ、留萌本線のように数年後の廃止を表明している路線もある。

数年前的ある土曜日、日高本線運休中に運行していた列車代行バスに乗つた。自分が浦河駅から乗つた時点で乗客は〇人。終点の静内駅では十数人とはなつていたものの、休日とは言え民間企業として採算の取れる人数とならないのは容易に理解できた。自分はこの路線が廃線になつたことに対する残念さはあれど、憤りは微塵も感じていない。かつては中心地域を結んでいた江差線や池北線、全国的に有名な広尾線、士幌線など、多くの路線が採算を理由に廃止されたことについても仕方がないことと捉えている。

先日、津別町の「道の駅あいおい」に立ち寄ることがあつた。ここには昭和六十年に廃線となつた相生線の北見相生駅が現在も保存されており、訪れる人も少なくない。かつての鉄道駅は、道の駅などになつて観光地化されている例は多い。現存する鉄道に魅力を感じる人がいるのと同時に廃線や廃駅に魅力を感じる人がいるのも事実である。たとえレールが外されようと、駅舎が撤去されていようと、そこには多かれ少なかれ痕跡が残る。それがかつての存在感を感じさせ、列車が走らなくなつてから数十年経つても、人々を惹きつける魅力となつていると考えられる。

廃止になつた日高本線のレールはまだ撤去されていない。いずれは僅かな痕跡を残して我々の前から姿を消すことになるだろう。この日高本線の痕跡も、数十年経つても大きな存在感を纏い、人々を惹きつけていくのだろうか。「これは昔鉄道が通つていた跡だ」と言われながら。

## 全日中静岡大会に参加して

新得町・富村牛小中

石 丸 揚 一 朗

全日中静岡大会にリモートで参加させていただきました。

全体協議も分科会も勉強になりましたし、アトラクションの吹奏楽の演奏にもたいへん感動しました。

特にその中でも印象に残つたのは、池谷裕二東京大学薬学部教授の記念講演「学習、成長——未来の脳を考える」です。講演もたいへん興味深く拝聴させていただきましたが、最後に池谷先生がお話された「知・好・楽」（これを知る者は、これを好む者に如かず、これを好む者は、これを楽しむ者に如かず）が、「私は仕事を楽しんでるだろうか」とふと我に返るきっかけとなりました。

思い返すと、仕事が楽しいとき、この仕事が改めて好きだと思ふこともあれば、苦しい、つらいと思ふこともありました。楽しいと思つた中には、成功したときだけでなく、うまくいかなかったときにもありました。その原因をつきとめ、今度はどうやったら成功するだろうと、職員と改善策を検討しているときには、むしろ一回で成功したときよりも楽しいと思つたかもしれません。特に最近では、コロナ禍の中、感染対策を行いながらどのように授業や行事を行っていくか等々、職員と一丸となつて学びを止めない、そして、少しでも子供たちが笑顔になるよう考えているときは、「知・好・楽」とは少し違いますが、大変でありながらも、やりがいをととても感じていました。

先が見えない課題にぶつかったときや、解決策が全く思いつかないときに「こういふふうになりたい！」と「こういふゴールを目指したい」と思つていられることにも気が付きました。池谷先生のお話が、組織も個人も、明確なビジョンをもつこと、共有することの大切さを見つめ直すきっかけとなりました。

## カリキュラム・マネジメントを推進する

帯広市・清川中

櫻井 知克士

今年度の研究テーマは「カリキュラム・マネジメントの推進」。研究の視点は①教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていく教育課程の編成・実施 ②教育課程の実施状況を評価し、その改善を図るための学校評価の開発 というものであった。

私は、今回、帯広市校長会において、このことについての提言者としての御指名をいただいた。さて、カリキュラム・マネジメントを推進することは、今の学校では当たり前のことで、校長は推進のリーダーシップをとり学校経営を進めていかなければならない。そんなことを心の中でつぶやきながら、いざ、提言に向けての作業を進めようとするとき先が見えない。そうだ、私はあまり解っていない。今から、カリキュラム・マネジメントを学校で推進するとはどのようなことなのか、教科等横断的な視点で組み立てていく教育課程とはどのようなものかをあらためて勉強しようと考えた。まずは、各種文献やカリキュラム・マネジメントに関する研修会等の資料をひもとき、私の中でこれまで点として存在していたカリキュラム・マネジメントの知識を線でつなぐことに徹してみた。日に日に、自分自身の理解が深まっていくと、実際にやってみてみるもの、学習指導要領を基に自校の目指す生徒像に合わせた知・徳・体それぞれに目標を設定してみた。設定するときは育成を目指す資質・能力三本の柱に沿って、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等、それぞれに目標を立てた。そうすると、本校の課題が何となくではなく、根拠に基づいて見えてきた。また、根拠に裏付けされることで、取組につなげられそうな気がしてきた。

しかし、大事なことは私が理解することではない。いかに、教職員全員が理解し、学校全体で推進するか、ということである。さて、次はそれだ。教職員にどんな仕掛けで、どんなイメージをもってもらうか、教頭の負担は少なく、全ての教科、全ての教育活動を通して、保護者・地域とともに、子供たち一人一人の豊かな学びの推進に挑む。

## 大人の自由研究に挑戦！

厚岸町・真龍中

佐藤 敬喜

北海道の名付け親である、松浦武四郎のふるさと三重県松阪市を訪ねて以来、毎年、七月十七日の『北海道みんなの日（道みんなの日）』に併せ、校内に展示コーナーを作り、児童・生徒に北海道に縁の深い人々の功績を紹介する取組をしてきた。展示する人たちの顔ぶれはその年によつて違うのだが、松浦武四郎だけはコーナーの一番目立つ位置で必ず紹介するのが私のこだわりである。今年も展示に工夫を凝らし自己満足に浸ったのだが、『道みんなの日』が過ぎるとともに撤収しなければならぬのがルールであり、校長室の廊下壁面が寂しくなった。

寂しさを紛らわす訳ではないのだが、撤収してすぐに来年の提示の準備を始めることとした。特に、武四郎を詳しく紹介する写真を収集するための大人の自由研究『松浦武四郎の碑を巡るツアー』の敢行である。釧路管内には武四郎に関する石碑や歌碑が四〇五か所に渡って点在しているので、リフレッシュを兼ねて訪ねることにしたのであった。

まずは浜中町の湯沸岬（きりたつ岬）。駐車場から徒歩で岬の突端まで進み石碑を見付けた。次は、釧路市の幣舞公園。石碑ではなく、蝦夷地探索を行っている武四郎とお供のアイヌの石像である。日を改め、温泉で有名な阿寒湖へ。湖畔で漢詩（七言絶句）の歌碑と、雌阿寒岳登山口入り口側の歌碑の写真をゲット。その後、阿寒横断道路を通り、屈斜路湖まで足を伸ばし、湖畔のアイヌ民俗資料館前庭の歌碑を撮影し、すぐ側の池の湯付近にあるはずの歌碑を探した。なかなか見つからずに、ヒグマに怯えながら数軒ある閉鎖されたホテルや旅館の裏側の林の中まで進んで、やつとお目当ての石碑を見付けることができた。ヤブ蚊に刺され、草ですれて血の滲む腕をさすりながら、最後の写真撮影が完了。

総距離が三五〇km以上、撮った写真が七五枚。大変だったが、実に充実した自由研究を行うことができ大満足な夏休みとなった。

## スピードスケートを通して

釧路市・美原中

佐藤 英樹

私がスピードスケートと関わりをもつようになったのは小学三年生のときでした。その時代（昭和四十七年）は、小学校での冬季授業では校庭に作られたリンクで行っていました。釧路市ではパイピングリンクと呼ばれる屋外公認スピードスケートリンクができたのは昭和四十八年でした。

小学三年生のときには、さほど得意ではなく、いたって普通、普通よりやや劣るスケート技術でした。そこで親父に「裏に住む〇〇ちゃんや、あんなにスイスイと滑っているのに、お前は悔しくないのか？」と言われたのです。今思うとそこで、負けん気に火が付いたのでしょうか。

その日から、毎日放課後に一人で学校のリンクで練習しました。翌年には釧路市柳町スピードスケートリンクが建設され、立派な四〇〇mリンクで毎日練習することができるようになりました。その頃の釧路市は各小学校にスピードスケート少年団があり、上から見ると人の多さで、スケートリンクが真つ黒くなる程の小学生のスケーターがいました。

私は、小学三年時の練習の成果もあり、裏に住む女兒よりもスケートが速く滑れるようになり、釧路市の小学校大会でも常に優勝を争うまで上達していきました。その後、釧路市内の中学校で夏からスピードスケート部に入り陸上トレーニング、冬は氷上トレーニングに明け暮れ、中学三年時には全道中体連大会で優勝することができました。

その後、高校でもスピードスケートを続け、大学もスピードスケートの名門校「日本体育大学」に入学することができ、全日本の大会にも出場しました。大学卒業後、教員となつてからは勤務する学校でスピードスケート部監督、そして地域スケート少年団のコーチもして、チームから数名の全国中体連大会優勝者を輩出することができました。その指導しているときには、日本中学校体育連盟スケート競技部長・北海道中体連スケート専門委員長、そして韓国やカナダにも遠征に行かせていただきました。様々な経験ができ、現在校長としての自分の原点はスピードスケートであつたと懐かしさとともに思っています。

## すごいぞ！羅臼

羅臼町・知床未来中

滝 泰英

世界自然遺産「知床」のまち、羅臼町に勤務して二年目になった。羅臼町に住んですぐの昨年五月、教員住宅の玄関先でタバコを吸おうと外に出た。頭のすぐ上で低い霧笛のような声が何度も響いた。「いる！シマフクロウがいる！」胸を躍らせタバコを吸った。

学校の玄関先に、ある団体からいただいた花一杯のプランターが並べられた。昨年は一か月もたずに花は無残にシカやキツネに食べられた。しかし、今年は八月中旬までプランターには見事な花が並んだ。シカやキツネが現れなかったのだ。「ヒグマのおいがすると、シカやキツネは近寄ってこない」と聞いたことがあった。「いる！ヒグマが近くにいます！」実際に、今年六月、学校の近くで目撃情報があり、九月には親子グマが二頭、学校のすぐ裏で駆除された。

羅臼町ではESD持続可能な開発のための教育を重視している。そこで、本校では総合的な学習の時間において「知床学」を実施している。昆布学習では、多くの生徒が毎年昆布干しを手伝っているが、イタリヤやフランスのシェフたちがほしがるほどの昆布であることに生徒たちは驚いていた。また、知床財団がクマ学習をやってくれる。知床財団の皆さんのほとんどが、知床の魅力に惹かれ、本州から羅臼町にやってきたことには生徒たちはピンときていない。私自身、学生時代、羅臼のヒカリゴケが見たくて、マツカウス洞窟に見に来たことがある。生徒たちには「なんかヒカリゴケって看板あるよね」という程度だった。その他、クルージング体験学習では、目の前でダイブするマッコウクジラに感動した。

こんな町は他にない。近年、羅臼町には、「漁業不振」「人口減」など暗いイメージがある。しかし、生徒たちには、知床学で羅臼を知り、「こんなすごいところに自分たちはいるんだ！」と、羅臼に誇りをもたせたい。

ぜひ、羅臼町へお越しを。

## お隣の国

清里町・清里中

畠山 稔

「アイ・ハブ・トウ・ネイムズ」流ちような英語で話す老運転手のこの言葉は、今でも私の耳に強烈に残っている。

コロナ禍になる前年、初めてお隣の国、韓国を訪れた。日本語はもちろん英語も通じる場所が少なく、海外旅行ならではの困り感を楽しみながらの旅であった。そんな中、タクシーに乗った。かなり高齢に見える運転手は、驚くほど流ちょうな英語を話した。年齢を聞くと七八歳、私の父と同じである。老運転手は、私が日本人だと分かる英語でこう言った。「私には二つ名前があります。そのうちの一つは『きむら・まさお』です」父の幼少期が太平洋戦争中だったことを知っていた私は、すぐにその言葉の意味を理解した。と同時に、歴史の重みを感じた。

次の年、コロナ禍で「ステイ・ホーム」が推奨され、『愛の不時着』をきっかけに韓国ドラマにはまる人が増えた。まさか自分もその一人になるとは。いや、正確に言う韓国文化にはまったと言える。目上の人への礼儀正しさは日本人以上である。また、会話の中で、敬語やため口といったことが話題にされることもある。言語を教えたきた人間としては、興味をそそられる。

今年度、学校の重点教育目標のキーワードを「チャレンジ」とした。生徒や先生方に、失敗を恐れずチャレンジすることを推奨している。そんな中、自分も新たなことにチャレンジしようと、NHKのテキストを購入して韓国語の勉強を始めた。ノートに一日一ページの学習を自分に課すことで、家庭学習の取組を生徒目線で見つめることができた。家庭学習の目的は？学力向上のためか？主体的に学ぶ力を培うためか？先生方にも投げかけ、教務主任が動き出した。

お隣の国なのに、韓国にこれまで興味を示さなかった私である。しかし、コロナが終息し海外旅行が解禁になったら、まず韓国に行きたい。

## 目を奪われる

札幌市・澄川中

横道 幸紀

購入してから二四年がたつ我が家のテレビが壊れた。調べてみるとテレビの平均寿命は一〇年ほどとあるから、長寿の部類だったようだ。早速新しいテレビを通信販売で購入したが、到着するのが二週間後の土曜日となった。もう一台小型のテレビはあるが、今後このような機会はありません。と考えると、テレビ抜きで二週間を過ごすと思えばいい。

ニュースや天気予報、また災害などの情報を聴くため、ラジオは認めることにした。毎朝起きてすぐにラジオのスイッチを入れる。いくつか放送局を試したが、CMがなく情報量が他よりも多いという点で、朝はNHKを流すことにした。六時三〇分になると、明るい音楽と元気な声で「ラジオ体操」の開始が告げられる。朝は忙しく、体操をする暇はないが、元気がいい気分になる。帰宅してからは野球中継や音楽番組など自分の聴きたいものを選んでダイヤルを合わせた。初めの頃はテレビのリモコンのスイッチを入れてから、そういうえば壊れていたのだと気付くこともあったが、二、三日もすると、そういうこともなくなり、テレビなしの生活が快適に感じられてきた。

その要因を考えてみたが、一つには「目が見える」ということがあげられる。テレビを見ながら本は読めないが、ラジオならそれが可能である。読まずに積んであった本に手を伸ばし、読書の秋を満喫することができた。また、「想像力が高まる」こともあげられる。例えばテレビドラマでは全ての場面が視覚情報として提供されるが、ラジオドラマは聴きながら自分の頭の中であれこれと場面を想像して作り上げる。音声情報と文字情報の違いはあるが、この作業は読書とも共通したものである。そのように自己分析しながらラジオとの快適な二週間が過ぎていった。

二週間後、新しいテレビが届いた。一四年間で進化したテレビの美しい画面に、結局のところ「目を奪われて」しまっている状況である。

# 令和3年度 一般会計予算

## 収入の部

(単位：円)

科 目	令和2年度		令和3年度 予算額	予算額比較		備 考
	予算額	決算額		増	減	
1. 会費収入	29,673,000	29,673,000	35,316,000	5,643,000		単置校5,400円×524校×12か月=33,955,200 併置校2,700円×42校×12か月=1,360,800
2. 繰越金	544,969	544,969	4,054,331	3,509,362		
3. 雑収入・特別会計	0	10,081	0		0	銀行利息
計	30,217,969	30,228,050	39,370,331	9,152,362		

## 支出の部

科 目	令和2年度		令和3年度 予算額	予算額比較		備 考
	予算額	決算額		増	減	
研究大会費	5,566,000	5,016,000	11,391,000	5,825,000		
1. 大会運営費	350,000	350,000	3,000,000	2,650,000		研究大会実行委員会による大会運営費(担当地区決算)
2. 研究活動費	4,666,000	4,666,000	4,091,000		575,000	各地区の研究活動補助費(2,000円×469校)+札幌3,153,000
3. 旅 費	550,000	0	4,300,000	3,750,000		役員・理事・司会・提言・全道研講師等旅費
研究調査費	1,690,000	1,235,826	1,850,000	160,000		
1. 旅 費	1,240,000	810,500	1,400,000	160,000		ブロック研修費、地区教育経営研究会、地区交流等旅費
2. 印刷製本費	297,000	277,420	297,000			学校経営の資料
3. 通信運搬費	53,000	47,906	53,000			上記送料
4. 賃 金	100,000	100,000	100,000			調査アンケート作成等筆耕料
研究物刊行費	2,700,000	2,060,149	2,100,000		600,000	
1. 印刷製本費	2,220,000	1,746,869	1,800,000		420,000	道中だより、全道中、法制研集録、実態/調査報告書、研究紀要
2. 通信運搬費	480,000	313,280	300,000		180,000	上記送料
事務局費	20,261,969	17,861,744	24,029,331	3,767,362		
1. 借 損 料	3,130,000	2,976,580	3,240,000	110,000		事務所賃貸料、会議会場費、機器リース料、車借上げ料等
2. 給料・手当	5,270,000	5,268,880	5,270,000			専任職員給与、手当
3. 退職・社保	1,100,000	1,111,083	1,136,000	36,000		社会保険料、雇用保険料、退職積立金
4. 備 品 費	0	28,590	0			事務所備品
5. 印刷製本費	810,000	806,965	810,000			総会要項、運営要綱、感謝状、要望書、提言書、役員名刺等
6. 通信運搬費	672,000	608,795	640,000		32,000	電話代、郵券、託送料、振込料金
7. 消耗品費	440,000	392,339	400,000		40,000	用紙代、封筒、購読料、プリントナーインク、その他事務用品
8. 慶 弔 費	90,000	114,362	90,000			退職・退会役員記念品、祝電、香典、供花
9. 賃 金	200,000	200,000	200,000			筆耕料、印刷賃金
10. 渉 外 費	620,000	199,606	800,000	180,000		関係機関総会・研究大会参加費、外郭団体会議、広告料、食糧費
11. 負 担 金	4,220,000	4,177,630	4,220,000			全日中会費、交通安全協会、旧北方圏、社明運動、道P連他
12. 旅 費	3,300,000	1,765,960	6,500,000	3,200,000		総会、理事研修会、事務局研修会、全日中総会・研究協議会
13. 送 金 費	80,000	80,000	80,000			会費等地区からの送金手数料補助費(各地区4,000円)
14. 雑 費	29,969	14,354	43,331	13,362		会議用お茶代、両替料他
15. 予 備 費	300,000	116,600	600,000	300,000		
計	30,217,969	26,173,719	39,370,331	9,152,362		

## 令和3年度 北海道中学校長会役員・理事

会 長	三浦 利章 (千歳市 千歳中) 0123-23-3161	副 会 長	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック	
			三浦 利章 (千歳市 千歳中)	藤田 淳 (猿払村 拓心中)	榎山 聡 (七飯町 大沼岳陽学校)	盛永 明寿 (浦河町 浦河第一中)	水野 秀哲 (釧路町 富原中)	◎木村 佳子 (札幌市中央中) 011-241-6266 直211-6254	
事 務 局 長	越田 公美 (札幌市 東月寒中) 011-853-1520 直853-0299	事 務 局 次 長	笹川 恒春 (札幌市 北栄中) 011-731-0264	事 務 局 次 長	野崎 均 (登別市 緑陽中) 0143-85-5409	会 計 理 事	村上 俊一 (小樽市 向陽中) 0134-23-8158		
運 営 委 員 長	小川 厚志 (札幌市 北野中)	運 営 委 員	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック	
			五十嵐邦春 (寿都町 寿都中)	工藤 亘 (旭川市 明星中)	玉置 英樹 (厚沢部町 厚沢部中)	太田 智子 (美唄市 美唄中)	喜多 敦 (幕別町 幕別中)	小川 厚志 (札幌市 北野中)	
部	副会長 (事務局)	部 長	部 員			副部長	幹 事		
経 営	盛永 明寿 (浦河町 浦河第一中)	三浦 崇史 (江別市 大麻東中)	大場 八仁 (鷹栖町 鷹栖中)	木村 雅彦 (函館市 五稜郭中)	小嶋 範彦 (新ひだか町 静内第三中)	加藤 秀典 (石狩市 花川北中)	畠山 学 (江別市 江別第三中)	小森 享 (北広島市 西部中)	
			野崎 均 (登別市 緑陽中)	垣内 孝仁 (網走市 第二中)					
研 修	水野 秀哲 (釧路町 富原中)	小澤 保範 (札幌市 北辰中)	藪 智樹 (余市町 東中)	林 欽一 (旭川市 神居中)	石川 宏司 (森町 森中)	三浦 英悟 (札幌市 東白石中)	吉本 将樹 (札幌市 稲積中)	田丸 明史 (札幌市 手稲西中)	
			笹川 恒春 (札幌市 北栄中)	富樫 孝行 (赤平市 赤平中)	佐藤 毅 (白糠町 白糠中)				
対 策	藤田 淳 (猿払村 拓心中)	長江 教貴 (大樹町 大樹中)	岡本 清豪 (小樽市 北陵中)	藤田 智哉 (増毛町 増毛中)	福井 順一 (江差町 江差中)	河村 克也 (滝川市 江陵中)	坂本 征人 (妹背牛町 妹背牛中)	森田 聖吾 (旭川市 北星中)	
			村上 俊一 (小樽市 向陽中)	伊藤 晃一 (釧路市 共栄中)	能登 貴英 (帯広市 帯広第一中)				
情 報	榎山 聡 (七飯町 大沼岳陽学校)	洪川 賢一 (室蘭市 室蘭西中)	畠山 博次 (豊富町 豊富中)	藤原 秋彦 (根室市 光洋中)			山田 誠一 (安平町 早来中)	立花 和実 (伊達市 伊達中)	鏡 武志 (苫小牧市 青翔中)
			越田 公美 (札幌市 東月寒中)						
事 務 所	北海道中学校長会事務所 〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目 敷島プラザビル TEL : 011-251-1344 FAX : 011-251-1302 E-mail : dotyu-kotyokai@bz04.plala.or.jp						事務主事	尾崎 基	
							会計主事	高橋 寿輔	

表紙に寄せて

## 「稚内公園から望む稚内市街」

豊富町・兜沼中学校

佐藤佳弘

大会主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」〈新学習指導要領全面实施、日本のてっぺん稚内から子供に確かで豊かな資質・能力を育てる学校経営のもと、第六三回北海道中学校長研究大会宗谷・稚内大会がコロナ禍によりオンライン形式で開催されました。

宗谷管内の面積は京都府とほぼ同じで、一市九町村で構成されています。宗谷岬からは天気の良い日には遙かにサハリンを見ることができ、西には利尻礼文サロベツ国定公園があります。宗谷の市町村はそれぞれ全道全国で人気が高い特産品をもっています。

表紙は、稚内市中央地区の高台にある稚内公園から望む稚内市の街です。公園からは特徴的な形状の南防波堤ドームや利尻を結ぶフェリーターミナル、そして中央に道中大会の会場に予定していたホテルを見渡すことができます。また、公園内には氷雪の門や九人の乙女の碑もあります。

宗谷・稚内大会は、オンラインではありませんでしたが全道より一五〇余名の参加をいただき、大きな接続トラブルもなく無事に終了できました。大会運営に御協力いただいた宗谷校長会の皆様はじめ、道中事務所の皆様、そして全道から御参加いただいた校長先生・関係者の皆様の御理解と御協力に、現地実行委員会一同、心より感謝申し上げます。

## 編集後記

令和三年度版会誌「全道中」第91号が、皆様の多大なる御協力により出来上がりました。ここにお届けいたします。

北海道教育委員会教育長 倉本博史様、北海道立教育研究所長 鈴木淳様の「潮流」への御寄稿をはじめ、「特集」では、先進的な実践をされている会員の皆様から御寄稿いただき、テーマに迫りました。

また、北海道中学校長会役員・理事、各地区役員はじめ多くの会員の皆様に御協力をいただき、各地区の活動、論考、文芸そして各地区の風土紹介など、多彩な内容を掲載することができました。会員の皆様の職能向上や北海道における教育情報源の一助となれば幸甚に存じます。

最後になりますが、コロナ禍により多方面への目配り、心配りが求められる中、快く御協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

## 全道中 第91号

発行 令和四年三月一日

発行者 北海道中学校長会

会長 三浦利章

札幌市中央区北一条西三丁目

札幌プラザビル内

電話(〇一一)二五一一―一三四四

FAX (〇一一)二五一一―一三〇二

編集 北海道中学校長会情報部

印刷所 佐藤印刷株式会社

札幌市北区北七条西八丁目一

電話(〇一一)七二六―一三三四五



北海道中学校長会の歌

清水 弘 作詞  
上元 芳男 作曲

北海道中学校長会の歌

Moderate mp

どーう こくーの いくさ をこえーて あ  
ら いへーの きぼう 勝たけーく た

たーらしーき じだい をひらく おさ  
のーもしーき わかき せだいの のさ

お い な る ながいにもえ て われ  
ち おお き みよの あげぼ の われ

ら たち たり われら たち たり  
ら はた さん われら はた さん

mp

い く せいそう ひとほか われど

きょう いくの しめいとすじ

mf

さくほくに りそうかかけて われつどえり み D.S.

2. v mf f *molto rit* > *div*

ん 道中 道中 はえあれ 道～中

慟哭の いくさを越えて

新しき 時代を拓く

大いなる 理念に燃えて

吾ら 起ちたり(くり返し)

幾星霜 人は変れど

教育の 使命一筋

朔北に 理想かかけて

吾ら 集えり

未来への 希望豊けく

頼母しき 若き世代の

幸多き み代のあげぼの

吾ら 果たさん(くり返し)

道中 道中

栄あれ 道中